

赤ちゃんから  
おとなまで

# 聖書教育

2020年

4  
5  
6  
月号

総主題

時代を生きる教会

テーマ

神の言葉が働いている



ヨハネ・使徒言行録・1テサロニケ

#### 教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の中領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。

日本バプテスト連盟 1971年制定、1999年改訂

聖書教育ホームページ <https://www.bapren.com/>

#### 1 目次

#### 2 プログラム表

#### 3 準備のための聖書日課

川上敏夫

#### 特集・連載

#### 4～ **特集** ペンテコステメッセージ

松藤一作

#### 6～ **特集** 新プログラム紹介

長尾なつみ

#### 8～ **連載** 時代を生きる教会として「命どう宝の日を覚えて」

踊 純子

#### 10～ **連載** 今、改めて「教会学校の目的」に目を向ける

中田義直

#### 12 執筆者紹介

#### 13 **概論** この時代に「テサロニケの信徒への手紙一」を読む

加藤英治

#### 今号の展開例 ● 第1課～第13課

#### 14～ 聖書の学び・成人科

加藤英治

#### 16～ みんなで聴く聖書のおはなし

加藤英治

#### 17～ 青少年科

本山大輔

#### 18～ 幼小科

田森恭子

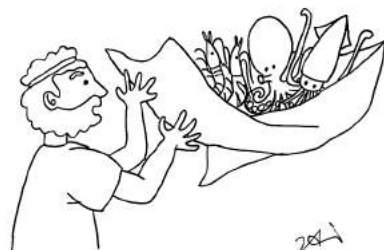
#### 92～ 暗唱聖句手話

塩山幸子

#### 94～ 暗唱聖句カード 新共同訳・口語訳

#### 99 「聖書教育」読者アンケート

#### 100 次号予告





# 2020年度 聖書教育 2020～2022年度プログラム

## 総主題 時代を生きる教会

| 課  | 月 日    |          |                | 週題                  | 聖書箇所                         |
|----|--------|----------|----------------|---------------------|------------------------------|
| 1  | 4月5日   | 受難週      | ヨハネ・使徒・テサロニケ   | 十字架を自ら背負うキリスト       | ヨハネ19:17～30                  |
| 2  | 4月12日  | イースター    |                | 復活のキリストはうしろから       | ヨハネ20:1～18                   |
| 3  | 4月19日  |          |                | 見ること、信じること、生きること    | ヨハネ20:19～29                  |
| 4  | 4月26日  |          |                | イエスさまの食卓に招かれて       | ヨハネ21:1～14                   |
| 5  | 5月3日   |          |                | キリストの証人となる          | 使徒1:3～11                     |
| 6  | 5月10日  |          |                | 一同は聖霊に満たされ          | 使徒2:1～13                     |
| 7  | 5月17日  |          |                | ナザレの人イエス・キリストの名によって | 使徒3:1～10                     |
| 8  | 5月24日  |          |                | 散らされた人々は            | 使徒8:1後半～8                    |
| 9  | 5月31日  | ペンテコステ   |                | 神は人を分け隔てなさらない       | 使徒10:9～16, 44～48(10:17～43参照) |
| 10 | 6月7日   |          |                | 主に倣う者となっている         | 1テサロニケ1:1～10                 |
| 11 | 6月14日  |          |                | 神の言葉が働いている          | 1テサロニケ2:1～13                 |
| 12 | 6月21日  | 沖縄命どう宝の日 |                | 主にあって立たされて          | 1テサロニケ3:1～13(2:17～20参照)      |
| 13 | 6月28日  | 神学校週間    |                | 主と共に生きる             | 1テサロニケ4:13～5:11              |
| 14 | 7月5日   |          | 1・2テサロニケ・出エジプト | いつも喜んでいなさい          | 1テサロニケ5:12～28                |
| 15 | 7月12日  |          |                | かの日、主が来られるとき        | 2テサロニケ1:1～12                 |
| 16 | 7月19日  |          |                | 慌てふためかないで           | 2テサロニケ2:1～17                 |
| 17 | 7月26日  |          |                | たゆまず善いことを           | 2テサロニケ3:1～18                 |
| 18 | 8月2日   |          |                | エジプトのイスラエル人         | 出エジ1:1～14                    |
| 19 | 8月9日   | 平和       |                | 抵抗の知恵・守られる命         | 出エジ1:15～2:10                 |
| 20 | 8月16日  |          |                | 神の共感・モーセの召命         | 出エジ3:1～15(3:16～22参照)         |
| 21 | 8月23日  |          |                | モーセとアロンと            | 出エジ6:28～7:7                  |
| 22 | 8月30日  |          |                | あなたと子孫のための定め        | 出エジ12:21～28(12:1～20参照)       |
| 23 | 9月6日   |          |                | 神の導き・荒れ野の道          | 出エジ13:17～22                  |
| 24 | 9月13日  | 教会学校月間   |                | 一人では負いきれない          | 出エジ18:13～26(18:1～12参照)       |
| 25 | 9月20日  |          |                | 新しい生き方・十の言葉         | 出エジ20:1～17                   |
| 26 | 9月27日  |          |                | モーセの執り成し            | 出エジ32:1～14                   |
| 27 | 10月4日  |          | コヘレト・マタイ       | 風を追うようなこと           | コヘレト1:1～18                   |
| 28 | 10月11日 |          |                | 何事にも時がある            | コヘレト3:1～17                   |
| 29 | 10月18日 |          |                | 共に労苦すれば             | コヘレト4:1～12                   |
| 30 | 10月25日 |          |                | 空しい人生の日々に           | コヘレト7:15～22                  |
| 31 | 11月1日  |          |                | どんなに労苦し追求しても        | コヘレト8:8～17                   |
| 32 | 11月8日  |          |                | それでも種を蒔こう           | コヘレト11:1～6                   |
| 33 | 11月15日 |          |                | 創造主に心を留めよ           | コヘレト12:1～2                   |
| 34 | 11月22日 |          |                | 神を畏れ、その戒めを守れ        | コヘレト12:9～14                  |
| 35 | 11月29日 | 世界祈禱週間   |                | 「主の祈り」でつながれる        | マタイ6:9～13                    |
| 36 | 12月6日  |          |                | キリストに結ばれて           | マタイ1:1～17                    |
| 37 | 12月13日 |          |                | 神は共におられる            | マタイ1:18～25                   |
| 38 | 12月20日 | クリスマス    |                | 星が先立ち               | マタイ2:1～12                    |
| 39 | 12月27日 |          |                | わたしが告げるまで           | マタイ2:13～23                   |
| 40 | 1月3日   |          | マタイ            | これはわたしの愛する子         | マタイ3:13～37                   |
| 41 | 1月10日  |          |                | 神の言葉で生きる            | マタイ4:1～17                    |
| 42 | 1月17日  |          |                | 一点一画も               | マタイ5:17～20                   |
| 43 | 1月24日  |          |                | 権威ある言葉              | マタイ8:1～17                    |
| 44 | 1月31日  | 協力伝道週間   |                | 平和があるように            | マタイ9:35～10:15                |
| 45 | 2月7日   | 信教の自由    |                | 恐れるな、この世の力を         | マタイ10:26～31                  |
| 46 | 2月14日  |          |                | 今の時代を何にたとえようか       | マタイ11:2～19                   |
| 47 | 2月21日  |          |                | 自分の十字架を背負って         | マタイ16:13～28                  |
| 48 | 2月28日  |          |                | 柔和なお方               | マタイ21:1～11                   |
| 49 | 3月7日   |          |                | その日、その時を知らないから      | マタイ25:1～13                   |
| 50 | 3月14日  |          |                | 小さい者の一人に            | マタイ25:31～46                  |
| 51 | 3月21日  |          |                | 共に目を覚まして            | マタイ26:36～46                  |
| 52 | 3月28日  | 受難週      |                | 十字架上の神の子            | マタイ27:32～56                  |

2020年1月現在

2020年4月

準備のための聖書日課

1 日 ⑩ 詩編22:7~16  
2 日 ⑩ 詩編69:14~22  
3 日 ⑩ ヨハネ1:1~13  
4 日 ④ ヨハネ4:7~12  
5 日 ⑩ ヨハネ19:17~30  
6 日 ⑩ ヨハネ19:31~37  
7 日 ⑩ ヨハネ19:38~42  
8 日 ⑩ ルカ24:1~12  
9 日 ⑩ ヨハネ14:1~6  
10 日 ⑩ ヨハネ14:7~14  
11 日 ④ ヨハネ20:1~10  
12 日 ⑩ ヨハネ20:11~18  
13 日 ⑩ ヨハネ9:35~39  
14 日 ⑩ ヨハネ14:25~31  
15 日 ⑩ ペトロ1:3~9

口は渇き、舌ははり付く  
酢を飲まされて  
暗闇の中のまことの光  
ここに愛がある  
**十字架を自ら背負うキリスト**  
流れ出る血と水  
新しい墓への埋葬  
輝く衣を着た二人の天使  
神への道を知る  
父なる神のもとへ  
週の初めの日、朝早くに  
**復活のキリストはうしろから**  
神による現実を見よ  
与えられる主の平和  
今見えなくとも信じる

16 日 ⑩ ヨハネ1:1~4  
17 日 ⑩ ヨハネ16:4後半~15  
18 日 ④ ヨハネ16:16~24  
19 日 ⑩ ヨハネ20:19~29  
20 日 ⑩ ルカ5:1~11  
21 日 ⑩ ルカ24:28~35  
22 日 ⑩ ルカ24:36~43  
23 日 ⑩ ヨハネ6:1~15  
24 日 ⑩ ヨハネ17:1~19  
25 日 ④ ヨハネ20:30~31  
26 日 ⑩ ヨハネ21:1~14  
27 日 ⑩ ヨハネ21:15~19  
28 日 ⑩ ヨハネ21:20~25  
29 日 ⑩ ルカ24:44~53  
30 日 ⑩ 列王記下17:24~33

永遠の命を見る  
真理の霊を受けよ  
悲しみは喜びへと変わる  
**見ること、信じること、生きること**  
網が破れるほどの大漁  
パンを手に取られる復活の主  
魚を食される復活の主  
ティベリアス湖畔で  
知ることは信じること  
神の子メシアを信じるために  
**イエスさまの食卓に招かれて**  
愛の完成  
復活の主に従う  
都にとどまれ  
サマリア人の起源

2020年5月

準備のための聖書日課

1 日 ⑩ 使徒言行録13:44~52  
2 日 ④ 使徒言行録1:1~2  
3 日 ⑩ 使徒言行録1:3~11  
4 日 ⑩ 使徒言行録1:12~26  
5 日 ⑩ 申命記16:9~12  
6 日 ⑩ ヨハネ3:1~15  
7 日 ⑩ エゼキエル37:1~9  
8 日 ⑩ コリント12:1~11  
9 日 ④ エフェソ4:7~16  
10 日 ⑩ 使徒言行録2:1~13  
11 日 ⑩ ルカ22:54~62  
12 日 ⑩ 使徒言行録4:5~14  
13 日 ⑩ 使徒言行録4:23~31  
14 日 ⑩ 使徒言行録2:14~36  
15 日 ⑩ 使徒言行録2:37~42  
16 日 ④ 使徒言行録2:43~47

地の果てに至るまで  
使徒の動きの始まり  
**キリストの証人となる**  
主の復活の証人マティア  
五旬祭・七週祭  
風は思いのままに吹く  
霊よ、吹き来れ  
全体の益となるために  
キリストの体を造り上げる  
**一同は聖霊に満たされ**  
主のまなざしに触れて  
イエス・キリストの名によって  
聖なる僕イエスの名によって  
神から遣わされたナザレの人イエス  
賜物としての聖霊  
皆ひとつとされて

17 日 ⑩ 使徒言行録3:1~10  
18 日 ⑩ ヨハネ4:39~42  
19 日 ⑩ 使徒言行録6:1~7  
20 日 ⑩ 使徒言行録6:8~15  
21 日 ⑩ 使徒言行録7:44~53  
22 日 ⑩ 使徒言行録7:54~8:1前半  
23 日 ④ 使徒言行録11:19~26  
24 日 ⑩ 使徒言行録8:1後半~8  
25 日 ⑩ 申命記14:3~21  
26 日 ⑩ マルコ7:14~23  
27 日 ⑩ エフェソ2:14~22  
28 日 ⑩ エフェソ4:1~6  
29 日 ⑩ 使徒言行録10:1~8  
30 日 ④ 使徒言行録10:17~43  
31 日 ⑩ 使徒言行録10:9~16、44~48

ナザレのイエス・キリストの名によって  
世の救い主イエス  
霊と知恵に満ちた七人  
天使のようなステファノ  
かたくなで、聖霊に逆らう人々  
神の右に立ちたもうイエス  
信じて主に立ち帰った人々  
**散らされた人々は**  
汚れたものと清いもの  
すべての食べ物や清い  
ひとつの霊に結ばれて  
霊による一致を保つために  
神を畏れるコルネリウス  
すべての人の主イエス  
神は人を分け隔てなさらない

2020年6月

準備のための聖書日課

1 日 ⑩ 使徒言行録11:1~18  
2 日 ⑩ 使徒言行録13:1~3  
3 日 ⑩ 使徒言行録17:1~9  
4 日 ⑩ コリント13:8~13  
5 日 ⑩ ローマ15:1~6  
6 日 ④ フィリピ3:12~21  
7 日 ⑩ テサロニケ1:1~10  
8 日 ⑩ イザヤ40:6~8  
9 日 ⑩ ヨハネ8:39~47  
10 日 ⑩ コリント2:14~17  
11 日 ⑩ コリント11:1~11  
12 日 ⑩ コリント12:11~18  
13 日 ④ エフェソ1:15~23  
14 日 ⑩ テサロニケ2:1~13  
15 日 ⑩ ローマ14:7~12

どの人にも命を与えてくださる神  
派遣されるパウロとバルナバ  
いつものように伝道するパウロ  
信仰と希望と愛  
キリスト・イエスに倣って  
使徒パウロを模範として  
**主に倣う者となっている**  
神の言葉はとこしえに立つ  
神の言葉を聞くのは誰か  
神の言葉を売り物とせず  
熱い思いをもって  
喜んで自分自身を使い果たそう  
神の力による絶大な働き  
**神の言葉が働いている**  
主のために生きる

16 日 ⑩ フィリピ2:19~24  
17 日 ⑩ コリント16:13~14  
18 日 ④ フィリピ4:1  
19 日 ⑩ テサロニケ2:14~16  
20 日 ④ テサロニケ2:17~20  
21 日 ⑩ テサロニケ3:1~13  
22 日 ⑩ マルコ14:32~42  
23 日 ⑩ コリント15:12~28  
24 日 ⑩ コリント15:50~58  
25 日 ⑩ エフェソ6:10~20  
26 日 ⑩ ヘブライ13:7~16  
27 日 ④ ペトロ2:3~8  
28 日 ⑩ テサロニケ4:13~5:11  
29 日 ⑩ テサロニケ5:12~22  
30 日 ⑩ テサロニケ5:23~28

確かな人物デモテ  
信仰に基づいてしっかり立て  
主によってしっかり立て  
異邦人の救いを求めて  
サタンに妨げられた再訪  
**主にあって立たされて**  
目を覚まして祈っていない  
主を信じて眠りについた人々  
最後のラッパの鳴るとき  
神の武具を身につけよ  
主は永遠に変わることのない方  
主の忍耐に心を向けよ  
**主と共に生きる**  
いつも喜び、祈り、感謝せよ  
この手紙を読み聞かせよ





# ペンテコステ メッセージ

聖霊によつて砕かれ、  
新たに作り出される  
関係を生きる

## 使徒言行録 2章1～13節



大宮バプテスト教会員  
松藤 一作

ペンテコステを、私たちは「聖霊降臨日」として祝います。これは、もともとユダヤ教の過越祭から数えて50日目に祝われていた「五旬節」でしたが、その日、十字架と復活を体験した使徒たちが集まっているところに聖霊が降ったとされるものです。9節以降には、その出来事を目撃した人たちのルーツが列記されています。多様な人たちがその出来事に遭遇し、それぞれのふるさとの言葉で、「神の偉大な業」を聞いたのです。

ここに、聖霊の業としての《教会の誕生》を見る見方もありますし、また様々な国の言葉が多様に語られることから《宣教の広がり》を見る見方もあります。また、聖霊の働きとしての《異言の原型》を見る見方もあるでしょう。

昨今、国境を越えて自由に人が行き来するようになり、日本社会でも多くの外国人が暮らすようになりました。こうした社会の変化と連動するように、教会においても、それぞれに異なった背景・ルーツを持つ人たちが礼拝に集まってくるようになりました。私が以前牧師の働きをさせていただいていた教会でも、アメリカ、中国、韓国をはじめ、ミャンマー、フィリピン、ベトナム、ソロモン諸島、パキスタンなど、多くの国の人たちとの出会いがありました。こうした人々との出会いの中で、共に礼拝を守ることの豊かさを味わうと同時に、そのための工夫も必要でしたし、それまで積み上げてきた教会の形が変化させられることも経験させられました。例えば、週報の漢字にフリガナを付けました。そうした週報の文字を辞書で調べ、意味を理解し、懸命に日本語を覚えようとしている姿から、彼ら、彼女らの日本での生活が、いかに

大変であるのか、そのほんの一部分を垣間見させてもらう思いでした。さらに、週報だけでなく、礼拝や教会の雰囲気も少しずつ変化していきました。そして、「これが私たちの教会」と思っていた雰囲気が砕かれ、壊されていくところにこそ、出会いによる新たな関係が起こされるということを感じることもできました。

聖霊の働きをどう理解するかについては様々な捉え方があるでしょう。私は聖霊の働きを、神と人、人と人との関係をつなぎ合わせ、結び付けるものとして理解しています。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えない」(1 コリ 12:3) とあるように、聖霊は私たちに信仰を与えて告白へと促し、神との関係へと導いてくれます。また、ペンテコステの出来事は、聖霊によって多様な人々が結び合わされて、教会の群れ・交わりがつくり出されたことをものがたります。

けれどもペンテコステの出来事は、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」ことから始まっています。この箇所には「…のような」という表現が繰り返し記されていることから、実際にどのような出来事が起こったのか定かではありません。けれども、突然、激しい風(のような音)が、天から、そして家中に響き渡ったというのですから、その場に居た人たちにとっては、恐怖を感じるような出来事であったに違いありません。さらに、この激しい風が、外だけでなく、家の中にまで入ってきたという表現が示そうとしているのは、聖霊の働きは私たちの内側を掻き乱し、整然としていることさえできないようなもの

であることの暗示であるように思えます。つまり、聖霊がもたらす関係性とは、それが神との関係であれ、人との関係であれ、それまで自分が積み重ねてきた“安定”の上に、爽やかに、新しいものがそっと添えられるようなものではなく、実はむしろ、そうしたものが激しく掻き乱され、垣根を取り壊しながら迫ってくるものなのでしょう。しかし、それ故にこそ、私たちは本当の意味で自らを開かせられ、新しく豊かな関係・交わりへと導かれる経験をすることができるのではないのでしょうか。その意味で聖霊の働きは、私たちの中に新しい関係をつくり出すことを妨げようとするものを取り壊す働きをも含まれているのかもしれない。

今年、日本でオリンピックが開催され、世界各国から多くの人々が日本を訪れようとしています。そうした華々しい国際交流と併行して、「日の丸」が掲げられ「君が代」が流されてナショナリズムを高揚する演出も強調されることでしょう。その中で、何かが覆い隠されたり、誤魔化されるようなことがあってはなりません。日本で生活をしている外国人は270万人と言われていますが、その取り巻く労働環境や人権状況の劣悪さは広く知られています。このことは、早急に見直されなければならないはずです。

聖霊は、私たちの内側を打ち砕き、そこから私たちを他者へと開かせ、それまでになかった新しい関係へと招いてくれます。この出来事を示され信じる私たちは、この聖霊に促されて、他者との向き合い方を大きく変えながら、新たな関係の中で「神の偉大な業」を分かち合う者になりたいものです。

総主題

# 「時代を生きる教会」

## 『聖書教育』70周年

『聖書教育』は、2020年で70周年を迎えました。改めて、皆さまに感謝を申し上げます。これまで歩んできた一冊一冊を振り返ると、積み重ねてきた言葉の数々には、諸教会が味わってきた教会学校の恵みの歴史が詰まっています。何よりも、手に取って読んでくださる方がいるから、続けてくることができた働きです。編集作業には、常に緊張が伴いますが、教会学校のみ言葉の分かち合いの中で用いていただけることを願い、これからも誠実に取り組んでまいります。引き続きこの働きをおぼえてお祈りいただければ幸いです。

## 時代を生きる教会として

『聖書教育』誌は、この2020年度から新プログラムをスタートします。総主題を「時代を生きる教会」としました。

私たちバプテスト教会は「時代を生きる教会」であることを大切にしてきました。固定化した信仰告白としての「信条」を持たず、聖書を通して自らの信仰、教会の在り方、福音理解かそりを省み、時代の中で時代に向けて「信仰告白」を語り続けてきたのです。そのようなバプテストであることを確認しつつ、聖書と向き合っていくことを願いました。

それでは、今という時代はどのような「時代」なのでしょう。人間の命が軽んじられ、人と人とのつながりは分断され、孤立化が進んでいる時代と言えるのではないのでしょうか。その中で、それぞれが生きにくさを感じ、悩みを背負って生きています。

そして、この時代の課題に「格差」があります。格差社会は経済的なことだけではありません。例えば、情報についても格差は広がっています。災害時に、スマートフォンを肌身離さず持っている人々には避難ひなんの情報がいち早く届きますが、そうでない人たちに情報が届くことは遅くなります。格差は人の命を脅かす結果を招きます。

また、災害時に、「ホームレス」の方が避難所に入ることができなかったということがありました。経済格差によって軽んじられる「いのち」があることをこの出来事は物語っています。このような「格差社会」という時代に立つ教会は、格差の中に生きる「誰」と向き合っているのでしょうか。社会から弱くされている方、軽んじられている「いのち」に本当に向き合っているのでしょうか。

この時代、「いたみ」がすぐそばに、また自分自身の中にあることを私たちは知っています。直視するには、あまりにも辛すぎる「いたみ」、解決できるとは到底思えないほど





2020年4・5・6月号 執筆者会議にて

の「いたみ」です。このような時代のなかで、社会の「格差」や被造物の「いたみ」から目をそらさずに聖書の言葉と向き合っていく『聖書教育』でありたいと願っています。私たちはそのような聖書との向き合いを通して、「いたみ」の中にある私たちへのイエスのまなざしに気づくでしょう。そして、キリストご自身が身を持ってその「いたみ」を引き受けてくださったからこそ、私たちは隣人と共に、今を生きることができるのです。この時代の中で、私たちも「いたみ」を負いながら、共に涙を流し、共に主に励ましをいただく経験をするでしょう。

## 「共同学習」を大切にしながら

聖書は、イエス・キリストを証ししています。『聖書教育』誌はリーダーもメンバーも一緒に聖書を読み合う「共同学習」を大切にする教会学校を応援しています。お互いの声を聴きながら、聖書が語るメッセージに共に耳を傾けていくことを味わっていききたいのです。

新プログラムの特長の一つに青年科と少女少女科を合わせた「青少年科」があります。これまでは、「青年成人科」と区分してききましたが、教会の年齢構成の変化、また、経済

成長やバブルを経験した世代と、経済成長が止まり右肩下がりの社会を生きてきた世代との間に、この時代の受けとめ方が違うのではないかと感じています。10代、20代の生きづらさをおぼえている年代の人々と一緒に生きていくために、「青少年期」を生きる人たちと語りあい、学びあう言葉を探していきたいと思うのです。青少年たちのことを、教会を維持するための将来の担い手や奉仕者として見るのではなく、共に聖書を読み、語り合い、祈り合い、学びあう仲間として共に生きていきたいと願います。

また、「嬰幼児科」と「小学科」を一つにして「幼小科」と区分したことも、新プログラムの特長です。嬰幼児に向けては、動きのある活動に力を入れ、ワークシートは小学生向きに整えてまいります。

今、あらためて「言葉」を発信する者の責任を重く受け止めています。そして、これからも変わらず『聖書教育』が大事にしていきたいことは、この時代の中で「いたみ」に向き合い、「言葉」と「表現」によって排除される人々がいないように心を尽くすということです。容易なことではありませんが、そのことに誠実に取り組んでいくことが、「時代を生きる教会」に与えられている大切な課題であると考えています。

# 6・23 「沖縄(命<sup>ぬち</sup>どう宝<sup>たから</sup>)の日」 を覚えて



## 私と沖縄の出会い

真っ青な空、コバルトブルーの海、緑豊かな亜熱帯の森、美味しいフルーツ、穏やかな人々など、沖縄はかつて私にとって<sup>あこが</sup>憧れの島、癒<sup>いよ</sup>しの存在でしかありませんでした。

そのイメージが一変したのは28年前、修学旅行から戻った長男から沖縄平和学習の話聞いた時でした。アジア・太平洋戦争末期に繰<sup>す</sup>り広げられた沖縄地上戦の凄まじさを、堰<sup>せき</sup>を切ったように語る息子の言葉と、集団自決の地チビチリガマ（自然壕）から持ち帰った蛇<sup>へび</sup>の脱殻<sup>ぬけがら</sup>、その劣悪な状況下で逝<sup>い</sup>った人々に思いを馳<sup>は</sup>せ、私たちは心を揺さぶられました。その年から家族旅行の定番は沖縄になったのです。やがて沖縄が強いられている不条理な現実とははや他人事ではなく、私自身の事がらとなっていきました。数年後、沖縄をめぐる問題は日本バプテスト女性連合（以下女性連合）で共有する重要な課題<sup>もんもん</sup>となりました。それは思いと行動のはざま<sup>もんもん</sup>で悶々としていた私にとって、神さまの導きにほかなりませんでした。



## 女性連合と沖縄の出会い

2006年、第34回女性連合総会の時でした。  
<sup>な はしんとしん</sup>那覇新都心キリスト教会（当時伝道所）から、「沖

縄地上戦終結の日とされる6月23日を覚えて、沖縄の平和のために毎年祈りましょう」と提案され、多くの女性たちの賛同を得て承認されました。

女性連合は直ちに6・23「沖縄（命<sup>ぬち</sup>どう宝<sup>たから</sup>）の日」推進委員会を立ち上げ、活動を具体化していきました。まず6月23日を6・23「沖縄（命どう宝）の日」と制定、女性連合全体で祈りを合わせる日としました。「命どう宝」とは、沖縄で代々伝えられている教えで、「命こそ最も大切な宝」という意味です。そして「知る・祈る・共有する」の3項目をスローガンに、推進活動が始まったのです。

「知る」…平和学習用DVD、学習資料冊子を作成、沖縄の歴史、風土、人々の営みを詳しく解説するほか、小羊会も親しめる内容に整えて全年齢層で学べる教材を提供しました。

「祈る」…推進委員会では年に4回「祈り便」を全国の教会・伝道所に発信し、沖縄の「時々



刻々の祈り」を共有できるようにしました。祈り便最新号は2020年3月1日配信の第52信、すでに11年に及ぶ祈りの積み重ねがなされているのです。

「共有する」…2008年から毎年6月23日前後に3泊4日の沖縄学習ツアーをスタート、全国から友が集い、沖縄戦の追体験と基地課題を身をもって知る旅に出かけています。参加者は戦跡<sup>せんせき</sup>を辿り、そこで非業の最期を遂げた人々の声なき声に耳を澄ませ、悲しみや痛み<sup>いたみ</sup>に思いを馳せます。また辺野古のキャンプシュワブの前で長年座り込みを続ける地元の方から、基地がどれほど人々のいのちと生活<sup>おびや</sup>を脅かしているかを直接伺います。参加者はまさに五感をフル稼働<sup>かどう</sup>して沖縄を学ぶのです。昨年の首里城の焼失は、ツアーで訪れていただけに残念でなりません。一刻も早い再建を願うばかりです。

沖縄バプテスト連盟の女性会の方がたとえ、回を重ねるごとに相互理解が深まり、親しい友との再会もツアーの楽しみの一つとなりました。また沖縄バプテスト連盟主催の合同平和祈禱会、普天間基地前での「ゴスペルを歌う集い」にも参加して、平和を求める人々との交流はますます広がりをみせています。

学習ツアーはすでに12回を重ね、参加者の延べ人数は400名にまでのぼっています。女性会員に限らず幅広い年齢層から様々な方が参加、毎回豊かな交流が持たれています。今年度は2020年6月22日(月)～25日(木)、第13回学習ツアーを開催の予定です。



## 忘れられない言葉

1944年、学童疎開船対馬丸沈没<sup>がくどう そ かいせん つしままるちんぼつ</sup>によって1500人もの貴い命<sup>しろま</sup>が海に沈みました。故城間



しょうすけ 祥 介先生は平和の礎<sup>いしじ</sup>の前で、「ここに刻まれた城間孝子は僕の大切な妹、命を助けるために乗せた船で生涯を閉じました。みなさん、これが戦争の実態なのです」と語り、文字版を愛おしそうに撫<sup>な</sup>でられました。その姿は今も目に焼き付いています。貴重な証言者が次第に召されている現実<sup>じやうけん</sup>に焦りを覚えます。

辺野古の海辺で出会った80代の女性は、「戦争で何もかも失った私らにとって、この海は命をつなぐ宝の海だった。魚やモズクをとって子どもに食べさせ何とか生き延びたさあ。その美ら海<sup>ちゅらうみ</sup>を孫子の代まで残してやりたい、なんでそれが許されないの？もう戦争なんてこりごりさ」と語られました。人々は今日もまた、忍耐強く座り非暴力による基地反対を表明し続けているのです。



## 現代を生きる教会として

私たちは今という時を信仰者として歩んでいます。キリストの心を自らの心とする私たちは、もはや沖縄の苦しみを見過ごしにはできません。私たちがまた沖縄を苦しめている一人でもあるのですから。沖縄に行くと、そこで人々に寄り添い続けるキリストにお会いできるのです。沖縄の平和はすなわち私たちの平和、「平和を実現する者は幸い」と言われる主に従って、誠実に歩みたいと願っています。





## 今、改めて 「教会学校の目的」に目を向ける

# 「教会学校の目的」と 時代背景

1

2020年度から『聖書教育』は新しいプログラムをスタートします。この区切りを機会に改めて「教会学校の目的」に目を向けたいと思います。何かを行うとき、その「目的」を確認することは大切だからです。

私たちは大切な活動であっても、長く積み重ねていくうちに「これまでもやってきたから、これからも続ける」というように「<sup>けい</sup>継続」が「目的」となってしまうことがあります。また、熱心になればなるほどその「活動」を「行うこと」が目的となってしまうことがあります。継続は大切です。しかし、目的を忘れることの弊害もあります。その一つが、活動の硬直化です。例えば、「何のために行っているかがわからないので、これまで通り繰り返す」というように、プログラムなどの持ち方が硬直化してしまうのです。今、与えられている状況の中でどのように教会学校を持つことが良いのかを、各個教会が柔軟に考えていくためにも、「教会学校の目的」を確認することには意義があるでしょう。

### 現在の「教会学校の目的」 (1971年制定 1999年改訂)

「教会学校の目的は、その活動を通してすべての人びとがイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の全領域

において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある」

『聖書教育』誌には毎号「教会学校の目的」が記載されています。これは1999年に改訂されましたが、1971年に制定された「目的」は次のようになっています。

「(前文) 教会教育が隣人愛に生きる真の人へと自己変革された人格の形成を目指すものであることを再認識しつつ、教会学校、幼稚園、保育園、教会学校その他、教会教育のあらゆる領域において、さらに充実した活動の展開をはかる」

「教会学校の目的は、その活動を通してすべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、生の全領域において主をあかしする生活を確立していくことにある」

まず、気づくのは本文より文字数の多い「前文」が付されていたこと、そして、表題が「日本バプテスト連盟・教会教育の目的」となっていることです。つまり、前文で教会における教育活動全般の働きが示され、その中の一活動として「教会学校」が位置付けられています。そして、それに続いて「教会学校」の目的が提示されています。

この「日本バプテスト連盟・教会教育の目的」において、幼稚園や保育園を教会における教育の働きと明確に位置付け、さらには「教会学校その他」という可能性の広がりを持た



日本バプテスト連盟 常務理事  
所沢キリスト教会 協力牧師  
中田義直

せています。この背景には、経済的な成長、子どもの増加といったことから教会付属幼稚園の働きが求められ、その働きが非常に活発であったという時代状況があるでしょう。

## 「教会学校の目的」と 「生の全領域」

1971年制定の「教会学校の目的」をそれ以前の「目的」と比較するともう一つの重要な背景が見えてきます。1969年頃まで用いられていた日本バプテスト連盟教会学校部（当時）が示している「教会学校の使命」には、次のように記されています。

**「主の御命令に従って、すべての人々をキリストを信じる信仰告白に導き、かつ、みことばに従ってキリストを求めたもう生活を確立していくように導くことにある」**

これは「目的」ではなく「使命」とされていますが、この言葉の背景にはマタイ福音書28章19節～20節のいわゆる「宣教命令」があるように思えます。つまり、伝道を目的とし、み言葉に従うキリスト者としての「生活を確立」することが「教会学校の使命」とされているのです。

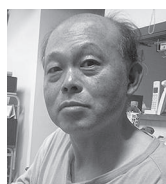
この「教会学校の使命」と1971年制定の「教会学校の目的」を比較したときに注目すべきことは「生の全領域」という言葉が用いられ

たことでしょう。その背景には、教会の使命は人々の魂を救うこと、つまり、「救霊こそが教会の使命であり政治など社会的な事柄に関わるのは教会のすべきことではない」という教会の姿勢に対する批判がありました。このような姿勢に対して、「教会学校の目的」は、社会的な事柄をも含め「生の全領域において主をあかしする生活を確立」することの大切さを示しています。

1992年には全年齢層で同じ聖書箇所を用いる「統一カリキュラム」が『聖書教育』誌で採用される際、当時の宣教部に於いて「教会学校の目的」について6つのコメントが示されました。その一つに「生の全領域としての隣人性、いと小さきものからの視点、平和をつくり出すものとしての視点、いのちを大切にする視点等が含まれる」と記されています。隣人性、小さくされた者の視点、平和を作り出す視点を、現在の「教会学校の目的」は大切にしているのです。

「教会学校の目的」の変遷<sup>へんせん</sup>を振り返ってみましたが、それぞれの時代の中で私たちは教会学校の在り方、キリスト者としてどう生きるべきか、そして、どのように「証し」すべきなのかを問い続けてきたということが、この変遷にあらわれているといえるでしょう。

## 執筆者紹介



概論・聖書の学び・成人科・  
みんなで聴く聖書のおはなし

かとう えいじ  
**加藤 英治**

日本バプテスト四日市教会 牧師

何と言っても、これは共同作業でした。多くの方の助言や批判をいただきながら、考えがまとまり、文章が整えられていきました。また、聖書のテキストによって、読み方や文体を変えてみようと思いました。福音書と使徒言行録では「物語るように」、手紙では「言葉にこだわって」。各クラスでも、扱う箇所によって違うやり方を試みてみられてはいかがでしょうか。聖書と交わりとの豊かさに触れる体験でした。



青少年科

もとやま だいすけ  
**本山 大輔**

豊前キリスト教会 牧師

執筆者会議や執筆作業において、多くの方々と対話する中で、自分の独善性を知らされ、砕かれ、改めて多様な聖書の読み方の豊かさを体験させていただきました。同じ視点、理解の人々だけが集まるのに力を割くのではなく、異なった視点を持つ人々と共に聖書を読み、対話し、時にぶつかり合いながら、その間に立てくださる主の働きを信じ、多様な人々と共に聖書を読み、祈っていきたいと心から思われています。



幼小科

た もり ぎょう こ  
**田森 恭子**

旭川バプテスト教会 教会員

20年以上前、「自分の糧になるのよ、いつかあなたも!」と言いつつ執筆していた姿を見せてくれた方を思い出しながらの執筆でした。子育てや久々の幼稚園の仕事復帰で毎日あつという間ですが、焦ってパソコンに向かうより、子どもと一緒に過ごす日常や祈りのひと時にヒントをもらいました。一つひとつ違いがある教会、幼小クラス。メンバーとリーダーが、そして神さまが更に豊かに用いてくださると信じて。



表紙

み う ら  
**三浦 あや**

藤沢バプテスト教会 教会員

「新しい風～ペンテコステ～」  
聖書に関わる絵のお仕事をするのが夢でした。感謝です!『聖書教育』の総主題が「時代を生きる教会」になり、「教会の誕生日」といわれる「ペンテコステ」を描きました。聖霊の風が弟子たちに吹いて福音が広がったように、私たちにも教会を通して様々な出会いが与えられますように。教会学校で奮闘しているリーダーの方へ、聖書教育編集部には皆さんの為に祈っている方々がいます。未熟な者ですが一緒にがんばりましょうね!

### 編集後記

いよいよ新しいプログラムが始まりました。「時代を生きる教会」を総主題とした2020年度～2022年度までの3年間のプログラムです。このプログラムがこの時代を生きる教会に与えられる聖書のメッセージとして、礼拝や教会学校において豊かに用いられるように願っています。私自身、一人のバプテスト教会に仕える牧師として「教会」

編集人 長尾なつみ (府中キリスト教会 牧師)

に身を置きつつ、多くの悩みや悲しみと葛藤の中に生きています。その中で『聖書教育』を読んでくださっている皆さまと共に、そして執筆や編集に携わっている方々と学びあいながら、み言葉に出会ってイエスさまにある希望を見いだしていきたいと思います。

\* 2020年1・2・3月号「少年少女科」において訂正がございます。P.59右側 活動の三行目、「建国記念日」ではなく、正しくは「建国記念の日」です。お詫びして訂正させていただきます。



# この時代に 「テサロニケの信徒への手紙 一」 を読む

日本バプテスト四日市教会  
牧師 加藤英治

この手紙は、紀元 50 年ごろに書かれた、新約聖書中パウロの最初の手紙と言われています。宛先のテサロニケ教会があるテサロニケは、「東西交通の中心地で、ローマ帝国マケドニア州の首都として属州総督が置かれ、司法権と行政権を持ち（中略）諸国民の活動舞台であった」（『NTD 新約聖書註解 8 パウロ小書簡』ATD・NTD 聖書註解刊行会）と言われます。

## 患難の中で

この手紙には幾つかのキーワードがありますが、その代表的なものは「苦しみ」に関するものです。「ひどい苦しみ」（1：6）、「激しい苦闘」（2：2）、「同胞から苦しめられた」（2：14）、「あらゆる困難と苦難」（3：7）などです。どのような「困難」や「苦難」があったのでしょうか。

テサロニケでのパウロの伝道について語っているもう一つの箇所は、使徒言行録 17：1～9 です。パウロたちの活動をねたんだ人々が、教会のリーダーと思われるヤソンという人の家を襲い、パウロたちを捕えようとして見つからなかったのが、ヤソンと教会員たちを町の当局者に訴えたことが記されています。その訴えの名目は、「皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っている」でした。「キリスト者は、この世界のなかで、イエ

ス・キリストを遣わしたもうた神をほかにしてまことの王はいない、とするゆえに、皇帝や天皇が神をよそおう、絶対的な国家権力に対立せざるをえないのです」（岸本羊一著『スキャンダラスな人びと』新教出版社）。

「この時代」とはどのような時代でしょうか？ 私たちは 2019 年に起こった、天皇代替わり「騒動」を決して忘れることができないでしょう。テレビも新聞もそれ一色にされ、祝い喜ぶことが「当たり前」であるかのような「空気」が作り出される。それによって、政府や国家が目指す方向性とは違うことを言ったり、したりする人々やグループに対する圧迫や排除の傾向が強められるように思いました。日本社会で圧倒的少数者の一つである私たちキリスト者にも、無縁のことではありません。

## 患難に耐え、 信仰と愛と希望に生きよ

そのような中で、パウロは信徒たちに「患難に耐え、信仰を守り、神と人々への愛に生き、キリスト・イエス来臨の希望に生きよ」と語り、励ますのです。またそのような時代は、考え方や生き方の枠組み（パラダイム）が揺さぶられて、内部的にも教会は危機に直面しますが、その中でも「イエスが共におられる」ことの確実さによって支えられ、希望を持つようにと勧められるのです（13 課）。



# 十字架を自ら背負うキリスト

聖書

ヨハネによる福音書19章17～30節

暗唱  
聖句

イエスは、自ら十字架を背負い、…ゴルゴタという所へ向かわれた。  
ヨハネ 19：17

1課

4月5日

## みずから十字架を背負うイエス

「(神と共にあった)言は神であった」(ヨハネ 1：1) との賛美から始まったヨハネによる福音書は、一貫して「永遠の神の子であるイエス」の姿を描いています。そのような意味において、イエスさまの十字架は、「イエスは、自ら十字架を背負い」(19：17) とあるように、イエスご自身が主体的に自ら引き受け、背負って、進み行かれたものでした。

このヨハネを始めとする各福音書には、人間の有様とりわけ人の罪が、渦巻き、<sup>もうい</sup>猛威を奮<sup>ふる</sup>ってイエスさまに向かって襲<sup>おそ</sup>いかかる様子が、具体的に描かれています。私たちは、そのような側面に、注意深く目を止める必要があるでしょう。「イエスさまは私たちを罪から救い出すために、神のご計画に従って、この世に下<sup>くだ</sup>って来られた。だから、イエスさまの十字架はもともと定められたものであり、したがってそこには、何の葛藤<sup>かっとう</sup>も躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>もなかった」かのよう、私たちは考えがちです。けれども、実はそうではなかったのです。イエスさまがおいでになって、この世において、ご自分の人生をどのような方向にむけて、どのような人々と共に、どのような道において歩もうとされるかということ、それはイエスさまが、まさしく一人の人間として、様々な葛藤や悩みの果てに、選び取られた道ではなかったのでしょうか。それは、当時の社会において、苦しめられた人々、弱くされた人々、排除<sup>はいじょ</sup>された人々と共に食し、その人々にこそ真っ先に神の国への招きが与えられているこ

とを宣言するという道でした。しかし、この世とその権力はイエスさまに反発し、イエスを嫌い、<sup>おどしい</sup>陥れ、殺そうとします。その結果が、この十字架であったのです。ただしこの十字架を、イエスさまは、ただ受身的に与えられ苦しめられたのではなく、それと全く同時に、彼はこれを「自ら引き受け、背負われた」のでした。

このイエスさまの決断と選択においてこそ、「神の愛」が表されている、これがヨハネの信仰告白です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ 3：16、参照ヨハネ 5：19)。

## 「成し遂げられた」 神の救いの業の成就

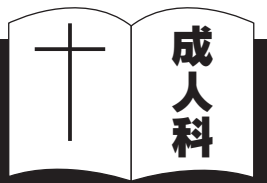
だからこそ、この人間の罪が渦巻く十字架の出来事において、神の言葉が成就され、神の救いの業が実現しているのです。「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書かれた罪状書きは、「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語」で記されていたと言われます(19：20)。当時の全世界の主要な言語で、「イエスが聖書に約束されて来たイスラエルのメシア(救い主) そのお方である」ということが結果として公言されたのです。また、<sup>ざんぎやく</sup>残酷かつ<sup>ざんこく</sup>残酷極まりない十字架刑とそれを取り巻く人々の言動についてもまた、「(それは) 聖書の言葉が実現するためであった」(19：24)、「こうして、聖書の言葉が実現した」(19：28)と言われるのです。

そして最後に、イエスさまはこう叫んで息

を引き取られます。「成し遂げられた」(19:30)。新改訳「完了した」、新共同訳と岩波訳は「成し遂げられた」です。「成し遂げる、実行する、実現させる」という意味の言葉の、完了形受動態が用いられています。だから、「何事かが成し遂げられた、実現された、完成された」という意味になります。「聖書の言葉が実現した。神のご意志が実現し、神の業が成し遂げられた。ここに起こっているのは、ただ人間たちの罪の仕業だけによるものではない。それにはるかに優ることが起こっている。それは神のみ心であり、み業だ。そうして、それは今や完全に成し遂げられた」。

#### 準備のための聖書日課

|     |   |               |             |
|-----|---|---------------|-------------|
| 30日 | ㊦ | ヨハネ18:38後半～40 | 強盗のバラバ      |
| 31日 | ㊦ | ヨハネ19:1～16    | この人を見よ      |
| 1日  | ㊦ | 詩編22:7～16     | 口は渇き、舌ははり付く |
| 2日  | ㊦ | 詩編69:14～22    | 酢を飲まされて     |
| 3日  | ㊦ | ヨハネ1:1～13     | 暗闇の中のまことの光  |
| 4日  | ㊦ | ヨハネ4:7～12     | ここに愛がある     |



### 神の愛は、 悩み葛藤する愛

聖書は、神の愛の勝利と実現とを語っています。けれどもその勝利は、何の苦労も悩みもなく実現されたものではありません。旧約においても、神は時に「後悔し、心を痛め」(創世記6:6)、また「強く愛し(口語訳「ねたみを起し」)、その民を深く憐れまれ」る(ヨエル2:18)お方です。この道の末に「独り子を世にお与えになった」(ヨハネ3:16)神の愛を、み子イエス・キリストが、ご自身の悩みと葛藤を経ての決断と選択をもって「自ら十字架を負う」ことによって、まさに表しておられるのです。このような神さまの姿や愛のイメージについて、語り合しましょう。

### 私たちの悩みと葛藤においても

私たち自身の「どの道を選ぶか」「どう生きるか」という悩み・葛藤、その末の選択と決断について、語り合しましょう。今までの経験からの証しや、今そしてこれからの課題について、可能な限り分かち合しましょう。そのような状況で、この聖書の神、イエス・キリストの神さまは、私たちにどのように関わり、どのように助け導いてくださると思いますか。



# 十字架を自ら背負うキリスト

聖書

ヨハネによる福音書19章17～30節

暗唱  
聖句

イエスは、自ら十字架を背負い、…ゴルゴタという所へ向かわれた。  
ヨハネ 19：17

1課

4月5日

皆さんは、今まで何年間生きて来られたでしょうか。若い方は10年くらいかもしれません。70年、80年という長い年月を生き抜いて来られた方もおられるでしょう。その間に、「どんな道を選び、どんな人生を生きようか」と、葛藤を感じたり、悩んだりしたことがきっとあったのではないのでしょうか。では、イエスさまはどうだったのでしょうか。「イエスさまは神の子だから、そんな悩みなんてきつとなかったんだ」。本当にそうでしょうか。

イエスさまがこの世に生まれて来られたとき、イエスさまも、その頃の世の中、社会を経験し、そこに生きる人々と出会っていかれました。当時のユダヤの社会はローマ帝国の支配の下にあって、多くの人々、特に貧しい人たちは、重い税金と激しく厳しい労働によって苦しめられていました。また、ユダヤの国独特の宗教による支配もあり、その中で差別されたり、仲間はずれにされたりしている人たちがいました。このような人たちに会ったとき、イエスさまはこう思ったのではないのでしょうか。「いや、この人たちこそ、神さまの国に招かれている。この人たちこそ神さまに愛されている。わたしは、そのような神の国を人々に知らせ、宣べ伝えたい」。

でもイエスさまには、葛藤や悩みが起きました。「そんなことを語り行っていくということは、この世の仕組みと力に背くことだ。どんなひどい迫害や苦しみを経験するかもしれない」。結局、イエスさまは



この道を選ばれました。それが神さまのみ心であり、ご計画であると信じたからです。でも、恐れていた通りになりました。当時の社会で力をふるっていた人たちは、イエスさまをきらい、殺そうとしました。そしてとうとう、イエスさまは無実の罪で捕えられ、苦しめられ、今十字架につけられるために、ゴルゴタへの道を歩いています。

皆さん、イエスさまは後悔していると思いますか。いいえ。聖書にこう書いてあるのです。「イエスは自ら十字架を背負い」。この道は、イエスさまが自分から選び、心から「そうしたい」と願って選ばれたものであり、この十字架をイエスさまは自分から進んで背負い、この道を歩まれるのです。このイエスさまの道こそが、イエスさまをこの世に送られた神さまの愛をまざまざと表し、力強く語っているのです。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ3：16）。

# 十字架を自ら背負うキリスト

青少年科



聖書

ヨハネによる福音書19章17～30節

暗唱  
聖句

イエスは、自ら十字架を背負い、…ゴルゴタという所へ向かわれた。  
ヨハネ 19：17

1課

4月5日

## 聖書から…

イエスさまは「主体的」に十字架を背負われました。しかし、その選び取りは決して簡単なものではありません。主体的とは自分の意志・判断によって行動するさまのことですが、現代の社会の中で、私たちが主体的に生きることは容易なことではないように思えます。学校や職場などで自分の思いと反していることを言われて、対話することも許されず、従わなければならないことはないでしょうか。または、自分の意見を言うことよりも周りに合わせてしまうということはありませんか。そのような時、「私」という「主体」が犠牲になり、生きづらい世界が作られているのではないのでしょうか。

既にでき上がった決まりや周りの人々と違う意見を持つことは難しいことです。しかし、イエスさまは当時の社会の規律、当たり前とされていることで痛み、苦しんでいる人々の中で、その規律や常識などにとらわれずに共に生きるために主体的に行動を起こされました。十字架はその極致です。イエスさまは人間の最も醜い部分を引き受け、誰かが犠牲になっていく生きづらい世界を解放するために十字架を担ってくださいました。故に私たちは、誰も犠牲にしてはならないし、犠牲にもなりません。与えられたいのちを主体的に生きながら、同時に他者とも共に生きていくことが求められるのです。

キリストの十字架の愛を知る時、人間は誰もがその人らしく、他者と共に生きるものとされるのです。

## 分かち合おう

- 他者と違う意見を持つことよりも、自分を犠牲にしてでも、誰かに同調して目立たないように生きる方が楽なように感じることもあるかもしれません。しかし、聖書は私たちに「犠牲」でなく「主体的」に生きる大切さを教えてくれています。誰かの犠牲になっていませんか。また、誰かを犠牲にして生きていることはないですか。率直に話し合ってみましょう。
- 自分の思い、感情、意見を主体的にいうことはとても大事なことです。青年期になるまでそのようなことを求められる機会自体が社会でも教会でも少ないのではないのでしょうか。一方、青年と呼ばれるようになり、大人として扱われると突然に主体性を求められ戸惑っていませんか。主体的に教会を担うということの戸惑い、また一方でその意義を共に考えてみましょう。

# 十字架を自ら背負うキリスト

聖書

ヨハネによる福音書19章17～30節

暗唱  
聖句

イエスは、自ら十字架を背負い、…ゴルゴタという所へ向かわれた。  
ヨハネ 19：17

1課

4月5日

## 聖書から…

教会には十字架が必ずどこかにあります。みなさんの教会でも探してみてください。教会にはどうして十字架があるのでしょうか？教会では「じゅなんしゅう受難週」という時を過ごします。「受難」と小学生用の辞書で調べると「苦しめられること」と書いてあります。私たちは、痛かったことや苦しかったことはすぐにでも忘れたいのに、イエスさまが苦しめられた十字架を覚えて過ごすのはなぜでしょう？

イエスさまが苦しめられた事は、昔話や伝記とは違うのです。イエスさまは、苦しめられるとわかっていても逃げませんでした。「自ら十字架を背負い」歩むイエスさまは、今も私たちと一緒にいてくださいます。どこかの誰かの為ではなく、私のために十字架に架かられたのです。イエスさまは、どうして私たちのためにそこまでしてくださるのでしょうか。イースターの前に一緒に考えてみませんか？

## 活動①

### 「十字架を探しに！」

教会にある十字架を探しに行こう！

- ①準備として、リーダーがいくつかの十字架の写真を撮っておきます（プリントやスマホでも可）。
- ②教会の外、礼拝堂の中、窓枠のデザイン、誰かの聖書のしおりにも？リーダーが撮った写真と同じものを探します。もし



かしたら、リーダーが気付かない所にある十字架を見つけるメンバーがいるかもしれませんね。

※小さなメンバーは、使っている部屋の中に隠された十字架の写真を探してもいいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「どうして私のために？」

たくさんの文字が○△□の中に入っています。バラバラに見える文字を、ある法則で並べると一つの文章になります。十字架を背負い歩いてくださったイエスさまのゴルゴタへの道に文字を入れてみましょう。

※低学年にはリーダーがあらかじめ○△□の枠を書いてあげるといいかもしれません。年齢ごとにヒントの数を変えたり、みんなで協力して説いてもいいですね。（ヒント：1. みんなで聴く聖書のおはなし、2. ヨハネ 3：16）



A 7x4 grid with a path and a goal. The path starts at the bottom-left cell (row 4, column 1) and moves right to the bottom-right cell (row 4, column 4). From there, it moves up to the middle-right cell (row 3, column 4). From the middle-right cell, it moves left to the middle-left cell (row 3, column 1). From the middle-left cell, it moves up to the top-left cell (row 1, column 1). The goal is located in the middle-right cell (row 3, column 4), marked with a goal icon and the text "ゴール".

ほ え り な は そ の を  
に 子 独 お 与 と た さ  
を に 神 っ 愛 世 れ た



# 復活のキリストはうしろから

聖書

ヨハネによる福音書20章11～18節

暗唱  
聖句

イエスが、「マリア」といわれると、彼女は振り向いて…「ラボニ」と言った。  
ヨハネ 20：16

2課

4月12日

## 泣き続ける人マリア

あの十字架から三日目の早朝、マリアがイエスさまの墓へ行ってみると、大変な事態が起っていました。墓穴の入口の石が取りのけられ、中を見ると、イエスさまのご遺体もなくなってしまっているのです。彼女は最初、これは「墓荒らし」がこの墓に押し入り、大切な先生のお体を盗んでいったのだと思いました。マリアは、そのまま「墓の外に立って泣いていた」(20：11) のでした。この事態を未だに受け入れられず、混乱と悲しみの余り、一人泣くほかはなかったのでしょう。それは、最も弱っている人の姿です。悲しみが大きすぎる故に、痛みが激しすぎるゆえに、いつまでも泣き続けるほかない人、「新しい道」など見出せず踏み出すことなどできない人、マリアはその時まさにそういう人だったのです。

## 第一の証人として

しかし聖書は告げます、復活の主は、このマグダラのマリアを、「第一の証人」として選んで、出会い、ご自身を現してくださったのです。「後ろをふり向くと、イエスの立っておられるのが見えた」(20：14)。しかしマリアはそれがイエスさまだとは気づきませんでした。それどころか、こんな勘違いさえしてしまったのです。「マリアは、園丁だと思って言った。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください

さい。わたしが、あの方を引き取ります』」(20：15) それは、彼女が墓に向かって立ち、ただ「墓の中」だけを見つめていたからです。「絶対的」に見える死の現実には捕らわれ、それだけに目を注いでいたからです。愛する方が取り去られ、奪<sup>うば</sup>われたという悲しみと痛みだけを見ていたからです。その視線の先には、ただうつろな絶望の空間だけが広がっており、視界が閉ざされてしまっていたからです。

## 復活の主は後ろから

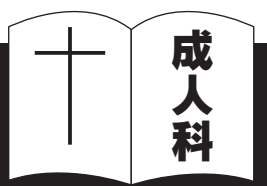
しかし復活の主は、全く違うところに立ち、マリアの視線の外から彼女に呼びかけられました。すなわち、「後ろ」からです。「後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた」(20：14)。あなたの知らなかった道がある、「死の行き止まり」から開かれる道がある、そこから通じている、あなたが知らなかった新しい世界がある。暗闇を越えて光へ、死を越えて命へ、絶望を越えて輝かしい希望へと至る道がある。わたしはその道を知っている。わたしは十字架の苦しみを経てその道へと至り、その道を歩んでいる。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ 14：6)。主はその道から、彼女の「後ろ」から、復活のみ声をかけてくださったのです。

それでも、マリアは気づきません。そこで、イエスさまは「マリアよ」と呼びかけられました。主は名前を呼んで向き合われる方です。「マリアよ、わたしはあなたを知り、あなたを愛している。あなたのとうてい言い表せない悲しみも、だれも理解することもできない

悔しさも、一生かかってもしやせないような傷も、すべてを知っている。ほかでもないそのあなたを、わたしは愛する」。この上なく深いイエスさまの愛が、彼女の胸にしみ込み、伝わったのです。その時、マリアは悟りました。「彼女は振り向いて、ヘブライ語で、『ラボニ』と言った」(20:16)「主は生きておられる。主はいつまでもわたしと共におられる」。マリアはこの信仰によって今、死の中から引き上げられ、新しく生かされたのです。「わたしにすがりつくのはよしなさい」(20:17)とのイエスさまの言葉は、それでも「イエスの体」というものに象徴される、個人的な追憶や愛慕にこだわってしまうマリアの姿を表しているのかもしれません。そのたびに、彼女に「マリアよ」と呼びかけて、復活信仰へと招いてくださる方がおられるのです。

#### 準備のための聖書日課

|     |   |             |             |
|-----|---|-------------|-------------|
| 6日  | ㊦ | ヨハネ19:31～37 | 流れ出る血と水     |
| 7日  | ㊦ | ヨハネ19:38～42 | 新しい墓への埋葬    |
| 8日  | ㊦ | ルカ24:1～12   | 輝く衣を着た二人の天使 |
| 9日  | ㊦ | ヨハネ14:1～6   | 神への道を知る     |
| 10日 | ㊦ | ヨハネ14:7～14  | 父なる神のもとへ    |
| 11日 | ㊦ | ヨハネ20:1～10  | 週の初めの日、朝早くに |



### 復活をどのように信じましたか？

イエス・キリストの復活はキリスト教信仰の中心と言えますが、私たち人間の理性や常識では受け止めることができないのではないのでしょうか。そんな中で、クリスチャンの人たちはどのように復活を受け止め、信じているのでしょうか。復活信仰に至った証しを分かち合いましょう。「まだ信じられない」という方も、クラスにおられるかもしれません。自分の疑問や葛藤を素直に語り合えるような雰囲気作りに努めたいと思います。その中でキーワードは、「後ろから」。自分の思いもよらない方向から、ということではないのでしょうか。

### どのように証しをしていますか？

イエス・キリストの復活を信じてクリスチャンとなった人たちは、「イエス・キリストの証人」として人々に証しをしますが、皆さんはどのような証しをしておられるのでしょうか。「なかなか証しができない」という悩みをも、積極的に語り合ってみましょう。そのときに、弱さと悲しみの中にいたマリアを「第一の証人」とされた、イエスさまの恵みと選びについて考えてみましょう。

# 復活のキリストはうしろから

聖書

ヨハネによる福音書20章11～18節

暗唱  
聖句

イエスが、「マリア」といわれると、彼女は振り向いて…「ラボニ」と言った。  
ヨハネ 20：16

2課

4月12日

あの十字架から三日目の朝早く、いたたまれなくて眠れなかったマリアは、イエスさまのお墓に行きました。すると、大変なことが起こっていたのです。イエスさまの墓の入口がぱかっと開いて、中を見てみると、大切なイエスさまのお体までなくなってしまっていたのです。マリアは思いました。「きっと、墓どろぼうがイエスさまのお体を盗んでいってしまったのだわ」。そこで、マリアは墓の外に出て、ずっと立たまま泣いていました。「イエスさまが死んでしまった。もうだれもイエスさまを助けることはできない。イエスさまが死んでしまい、私たちもどうすることもできない。私たちには、もう何をする力も、生きて行く力も、全部なくなってしまった。おまけに、イエスさまのお体まで盗まれて、私たちには何も残っていない」。マリアは、そんなことばかりを思っていました。ほかのことを考えることもできず、ほかの道を探すことも全くできなかったのです。だから、マリアはひとりぼっちでただ泣き続けるほかなかったのです。

しかし、そんなマリアの後ろから呼びかけた人があります。「なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。「えっ、だれ？ お墓の番人さん？ それなら、イエスさまのお体をどこに移したのか、教えてください」。でも、それは実はイエスさまだったのです。イエスさまは、マリアの「後ろ」に立っていました。彼女がまったく見えず、気づかない場所。



イエスさまという方は、いつもそういう場所に立って、「後ろ」から私たちにも呼びかけてくださるのです。私たちが気づかなかった場所、思いもよらなかったところ、考え、やり方、目標。「死でおしまいではない。私たちの知らない、神さまが与えてくださる命がある。死を越える命、希望も喜びもなくなったところから始まる命がある。わたしはこの命によって生きて、ここからあなたを呼びます。わたしは、あなたにこそ会いたかった。わたしはあなたを愛します。わたしはあなたといつも共にいます」。マリアはまだわかりません。そこでイエスさまは名前を呼んでくださいました。「マリアよ」。何度も聞いた先生の自分を呼ぶあの声の調子、そこに込められたイエスさまの愛が、マリアの心によみがえってきました。マリアは今はっきりとわかりました。「イエスさまだ。先生！」彼女は今、イエスさまが言われる「永遠の命」をいただいたのです。マリアも今、死の中から復活させられたのです。



# 復活のキリストはうしろから

青少年科



2課

4月12日

聖書

ヨハネによる福音書20章11～18節

暗唱  
聖句

イエスが、「マリア」といわれると、彼女は振り向いて…「ラボニ」と言った。  
ヨハネ 20：16

## 聖書から…

マリアは、後ろからくるイエスの声に反応し振り向いています。「振り向く」、それは新しい場所へ目を向けることです。「体(遺体)」にこだわっていたマリアの視点が、振り向くことによって新しい視点へと変わっていきます。一人では決して気が付かなかったこと、わからなかったことが、イエスさまの呼びかけ、み言葉を通して知るようになっていくのです。

死という絶望にだけとらわれ涙しているマリアは、生前のイエスさまにのみこだわる姿です。しかし、復活のイエスとの新たな出会いによってマリアは変えられ、復活を信じる証人となっていくのです。このマリアの体験を、私たちは主日礼拝を通して体験しているのではないのでしょうか。主日礼拝を守る時、私たちは「復活のイエス」と「み言葉」とに出会います。その時、私たちは今までは感じることもなかったことを感じるようになり、目を向けることもなかったことへ、目を向けさせられていきます。

人間は「内側」にある自分の思いだけにとらわれ、それと同調するものばかりを求めがちです。しかし、「み言葉」は自分の「外側」から聴こえてくるのです。その時、マリアが復活の証人という新しい自分に生きたように、私たちは自分が知らなかった自分、新しい自分にされていくのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- 林竹二<sup>はやし たけ じ</sup>という教育者は「学んだことの証しは、ただ一つで、何かがかわることである」(『学ぶということ』国土社 P.95)と言いました。私たちは、今の自分が心地よければよいほど、変わりたいとは思いません。もし、み言葉を読んでも自分自身が何も変わらなければ、み言葉が伝えようとしていることを無駄にしてしまうのではないのでしょうか。み言葉を読むことによって、神さまに自分が「変えられた」という体験があれば分かち合ってみましょう。
- あなたは今、何を見つめていますか。また何にこだわっていますか。それぞれに色々なものがあると思います。み言葉は私たちに見るべきものを「見る力」を与えます。この時代を生きるものとして、見るべきもの(例えば「差別」の問題など)、こだわるべきものがあるはずです。み言葉に示されながら、現代においてあなたが今、見つめるべきだと思っているものがあれば分かち合いましょう。そして、それがどのように教会の働きとつながっているのかを考えてみましょう。

# 復活のキリストはうしろから

聖書

ヨハネによる福音書20章11～18節

暗唱  
聖句

イエスが、「マリア」といわれると、彼女は振り向いて…「ラボニ」と言った。  
ヨハネ 20：16

2課

4月12日

## 聖書から…

大切な物をなくした時、みなさんはどうなりますか？ あせって探しまわる人。今までの行動を振り返り思い出そうとする人。まずはお祈りする人もいるでしょうか。どんな行動を取ったとしても、悲しい思いになることでしょう。

イエスさまが死んでしまっただけでも悲しいのに、物ではなく大切な人イエスさまの体が、あるはずの場所からなくなってしまいました。マリアは、驚きや悲しさや混乱の中でどんな思いでいたのでしょうか？

そんな驚いているマリアに、イエスさまはうしろから声をかけられます。

私たちが気づいていないだけかもしれません。イエスさまは今も見守ってくださいます。混乱の時も悲しみの時も、うれしい時も共にいてくださるのです。

「自分の大切な物は〇〇です」と言って当たれば正解！当たらなくても答えは〇〇ちゃんでした！と顔を見せ合い喜びます。うしろにいる人との出会いを喜びます！

## 活動②

## ワークシート

### 「キリストはどこに？」

●準備●ワークシートのコピー人数分、色鉛筆を四色以上、鉛筆削り

大切な言葉を運んでいたら、おっと大変、落としてしまい、大混乱。全部が混ざってしまいました。でもよくみると、それぞれの文字にはマークが隠されているようです。同じマークは同じ色で塗ってみると…？ どんな文字が隠れているでしょう？

## 活動①

### 「うしろにいる人だ～れ」

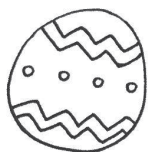
- ①♪「あ～あなたのお名前は？」と歌いながら、みんなの名前と一番大好きな物、大切な物を聞いていきます。
- ②全員の名前と大切な物を聞いたら、メンバーの一人がみんなに背中を向け、目隠しをして座ります。
- ③もう一人のメンバーは、誰かと気付かれない様にうしろから近づき、「だーれだ？」と聞きます。「〇〇ちゃん！」と当たれば正解！もし間違ったら次のヒント

♀のいりやういそ＝〇ー△◎  
ごきん＝〇ー△〇  
ー△とーと＝〇ー△●  
♀のいりやういそ＝〇ー△（※※）＋  
：△※※

### 絵本紹介『三本の木』

文：アンジェラ・エルウェル・ハント／絵：ティム・ジョンク／訳：津久井正美（いのちのことば社）

三本の木を通して、イエスさまの誕生・弟子たちと歩まれた姿・十字架の出来事が語られます。そして最後は日曜日の朝（復活の朝）につながる物語です。多くのメンバーが新学期を迎えるこの時、不安や戸惑いの中にあっても、どこにいてもどんな時も共にいてくださるイエスさまと共に歩むことができますように。



ふ え い っ か つ

イ ー の ス え ん

キ リ タ ス ト

た の は い の ち

ま う し ご

ろ か ら





# 見ること、信じること、生きること

聖書

ヨハネによる福音書20章19～29節

暗唱  
聖句

「見ないのに信じる人は、幸いである」

ヨハネ 20：29

3課

4月19日

## 復活者を見る

聖書は、復活のイエスさまと弟子たちとの出会いを描きます。ストーリーの前半では、一足飛びに「見ないで信じる者は幸い」とは言われず、「見る」ことが強調されています。「(イエスが) 手とわき腹とをお見せになった」、「弟子たちは、主を見て喜んだ」(20：20)。ところがこの時に一人トマスだけはいなかったのです。彼は「見る」ことにこだわります。「あの方の手に釘の跡を見、…この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」(20：25)。再び現れたイエスさまは、トマスに「見る」ことを許されました。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい」(20：27)。「わたしを見たから信じたのか」(20：29)というイエスさまの言葉も、直訳は「あなたはわたしを見たから信じた」というように、<sup>ちよくせつ</sup>直截に事実を述べる言い方であり、「問い詰め」たり「失望」したりするようなニュアンスはありません。

これら「見る」ことの強調によって語られているのは、「イエスの復活」とは、神によって「見る」ことさえもが許されるような「神による現実」であるということです。それは、肉体的な視力をもって見ることは全く違う事柄です。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」(ヨハネ 9：39)。

## 見ないで信じることの幸い

しかし主はさらに踏み込まれます。「見ないで信じることの幸い」を強く語られ、これがこの箇所の結論的メッセージとなっているのです。「イエスは彼に言われた、『…見ないで信ずる者は、さいわいである』」(口語訳 20：29)。トマスはこの転換を経験しました。彼はあくまでも「見る」ことを求めていましたが、復活のイエスに直面したとき、もはや「見る」ことに固執せず、イエスの足元にひざまずき「わが主よ、わが神よ」と、イエスを「信じる」ようにと転換させられたのでした。そして、この「見る」ことから「見ないで信じる」ことへの転換のまさにこの所には、復活のイエス・キリストが立っておられるのです。

なぜ「見ないで信じるのが幸い」なのかについては、この福音書がイエスさまの復活からはるか後(紀元後 90 年頃)を生きる教会とその信仰者に向けて書かれているということが大きいでしょう。彼ら彼女らはまさに、復活のイエスさまを「見ないで信じる」ように招かれ求められているからです。またそれ以上に、イエスご自身が9章で言われたように、「見ている」「見える」と思っていることによって、神の真理からかえって外れてしまうことがしばしば起こるからです。



## 信仰によって、従い、生きる力

トマスは、この復活の主の約束と招きの前に、ひざまずき、告白します。「わが主よ、わが神よ」(20:28)。最初の復活の主との出会いは、「週の初めの日」(20:19)に起こりました。これは、まさに私たちの「主の日の礼拝」が行われる、その日です。そしてそれから「八日の後」(20:26)、これもやはり「主の日」の出来事であったように思われるのです。

この「日」、復活の主との出会いが、今も私たちと教会に起こります。この時、主はご自身が生きておられる方であることを、私たちにも「見せ」示してくださいます。それによって、私たちは「見ずして信じ」、神に従って生きて行く力を、この場においていただくのです。さらにはそこから、今日の社会の

| 準備のための聖書日課 |   |              |             |
|------------|---|--------------|-------------|
| 13日        | ㊦ | ヨハネ9:35～39   | 神による現実を見よ   |
| 14日        | ㊦ | ヨハネ14:25～31  | 与えられる主の平和   |
| 15日        | ㊦ | ペトロ一1:3～9    | 今見えなくとも信じる  |
| 16日        | ㊦ | ヨハネ一1:1～4    | 永遠の命を見る     |
| 17日        | ㊦ | ヨハネ16:4後半～15 | 真理の霊を受けよ    |
| 18日        | ㊦ | ヨハネ16:16～24  | 悲しみは喜びへと変わる |

中で私たちが見させられている不条理、暴力、不正義の中に、見えないけれどもはっきりと立っているイエスさまの命、祝福、神の国の芽を、見えないけれども信じていく生き方へと、復活の主によって送り出されるのです。



### 「見ないで信じる」ことがなぜ大切なのでしょうか？

このことについて、共に考え話し合ってみましょう。一つの考えとして、聖書の神さまは「見えない」お方だからです。また「神の愛、支配、正義、公平」、それは見えません。逆に、世の中の不正や悪の支配の方が、私たちには顕著に見えるように思います。また、「死に打ち勝つ命」も、私たちが「見る」ということは未だできないでいると思います（私たちは皆死んでいきます）。けれども、それらの「見えないもの」は確かに実在し働いていることを、実現し成就された方こそ復活のイエス・キリストであり、彼こそがその現実を確証しておられるのではないでしょか。

### 「週の初めの日」ごとに行われる私たちの礼拝

イエス・キリストの復活が「週の初めの日」であったことから、この日は「主の日」と呼ばれ、キリスト教会はこの日に礼拝を持ってきました。私たちの週ごとの礼拝の中で、どのようにイエス・キリストとの出会いを経験していると思いますか。礼拝に出席したことで、復活の主から大きな慰めや力を受けたと思われることがあったら、互いに証しを分かち合いましょう。

# 見ること、信じること、生きること

聖書

ヨハネによる福音書20章19～29節

暗唱  
聖句

「見ないのに信じる人は、幸いである」

ヨハネ 20：29

3  
課

4  
月  
19  
日

トマスは怒っていました。自分がいない間に、復活されたイエスさまがほかの弟子たちの前に現れたことを聞いたからです。「ぼくを呼んでくれたら良かったのに。それに、イエスさまもイエスさまだ。なんでぼくだけ仲間はずれにしたのかな」。だから、ほかの弟子たちが「ぼくたちはイエスさまを見たんだ」と言っても、まったく聞こうとせず、信じようとしませんでした。「ぼくは信じないぞ。イエスさまが目の前に現れてくれて、その手の釘の跡にぼくの指を差し入れ、そのわき腹の傷にじかにさわってみなければ、絶対に信じないぞ」。

それから1週間後、弟子たちの集まりの中に、今度はトマスも一緒にいました。するとそこへ、突然イエスさまが現れました。そして、トマスの真正面に立たれたのです。トマスはびっくりぎょうてん、腰をぬかさんばかりになりました。イエスさまは、そんなトマスに言いました。「トマス、わたしの手の傷にあなたの指を差し入れてごらんなさい。また、わき腹をあなたの手でさわってごらんなさい。わたしはあなたを見捨てたりしていないし、神さまの愛はあなたにも届いているよ。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

さあ、トマスはどうしたのでしょうか。イエスさまにさわったのでしょうか。いいえ、あんなに言っていたのに、さわらなかったのです。なぜでしょうか。イエスさまがいきなり現れて、びっくりしたから？ イエスさまがこわかったから？ いいえ。そう



ではありません。トマスは、はっきりとわかったからです。トマスのことを思ってくれるイエスさまの心が、また自分をも愛してくださる神さまの愛が、復活されたイエスさまのお姿を見たときに、はっきりとわかったからです。だから、もうトマスはイエスさまにさわる必要もありませんし、もっと言えば、もうこれからは復活のイエスさまのお姿を見る必要さえないのです。なぜなら、もうわかったからです。神さまの愛とイエスさまの命が。こうして、トマスは信じたのでした。そんなトマスにイエスさまは、幸いを約束してくださいました。「見ないで信じる者は、幸いである」。

今こうしてこの時代を生きている私たちも、「イエスさまを見る」ことはできないかもしれませんが、その私たちにも、イエスさまはご自分が「今も生きていること」「いつも共にいてくださる」ことを、「週の初めの日」礼拝の日ごとに示し、教えてくださいますのです。

# 見ること、信じること、生きること

青少年科



聖書

ヨハネによる福音書20章19～29節

暗唱  
聖句

「見ないのに信じる人は、幸いである」  
ヨハネ 20：29

3課

4月19日

## 聖書から…

トマスは、見ることや触ることに固執しました。しかし、復活のイエスさまを目の前にして、トマスはその固執から解放されていきます。なぜなら、復活のイエスと出会うことがゆるされたからです。復活のイエスと出会うことは「復活のいのち」を与えられる神の働きに出会うことです。つまり、ここでのトマスとイエスとの出会いは、肉体的に見た、触れたということとは異なるものなのです。

神の働きを知ったトマスは、肉体的に「見る」ということへの固執を捨て、見えないものに寄り頼むものとなっていきます。トマスはここで、イエスさまの言葉を聞きました。言葉は肉体と違い見ることはできません。しかし、その見えないものをトマスは信頼したのです。こうして、トマスは「見て信じる」ということに固執するものから、見て触って確認できる事柄ではない「見ないで信じる」という、イエスさまの言葉の力に信頼するものへと変わっていったのです。

私たちが主日礼拝を守るのは聖書の言葉に聴き、その力に信頼し、生きるものへとされるためです。見ないで信じる信仰が私たち一人ひとりを生かし、キリストにあって互いに共に生きる喜びを私たちにもたらすのです。

## 分かち合おう

- 容姿、社会的地位、能力などの優劣を、私たちは世間の価値観から「見て」判断しています。しかし、この世界には「見えない」けれども大事にされなければならないものがたくさんあるはずです。さて、あなたの教会は一体どのような「見えない」ものを大事にしているのでしょうか。また、大事にできていないのでしょうか。自由に話してみましょう。
- トマスは決して不信仰な人物ではなく、人間の姿そのものです。「見えない」神さまに信頼をおき、信じるということは大変なことだと思います。一方で、この世界で起こる悲惨な出来事を「見る」ことによって、神さまの存在を疑ってしまうことも、もしかするとあるかもしれません。また、現実の悲惨さを「見て」、見えない神さまのことを「愛」と呼ぶことに矛盾を感じることもあるかもしれません。私たち人間の知恵で知ること、見ることができるとは限られています。だからこそ、私たちは「見える現実」と「見えない神さまの愛」との間に神さまのどんな意思が隠されているかを問うことが大切です。この「見える現実」と「見えない神さまの愛」との間にどのような神さまの思いが隠されているとあなたは思いますか。

# 見ること、信じること、生きること

聖書

ヨハネによる福音書20章19～29節

暗唱  
聖句

「見ないのに信じる人は、幸いである」

ヨハネ 20：29

3課

4月19日

## 聖書から…

みなさんは教科書や本に書かれていることを読むより、一度でも見た経験したりすることでよくわかるということはありますか？「青と赤を足すと紫になります」と文章で読んだり聞いたりするより、絵の具で色を合わせたものを見るとすぐに理解できますね。

トマスは、「イエスさまがわたしの前に現れてくれたら信じたのに…」と思ったのでしょう。私たちは今、イエスさまの姿を実際に見ることができません。聖書からのおはなしを聞いたり読んだりしてもなかなか信じられない時、トマスのように「一度でも会えたら…」と思うことがあるかもしれません。イエスさまは、そんなトマスや私たちに「見ないで信じるものは、幸いである」という言葉をかけてくださっています。

## 活動①

### 「見ないで！見ないで！」

●準備●中の見えない巾着袋2つ、似た形で違う素材の物5つくらい2セット（例：ゴルフボール、卓球の玉、スーパーボールなど）

①二つの袋が同じ中身になるように、メンバーに見せながら入れてい



きます。

②リーダーが一つの袋、メンバーがもう一つの袋を持ちます。

③リーダーが袋から一つ取り出します。メンバーは、それと同じものを袋の中を見ないで選び出します。見ないで全部同じものが選び出せるかな？

## 活動②

## ワークシート

### 「3（スリー）ヒントクイズ」

●準備●ワークシートのコピー人数分、人数分の問題の答え（写真や絵）

三つのヒントで答えを導きだすクイズです。

①リーダーは、教会にある物、人、聖書の中にまつわるものの写真や絵をあらかじめ答えカードとして準備します。

②メンバー一人に一つずつ答えを渡し（見せ）ます。

③メンバーは、自分以外のメンバーが当てられるように上手なヒントを三つ考えます。

④準備ができたら一人ずつヒントをゆっくり、一つずつ言いましょう。

⑤一つ目のヒントで答えられるでしょうか？

⑥または、三つともヒントを言ってから、「せーの」で皆が一斉に答えを言って、その内何人が言い当てられたかというように楽しんでもいいでしょう。

\*見ていないけれど、伝えようとするものが伝わるといいのですが…さて。





出題者：なまえ \_\_\_\_\_

## ★ ヒント ①

\_\_\_\_\_

## ★ ヒント ②

\_\_\_\_\_

## ★ ヒント ③

\_\_\_\_\_

折り線

\_\_\_\_\_

折り線

\_\_\_\_\_

折り線

\_\_\_\_\_

## 答え

\_\_\_\_\_

※ 答えを書いたら折り線で3回折って答えをかくします。

※ 絵で答えを描いてもいいですよ。





# イエスさまの食卓に招かれて

聖書

ヨハネによる福音書21章1～14節

暗唱  
聖句

イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。  
ヨハネ 21：13

4課

4月26日

## 失望の夜明けに、 声をかける人

かつて弟子たちはイエスさまから呼びかけていただいて、普通の漁師から「人間をとる漁師」という、全く新しい道へと踏み出したはずでした。しかし今、イエスが十字架にかけられ、殺されてしまったという試練の中で、彼らはこの道に行き詰まり、前に進むことなど到底できませんでした。ヨハネ福音書によれば、「イエスが…弟子たちに現れたのは、これでもう三度目」(21：14)ということです。彼らは、復活の主との出会いを既に二度も経験していたかもしれません。しかし、それすらも、彼らが立ち直るきっかけとはなり得なかったのです。それほどに、人の不信と罪は根深いものなのでしょう。

そんな彼らは、元の漁師に戻れないかと故郷ガリラヤに帰り、漁をしましたが、結果は散々なものでした。夜通し精一杯働いても、一匹も魚が取れなかったのです。過去の挫折に、今朝の不漁が積み重なってのしかかります。それは、無力感と失望に包まれたままの虚しい夜明けでした。しかし、そのような彼らに近づいてきて、声を掛ける人があります。「子たちよ、何か食べる物があるか」(21：5)。復活の主イエス・キリストは、挫折と失望の中にあった弟子たちの傍らにあえて立ち、彼らに心配と配慮の声をお掛けになるのです。弟子たちが「(食べるものは何も)ありません」と答えると、復活の主はこう語りかけてくださいました。「舟の右側に網を打ちなさい」(21：6)。主の言葉は、実に具体的かつ

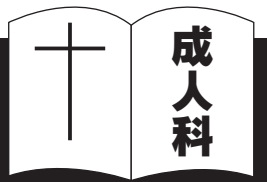
的確です。「そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった」。初めてペトロたちがイエスさまにお会いした時、これと似たようなことがありました(ルカ5：1～11)。復活の主は、彼らをその「原点」に立ち返らせ、人間の思いを超えた神の豊かさを開かれ、そして復活の主ご自身を指し示されるのです。

## 復活の主の備え 主と共なる食事

それだけではありません。復活の主イエスは、愛する者たちのために、あらかじめ準備し、養ってくださいます。舟の上の弟子たちは、そのみ声を聞き、み業を経験して、それが誰であるかを悟りました。それで彼らは、特にペトロは水に飛び込み泳いで岸に帰りました。岸に着いてみると、思わぬ喜びが彼らを待っていました。「陸に上ってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。…『さあ、来て、朝の食事をしなさい』」(21：9～12)。なんとイエスご自身が、炭火を起こし、魚を焼き、パンを備えて、朝の食事を用意してくださっていたのです。こうして、主はご自身の復活をととても具体的・現実的な出来事として示してくださったのです。弟子たちはこの主イエスとの岸辺の食事を生涯忘れられなかったでしょう。空気や食べ物の匂いまた味などが相まって、彼らの心に深く刻まれ、残ったにちがいありません。

## 教会の原型がここにある

復活の主イエス・キリストによって呼びかけられ、主のご奉仕によって備えられ、弟子たちを招いて持たれたこの恵みの食事の交わりこそ、その後の教会の交わりと奉仕の原型であり、土台ではないでしょうか。復活の主によって呼びかけられ、仕えられ、豊かな恵みをいただいているからこそ、私たちも復活のイエスのように、苦しむ人々の傍らに立ち、呼びかけの言葉を投げかけるのです。私たちも、この主と共に、互いの具体的・現実的な必要に答えて、助け合い、仕え合うのです。そして私たちも、このお方と共に、それぞれの必要と助けのために、「炭火を起こし、魚を焼き、パンを備える」という実に生活的な奉仕の業をしていくのです。



### 炭をおこし、パンと魚を焼いておられるイエスの姿を思い浮かべよう

「復活のイエス」というと、どんなイメージを持っていますか。この前半のところでは、挫折と苦しみの中にいる弟子たちに寄り添って声をかけておられます。そして今ここでは、かがいしく朝食の準備をしておられるのです。そんなふうに、復活の主は、今も私たちのただ中で、とりわけ教会において、忙しく働き、奉仕してくださるのではないのでしょうか。そんなイエスさまを思い浮かべ、そんなイエスの奉仕によって支えられるのが私たちであり、私たちの教会であることを、共に考えてみましょう。

#### 準備のための聖書日課

|     |   |             |               |
|-----|---|-------------|---------------|
| 20日 | ㊦ | ルカ5:1～11    | 網が破れるほどの大漁    |
| 21日 | ㊦ | ルカ24:28～35  | パンを手に取られる復活の主 |
| 22日 | ㊦ | ルカ24:36～43  | 魚を食される復活の主    |
| 23日 | ㊦ | ヨハネ6:1～15   | ティベリアス湖畔で     |
| 24日 | ㊦ | ヨハネ17:1～19  | 知ることは信じること    |
| 25日 | ㊦ | ヨハネ20:30～31 | 神の子メシアを信じるために |

### そうすると、私たちの奉仕や働きとは？

そんなふうにイエスさまによって仕え働いていただいて成り立っているのが、私たちの教会であり、その働きだとすると、「奉仕」や「教会」のイメージが変わってきませんか。この「イエスの奉仕」に基づいて、私たちが「声をかけ、炭火を起こし、魚を焼き、パンを備える」とは、どういうことでしょうか。これについて、新しい気付きや決心が与えられたら、それを互いに語り合い、分かち合いましょ

# イエスさまの食卓に招かれて

聖書 ヨハネによる福音書21章1～14節

暗唱 聖句 イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。  
ヨハネ 21：13

4課

4月26日

ペトロたちは、どうしたらいいかわかりませんでした。イエスさまは十字架で殺されて、死んでしまいました。自分たちの弱さと卑怯さを、いやというほどわかってしまったのです。実は今までに二回も復活のイエスさまにお会いしていたのですが、それでも彼らは信じて立ち上がることができなかったのです。さんざん悩んだ末に、故郷のガリラヤに帰って、もう一度漁師をやってみようと思いました。それで帰って、ある日漁にでかけてみたのです。ところが、魚は一匹も取れませんでした。「ああ、がっかり。本当にこれからどうすればいいのだろう」。

失望し疲れきって、舟を戻そうとしたその時、岸边に立って呼びかける人がいます。「子たちよ、何か食べ物はあるか」。「だれだろう。いーえー、ありませーん」すると、その人は言いました。「舟の右側に網をおろしてごらん」。ペトロたちは、ふしぎな気持ちになっていました。「そう言えば、前にもこんなことがあったよな」。

突然彼らの手にぐっと力が加わりました。水の中から激しく引っ張る力。「魚だ。それもとんでもない数の魚がどっさり。だめだ、もう引き上げられない」。その時彼らははっと気づきました。「あれはイエスさまだ」。それを聞いたペトロは、泳いでイエスさまのところへ行きました。他の弟子たちは、魚の入った網を引きながら、そのまま舟で帰って行きました。

岸に着いてみると、なんともう一つのサ



プライズが彼らを待っていました。岸边には炭火が起こしてあり、その上で魚が焼けるいい匂いがします。その横には、パンもありました。この食事、いったいだれが用意したのでしょうか。なんと、それは復活されたイエスさまだったのです。イエスさまが「よっこらしょ」と火を起こし、魚を切り、火にのせて焼き、パンをも取り分けてくださっていたのです。イエスさまは言いました。「さあ、朝の食事をしなさい」。彼らはイエスさまと一緒に食べました。ペトロたちは、このイエスさまとした食事を一生忘れられなかったことでしょう。「あの空気、あのにおい、あの味」。復活のイエスさまって、こんなにも私たちの身近にいてくださる方なのです。

私たちが教会で、またどこでも互いに助け合って共に生きようとするとき、また隣り人の必要に応じて、食べることや生きることのために奉仕や働きをするとき、そこにはいつもこのイエスさまがいてくださるのです。



# イエスさまの食卓に招かれて

青少年科



聖書

ヨハネによる福音書21章1～14節

暗唱  
聖句

イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。  
ヨハネ 21：13

4課

4月26日

## 聖書から…

一晩かけても何も捕れない。元漁師のペトロたちにとってそれは痛みでした。その時にイエスさまは、岸から「船の右側に網を打ちなさい」と声をかけられています。主の言葉に促されて網を打つと釣果が得られました。ここで大事なのは、ペトロが岸の人物をイエスさまだと認識しているかどうかに関わらず、恵みが与えられたことです。人間の思いを超えた、主の先立ちがここにあります。

主の先立ちは繰り返し記されます。弟子たちが岸に戻ると、イエスさまが食事の準備をしてくださっている。主の食卓は、私たちが主のために準備するものではありません。主ご自身が先立って準備されるのです。主は私たちを招いてくださり、人間が生きるための糧を整えられておられるのです。

そして、主の先立ちと招きは礼拝につながることです。主に招かれ、礼拝をし、それぞれが主に遣わされていく。この循環が大切です。わたしたちが遣わされる場所にはペトロたちのように痛みの中にある人々が多くいます。主の招きの応答として、そのような方々との出会いをいただき、隣人にならせていただく、そんな存在でありたいです。

出かけることは、勇気が必要です。しかし、主が招いてくださっているからこそ、安心して出かけていくことができるのです。

## 分かち合おう

- 皆さんの傍らに、痛みを負わされている人々はいないでしょうか。この世界には構造の中で痛み、苦しみ、差別されている人々が多くいます。既に主が先立ち、そのような方々と共に生きておられます。さて、私たちの教会はそのような方々とどうやって出会い、生きさせていただくことができるでしょうか。
- 福音書の中には今日の箇所のように、イエスさまが誰かと食事をするシーンが多く書かれています。イエスさまと食事をした人々はどんな人々だったのでしょうか。福音書にある食事のシーンを確認しながら(例：マルコによる福音書2章13～16節など)、どうしてイエスさまがこの人々と食事をされたのかを考えてみましょう。

# イエスさまの食卓に招かれて

聖書 ヨハネによる福音書21章1～14節

暗唱 聖句 イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。  
ヨハネ 21：13

4課

4月26日

## 聖書から…

どうしたらいいかわからないペトロたちに、イエスさまは「子たちよ」と話しかけてくださいます。ペトロたちにとって、イエスさまの方から声をかけられたこと、更に岸边に用意されていたイエスさまの食卓に招かれたことは、どれだけうれしかったことでしょう。私たちも、友だちや家族と過ごす中で、様々な場所でいろんな思いをします。「ごめんね」と言わなくてはいけないとわかってはいるのに言えない時。不安なのにその気持ちをどうしたらいいかわからない時。自分の弱さに自分でもがかりするような時。

イエスさまはその思いすべてを知って「子たちよ」と声をかけ、ペトロたちと一緒に食事をしたように、今日も私たちを招いてくださっています。「どうしたらいいかわからない」という思いも、「イエスさまにこれを！」と差し出す思いも、その心の内をすべて知って受け取ってくださるイエスさまが私たちを待っていてくださることを一緒に喜べるといいですね。

## 活動①

### 「お魚焼けたかな？」

「おせんべ やけたかな」のお魚バージョンです（インターネットで「おせんべやけたかなゲーム」で検索できます）。

①手を魚に見立て、手の平を下に向けて両手を出します。

②リーダーがイエスさま役、メンバーが弟子役になり、炭火を囲んでお魚を焼いていきます。



③イエスさま役が弟子役の魚を順番に「お、さ、か、な、や、け、た、か、な」と指差します。さいごの「な」になった魚は、焼けたので裏面にひっくり返します。

④次の魚から、また同じように続けます。

⑤最初に両面焼けた人が次のイエスさま役になります。

※誰もが知っていると思いがちな伝承遊びでも、意外と知らない子が多くいます。教会の先輩にいろんな遊びを教えてもらうのも楽しいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「持ち寄りパーティー」

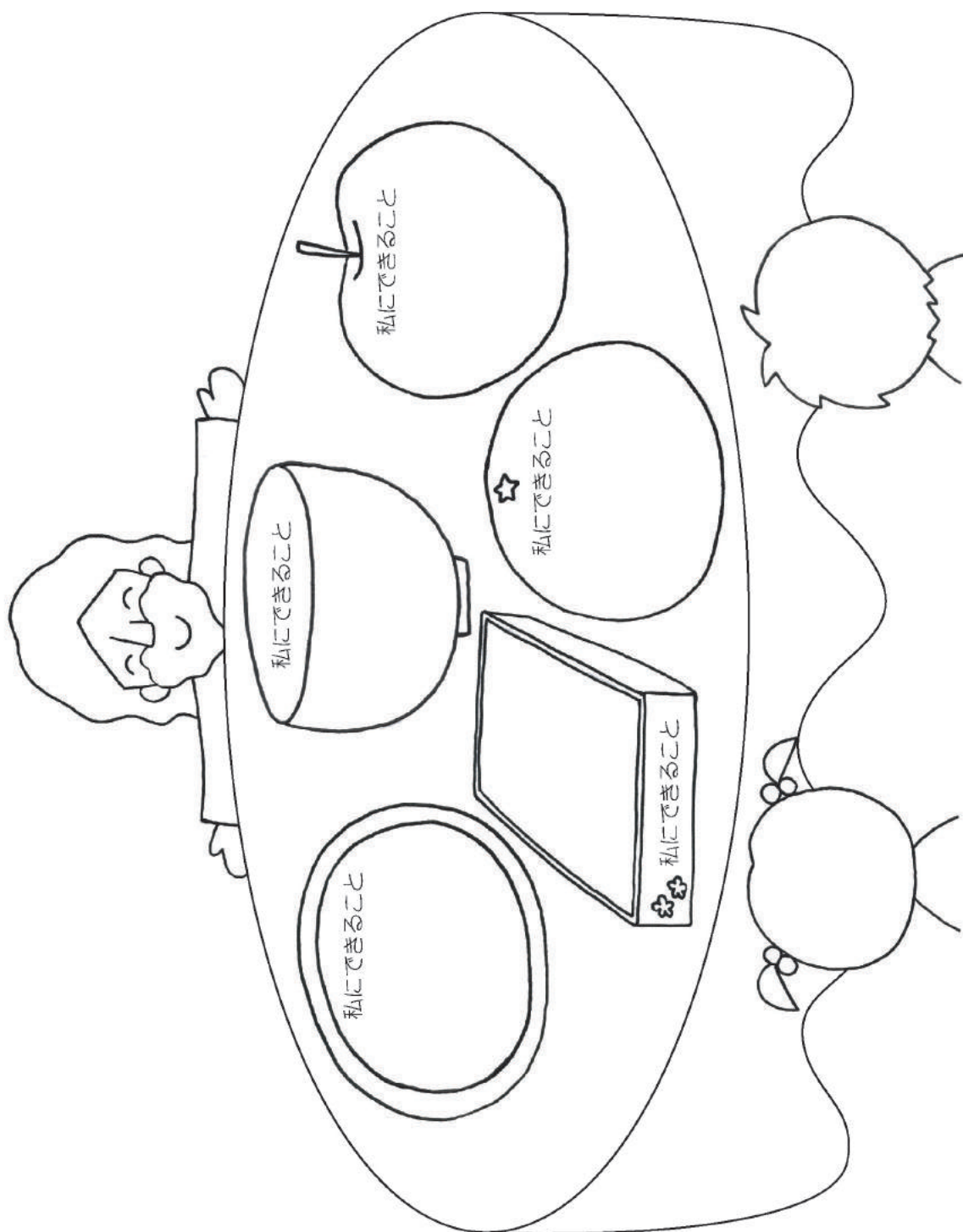
持ち寄りの食事をしたことがありますか？ イエスさまが招いてくださった食卓を知った私たち。今度は、私たちにできることを見つけてみましょう。ワークシートの空欄に、自分にできそうなことを書いてみましょう。今やっていることでも、これからやってみたいことでも。書くことに困ったらリーダーや教会の人に聞いてみると、自分でも気が付かなかった「私にできること」を発見できるかもしれませんよ。

例)「あいさつをする」「小さい子と遊ぶ」「お休みした子のために祈りする」「大きくなったらたくさん献金して教会を建て替える!!」



4課

4月26日





# キリストの証人となる

聖書

使徒言行録1章3～11節

暗唱  
聖句

ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、  
わたしの証人となる。使徒1：8

5課

5月3日

## ただ「待つ」ことによって

復活されたイエスさまと弟子たちとが、40 日間にもわたって共に生活をしたという記述に驚かされます。その時の食事の話題は「神の国」でした(1：3)。これは、信仰生活とは、復活の主イエスと共に「神の国」の現実に生きることであると示しているのではないのでしょうか。その中で、イエスさまの指示は、大変単純かつ明快なものでした。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい」(1：4)と。「待ちなさい」とイエスさまは言われました。人間ではなく、神さまのみ心が成り、み業がなされていく、それにはただ「待つ」ことが最もふさわしいからではないのでしょうか。

## 待てない人々に聖霊を

それでも、弟子たちは「待てない人々」です。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」(1：6)、「主よ、今こそ行動すべき時ではありませんか。復活なさった今こそが!」と言わんばかりにイエスさまに尋ねています。けれども、イエスさまはそれに対してこう答えられました。「時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」(1：7～8)「あなたがたではなく、聖霊」ここにイエスさまの答えがあります。

「聖霊」とは、神さまの霊です。神さまの霊

は、人間の手に収まるものではなく、そこには途方もない断絶があります。「神の国」とは、弟子たちをはじめとする人間が、何かを考えたり、願ったり、計画したりするのではないのです。弟子たちが、自分の力や頭をしぼり、何かを苦勞してひねり出せるものではありません。「聖霊があなたがたに降ると」と、イエスさまは言われるのです。ただ上から、あなたがたの考えや力とは全く関係なく、それらを完全に超えて、神の霊があなたがたに降るのだ、ということです。

## 証人として行きなさい

「聖霊が降ると」、どうなるのでしょうか。「わたしの証人となる」(1：8)と、イエスさまは言われるのです。「証人」とは、やはり徹底的に受け身の存在です。イエスさまや神さまが自ら、私たちに示し、見せてくださる「神の国」の現実、それをただひたすら「見たまま、聞いたまま」に語っていくのです。「神の国」を宣べ伝えたイエスさまは、十字架の道を歩まれ、この世の罪を引き受け担いつつ死に、それから三日目に神さまの力により復活させられたこと、このすべてのイエスさまの道に立ち会われたことを語っていくのです。時には言葉で、ある時には行動と生き方で、それを示し、出会う人々と分かち合っていくのです。

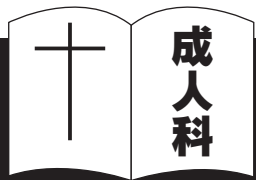
それが目指す範囲は、驚くべきものです。「エルサレム、ユダヤ」、ここまでは彼らのホームグラウンドです。けれども、すぐ次に「サマリア」が出ます。紀元前722年北イスラ



エルの都サマリアがアッシリア帝国に滅ぼされ、そこに住んでいた民が捕虜として連れ去られた後に、各地から異民族が移住させられ、これが「サマリア人」の起源となったと言われています（列王記下 17 章参照）。彼らは、旧約聖書中「モーセ五書」のみを正典とし、礼拝場所はゲリジム山のみと主張していました。ここから、ユダヤ人の間に敵対的な感情が起こり、広まっていったようです。ユダヤ人の方がサマリアを嫌い、憎み、差別しているのです。弟子たちも、それらの先入観や偏見から決して自由ではありません。「そこでもあなたがたはわたしの証人となる」と主は言われるのです。さらには「地の果て」です。もう想像もできません。でも、そこで神さまが用意してくださる良き出会いと豊かな分かち合いがきっとあるのだと約束されるのです。

#### 準備のための聖書日課

|     |   |               |           |
|-----|---|---------------|-----------|
| 27日 | ㊦ | ヨハネ21:15～19   | 愛の完成      |
| 28日 | ㊦ | ヨハネ21:20～25   | 復活の主に従う   |
| 29日 | ㊦ | ルカ24:44～53    | 都にとどまれ    |
| 30日 | ㊦ | 列王記下17:24～33  | サマリア人の起源  |
| 1日  | ㊦ | 使徒言行録13:44～52 | 地の果てに至るまで |
| 2日  | ㊦ | 使徒言行録1:1～2    | 使徒の働き始まり  |



### 「待つ」ことの 難しさとその恵み

「待つ」間、私たちが直接できることはありません。人間は、自分から動き、自分が何かをすることを求めがちですが、何もできることがない。また「待つ」ことは「相手次第」です。人や物事が向こうから動いてくれるのを、ただ待つよりほかはないのです。さらに、その「相手」が動いてくれる時や方法も、こちらからは全く指定できません。あるいは、「私」にとって都合の悪い仕方では答えが来るかもれません。

それでも「待て」とイエスさまは言われました。「神さまから待たされた」「でもその中で恵みを与えられた」という経験があれば、

互いに分かち合ってみましょう。また、「そううまくは行かないよ」という経験も、紹介しあいましょう。

### 「サマリアでも、 わたしの証人となる」

復活のイエスが弟子たちを送り出し証人とされる場の一つが「サマリア」です。「そこで証人となる」とはどういうことでしょうか。今の私たちにとっての「サマリア」とはどこであり、そこに住むのはどういう人たちでしょうか。私たちそれぞれの置かれている場や状況をできる範囲で具体的に語り合い、その中で「証人として生きる」苦勞と喜びを証し合いましょう。

# キリストの証人となる

聖書

使徒言行録1章3～11節

暗唱  
聖句

ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、  
わたしの証人となる。使徒1：8

5課

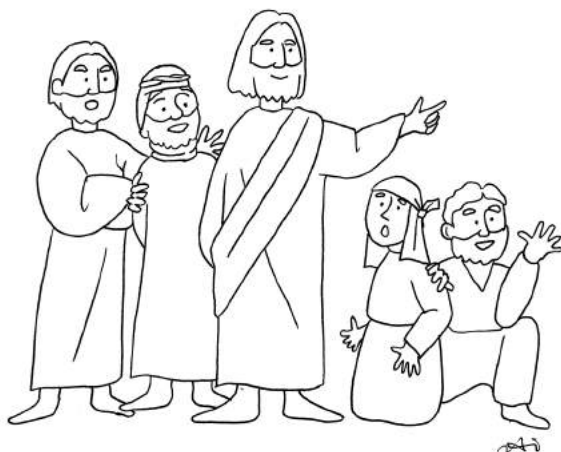
5月3日

弟子たちは、あせっていました。「せっかくイエスさまが復活して来られたのだから、今こそ何かしなければならぬ」。でもイエスさまは、ちっとも急いでいるようには見えません。弟子たちと、40日もの間いっしょに食べたり飲んだり、ときに神さまのお話をしたり。「何かをする」というのではなく、じっと何かを待っているというふうでした。

あるとき、食事の席で彼らにこう言われたのです。「ここエルサレムからじっと動かないで、ひたすら待っていなさい。神さまはあなたがたに必ずよい導きを与えてくださる」。弟子たちは、ひどくがっかりして、少しむっとして言いました。「まだ待つのですか。今こそ私たちは神の国のために動き出し、働くべきではありませんか」。でもイエスさまは言いました。「それは、あなたがたの知ったことではない。あなたがたの上に、神さまが聖霊を送ってくださるのだ」。

「聖霊」って何でしょう。弟子たちは首をひねりました。でも、彼らにもおぼろげながらわかったことがあります。それは、「神さまなんだ」ということです。「自分たちじゃないんだ。神さまなんだ。自分たちの願いや計画また働きによって、神の国が来るのではなくて、神さまが私たちに働いて、神さまが私たちを動かし、用いて、神さまが願い、神さまがしたいと思われること、それが起こっていくのだ」。

続けてイエスさまはおっしゃいました。



「聖霊があなたがたに降るとき、あなたがたはわたしの証人となるのだ」。「証人」とは、何かを「見たとおり、聞いたとおりに語る人」です。イエスさまや神さまが、弟子たちに「神の国」の働きと力を見せて、わからせてくださるのです。「それを見たま、聞いたままに語りなさい。その通りに行動し、生きていきなさい」。

イエスさまに送り出されて、どこへ行くのでしょうか。「エルサレム、ユダヤ」と言われました。「それなら知ってる」。でも次の言葉にはびっくりです。「サマリア」。サマリア人やサマリアの国を、弟子たちはあまり好きではありませんでした。（それは彼らの間違った考えなのですが）。「そこでもあなたがたはわたしの証人になる」とイエスさまは言うのです。さらには「地の果てまでも証人となる」。もう想像もできません。でも、そこにきっと神さまが用意してくださる、すばらしい出会いがあるのだと、約束してくださるのです。

# キリストの証人となる

聖書

使徒言行録1章3～11節

暗唱  
聖句

ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、  
わたしの証人となる。使徒1：8

青少年科



5課

5月3日

## 聖書から…

イエスは弟子たちに「聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人になる」と言われます。弟子たちはこの言葉の通り、ペンテコステを経て、宣教活動を始めます。宣教活動は、弟子たちが独自に始めたものではなく、復活のイエスとの出会いと聖霊の降臨によって始まったのです。福音宣教とは、人間主導で始められるものではありません。そこには復活のイエスの励ましがあり、聖霊の導きがあるのです。

例えば、弟子たちはサマリアを嫌っていましたから、彼らが独自で宣教を開始していたらサマリアは避けられていたことでしょう。しかしイエスは、サマリアで弟子たちは証人となると言われました。この言葉を受け、弟子たちは自分たちの計画でなく、主の計画のために出かけていきます。まさにここに聖霊の導きがあります。

また、イエスは弟子たちに「地の果てに至る、わたしの証人となる」とも言われます。福音宣教はエルサレムだけに留まるものではありません。地の果て、つまり世界中に広がっていくのです。そして、その地の果てに、既にイエスが先立っておられ、その地の人々と共に生きておられます。福音宣教とはこのように人間の計画を超えた、大きな視野の中でイエスが先立ち担ってくださっているものなのです。そこに私たちは参与させていただき、共に福音宣教を担う者とされるのです。

## 分かち合おう

- 聖霊の働きと言われても正直言ってよくわからないというのが本音ではないでしょうか。しかし、聖書の中にはたくさん聖霊の働きがでています。弟子たちは聖霊の導きにより、自分たちでは思いもしないような宣教活動を始めしていきます。聖霊とは人間の思いを超える導き手です。皆さんは、自分の思いを超えた聖霊の働きを感じたことがありますか。また、教会がそのような聖霊の働きに導かれていると感じたことがありますか。分かち合ってみましょう。
- 弟子たちは伝統、間違った情報、思い込みによってサマリア人のことを嫌っていました。私たちの国の中でも、特定の人種の人々、特に在日の方々が、間違った情報をもとにヘイトスピーチなどで攻撃されています。どうして、このようなことが起こるのでしょうか。また、どうしたらこのようなことを乗り越えていくことができるでしょうか。率直に考えてみましょう。

# キリストの証人となる

聖書

使徒言行録1章3～11節

暗唱  
聖句

ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、  
わたしの証人となる。使徒1：8

## 聖書から…

私たちが生きている周りには、「いかに早く、便利に、簡単に！」という言葉があふれています。わからないことは、考えるよりすぐ調べ、友だちに連絡するとすぐに返事が来ることが当たり前だと思っていはいないでしょうか…。

今日の聖書箇所では、弟子たちはイエスさまと40日過ごしました。最初から「40日間一緒にいるよ」と言われたのではなく、これからどうなるかもわからない中、ただ「待っていないさい」と言われたのです。何が起こるか、いつまでなのか、わからない中で「待つ」ことは不安を感じますね。でも、そんな時にもイエスさまと一緒にいてくださり、私にとっての必要と最善を与えて一緒に歩んでくださると語られるのです。つらい思いをしている時や不安の中にいる時はそうは思えなくても、すべてを知っておられる神さまが私のための道を用意してくれているのです。

## 活動①

### 「いつですか？」

●準備●新聞紙、カラービニールテープ、セロテープ

- ①新聞紙5～6枚分を重ねて棒状にします。色のビニールテープで真ん中に線を作ります。
- ②リーダーとメンバーが向かい合わせに立ちます。

- ③リーダーは、新聞の棒をタテの状態に落とします。それをメンバーがキャッチします（キャッチの方法は片手か両手か、メンバーに合わせてください）。
- ④色のテープより下でキャッチできたら成功、テープより上やキャッチできなかったらもう一回。



## 活動②

## ワークシート

### 「いのちのおはなし」

●準備●拡大したワークシート人数分

弟子たちは、自分たちが想像しないような場所に送りだされました。私たちにはどんな道が用意されているのでしょうか？

- ①自分年表を作ってみます。今までどんな歩みをしてきたでしょう。今までの自分のことを書き出してみます。その時々写真や絵を描いてもいいですね。※語りたくないメンバーには無理せずに。
- ②これからの自分にどんな歩みを想像しますか？ 神さまから与えられているいのちをどのように使いますか？ どんな道が用意されているのでしょうか？ 想像してみましょう。

※リーダーが、自分が子どものころに思い描いた想像年表と現実年表二枚を書いて見せてみるとメンバーは書きやすいでしょう。

※参考：絵本『いのちのおはなし』

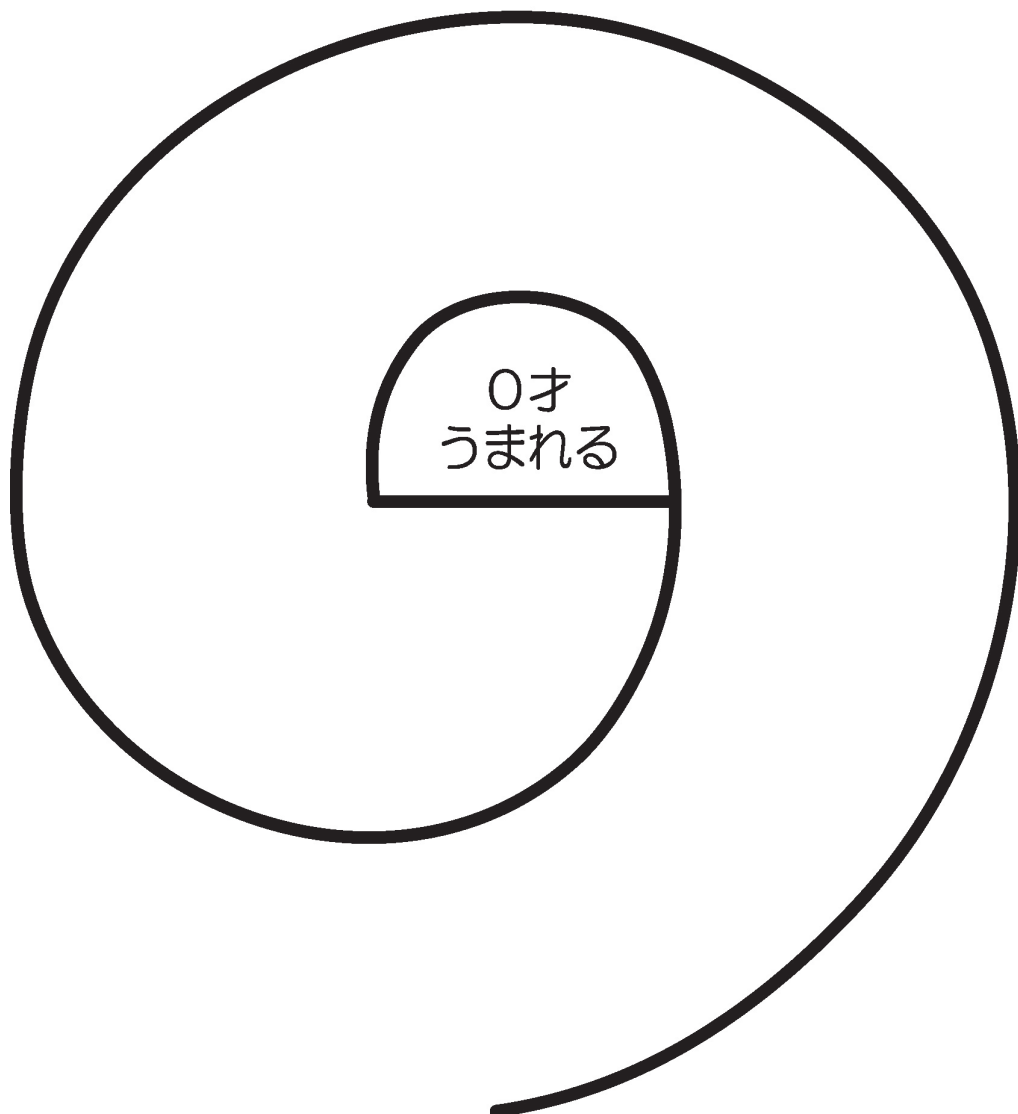
日野原重明文・村上康成絵 講談社



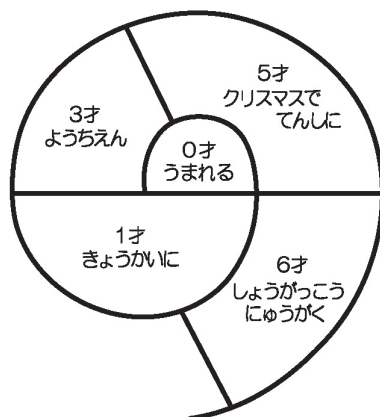


5課

5月3日



例





# 一同は聖霊に満たされ

聖書

使徒言行録2章1～13節

暗唱  
聖句

一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、  
ほかの国々の言葉で話しだした。使徒2：4

6課

5月10日

## 聖霊って何？

まもなくペンテコステ（<sup>せいれいこうりんび</sup>聖霊降臨日）です（5／31）。ペンテコステは、よく「教会の誕生日」だと言われます。聖霊の降臨を受けたイエスさまの弟子たちが証人として活動を開始し、それが教会の働きの初めとされたからです。ところで、「聖霊」とは何でしょうか。「使徒言行録」は、この「聖霊降臨」の場面で、聖霊によって主なる神が語られ、働かれることを、様々なイメージ・比喩をもって表現しています。

## 風のように、炎のように、 舌のように

聖霊は「<sup>はげ</sup>激しい風が吹いてくるような」、「風のような」ものだということです。目には見えないけれど、風が吹いていれば、私たちはそれを体で感じ、それが確かにあるのだとわかります。神の霊が私たちに働くとき、それは私たちを動かし、私たちを変え、私たちの中に新しい神の業を起こしていきます。聖霊は風のように吹く「神の息」です。天地をお創りになった神の息吹、イエスを死者の中から復活させた方の息吹です。その「息吹」が「風」のように吹くとき、人は新しく創り生かされ、「確かに聖霊は働いておられるのだ」と告白できるのです。また「風」は、人間の思いのままになりません。人間の見通しや計算や評価をも超えて、この「風」が弱さと破れを持つ人たちの上に吹くのです。師を裏切り、見

捨て、逃げ去るような者たちも、この風に吹かれる時、教会の土台となることがゆるされるのです。

次に、「炎」は暖め、燃やすものです。「炎」、それは神の熱い愛と真実を表わすものです。弟子たちの心も体も、主イエスを裏切り捨てた自分や互いの罪を思い知って、「冷え切って」いたのではないのでしょうか。しかし、聖霊は「炎のように」迫ります。彼らは、この神の「炎」によって再び「暖められ」、新しく「燃やされ」、強められ、生かされ、用いられるのです。

そして、聖霊は「舌のようなもの」（口語訳2：3）と語られています。音声言語を用いる多くの人々にとっては、「舌」は言語を話すための体の器官であることから、この「舌」のイメージによって「言葉」とのつながりが表されています。聖霊は「言葉」を与え、語らせる霊であり、言葉をもって働くのです。ですから、そこには内容とメッセージがあります。その内容とは、イエス・キリストが救い主であるということです。「わたしはあなたを愛し、あなたがたが共に愛し合うところに私はいつも共にいる」というメッセージです。この言葉を伝え、<sup>ひび</sup>響かせ合い、分かち合う、聖霊はそうした「言葉の出来事」を起こされるのです。

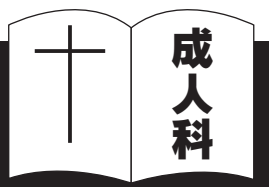
## 一人一人の上に起こった、 一同の出来事

そのようにして、神の言葉を語ってくださる聖霊は、注目すべきことに「一人一人の上

にとどまった」(2:3) のです。個々の人に、それぞれ違う仕方<sup>くはだ</sup>で降ったのです。聖霊は、「一人一人」を知り、「一人一人」に留まり、「一人一人」に親しく働きかけ、「一人一人」に異なった賜物と働きを与えて用いてくださるのです(一コリント12:11 参照)。しかも聖霊は、「いろいろの他国の言葉で語り出した」(口語訳2:4) のでした。それは、驚くべき多様性をもって、それぞれが全く違う仕方<sup>くはだ</sup>で、ということでもあると思います。ここに挙げられている地名(2:9～11)は、当時知られていた「世界」のほぼすべての地域を網羅しています。同時にペンテコステは、このような聖霊の働きかけと導きの中で、「一同」が語り出す出来事でした(一コリント12:7 参照)。「一人一人に聖霊が降った」、「すると、一同は聖霊に満たされ…話したし

| 準備のための聖書日課 |   |                             |
|------------|---|-----------------------------|
| 4日         | ㊦ | 使徒言行録1:12～26<br>主の復活の証人マティア |
| 5日         | ㊦ | 申命記16:9～12<br>五旬祭・七週祭       |
| 6日         | ㊦ | ヨハネ3:1～15<br>風は思いのままに吹く     |
| 7日         | ㊦ | エゼキエル37:1～9<br>霊よ、吹き来れ      |
| 8日         | ㊦ | コリント一12:1～11<br>全体の益となるために  |
| 9日         | ㊦ | エフェソ4:7～16<br>キリストの体を造り上げる  |

た」(2:4) のです。ペンテコステは「一同」の出来事です。「共に生きる」道であり、「共に働く」業なのです。



## 改めて、 「聖霊」って何？

教会は、古来「三位一体の神」を告白し、その中には「聖霊なる神」も含まれています。でも「聖霊」については、「あまりなじみがない」というのが、正直なところではないでしょうか。そのせいか、ペンテコステもクリスマス・イースターほどには祝われていないようです。

今日の箇所から、改めて「聖霊」について、どんな理解・信仰を持っているか、皆で語り合ってみましょう。その際に、今日の「風・炎・舌のように」という比喩の助けを借りながら、考えてみてはどうでしょうか。

## 「一人一人」と「一同」との関係

聖霊によって造り上げられた教会においては、まさにこの「一人一人」と「一同」との関係が問われています。私たちの教会では、そこに集う「一人一人」が十分に大切にされ、愛されているのでしょうか。またこのことによって、教会を「ばらばら」にすることなく「一同」として、心を合わせ、歩みを合わせて共に生きようとしているのでしょうか。この難しいバランスを取らせてくださるのが、聖霊なる神の働きではないでしょうか。

# 一同は聖霊に満たされ

聖書

使徒言行録2章1～13節

暗唱  
聖句

一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、  
ほかの国々の言葉で話しだした。使徒 2：4

6課

5月10日

イエスさまが天に上げられた後、弟子たちはいっしょに集まって、祈りながらずっと待っていました。それから十日目の朝、不思議なことが彼らに起こりました。それは、神さまの霊、聖霊が降<sup>くだ</sup>って来られたのです。この日から「教会が始まった」と言われていて、「ペンテコステ」と呼ばれています。今年は5月31日です。

ところで、「聖霊」ってわかりますか。あまり良くわからないですね。それで聖書は、聖霊を表すときに、「何々のような」というたとえを使うのです。

まず「風のような」です。風って、目に見えないです。でも風が吹いていたら、確かに「風があるな」とわかります。聖霊も同じような方だと言うのです。聖霊は目に見えませんが、聖霊が働くとき、確かに神さまの力がそこにあり、神さまのみわざが起こっているぞとわかるのです。そして、「風」にはすごく強い力があります。神さまが自由にその力をもって働かれるとき、先生を見捨て逃げ去るような人たちが、教会の土台となることができるのです。

次に、聖霊は「炎のようなものだ」と言われています。「炎」は暖め、燃やすものです。それは神さまの熱い愛と真心を表わすものです。弟子たちの心も体も生き方も、イエスさまを裏切り見捨てた自分の罪やお互いの罪を知って、「冷えきって」いたのではないのでしょうか。しかし、聖霊はその彼らに「炎のように」暖かく愛をもって働きかけ、語りかけてくださったのです。彼



らは、この神さまの「炎」によって再び「暖められ」、新しく「燃やされ」、生かされ、用いられるのです。

そして、「舌」です。聖霊は「炎のような舌」と語られているのです。「舌」は、ある人にとっては言葉を語るための体の部分です。(手話を使う人にとっては、手や指がそうなのですが)。聖霊は「言葉」を与え、語らせる霊であり、言葉によって働くのです。聖霊が、言葉によって私たちに伝えてくれる内容は、ただ一つ、イエスさまです。「イエスさまはあなたを、かけがえのないものとして愛してくださいませ」。

このような聖霊は、とてもすてきな仕方であってくださいました。「一人ひとり」に來られたのです。私たちは一人ひとり違います。その一人ひとりのことを、聖霊はとても良く知っていてくださって、それぞれに一番合った良い仕方であってくださるのです。そういう一人ひとりが、一つになって共に動き出したときに、イエスさまの教会が始まったのです。



# 一同は聖霊に満たされ



聖書

使徒言行録2章1～13節

暗唱  
聖句

一同は聖霊に満たされ、`霊`が語らせるままに、  
ほかの国々の言葉で話した。使徒2：4

## 聖書から…

「一同」は共に集まってイエスが言われた「聖霊のバプテスマ」の時を待っていました。五旬祭の日、ついにその約束の時がきます。聖霊は待っていた「一同」の「一人一人」の上にとどまったのです。この聖霊降臨の記述から、教会とは「一つ（一同）」でありながら、「多様（一人一人）」であるということを知ることができます。コリントの信徒への手紙一12章7節には「一人一人に`霊`の働きが現れるのは、全体の益となるためです」とあります。人間には一人一人に霊の働き（賜物）が与えられています。そして、人間は賜物を自分だけのためではなく、全体・他者のために用いることが大切です。

聖霊を受けた使徒たちは「他の国々の言葉で話した」とあります。聖霊により「舌」つまり、言葉の賜物を受けたものが「自分」たちの言葉でなく、「他の国々」の言葉で語ったことも「他者に仕える」ということの一つの表れでしょう。

他者を視野に入れない生き方は「孤立」に過ぎません。しかし、自分だけでなく「一人一人」の存在を大切にする時に、「交わり」が生まれ、それが「一同」となり、「教会」となります。聖霊に満たされるとは、ただ霊の賜物が個別的に与えられるのではなく、他者性の重要性を私たちに伝えているのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- それぞれが与えられている賜物について考えたことがありますか。もしかすると人から羨まれるような「能力」や「技術」だけを賜物と考えているかもしれません。しかし、そのような価値観で賜物を考えると、能力主義に陥ってしまいます。賜物は神さまから与えられた贈り物であり、優劣はありません。自分だけで自分の賜物を判断するのではなく、他者と一緒に考えてみてはどうでしょうか。自分では賜物と思わなかった事柄が、他者から見れば賜物のように思われているかもしれませんよ。
- 現代では、生産性や能力などで人の価値が判断される風潮があります。そのような価値観の中では賜物が他者との競争の道具とされてしまいます。神さまは賜物を競うために与えられたのではなく、他者と共に生きるために与えられたのです。あなたは自分の賜物をどう他者のために用いていますか。また、これからどう用いていきたいと思いますか。他者と共に生きるとは一体どういうことなのか考えてみましょう。

6課

5月10日

# 一同は聖霊に満たされ

聖書

使徒言行録2章1～13節

暗唱  
聖句

一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、  
ほかの国々の言葉で話した。使徒 2：4

## 聖書から…

寒い中にいるとき、体は力が入り硬くなってしまう。暖かい中に入ると、ホッとしたり体がゆったりとなる経験をしたことはありますか？ 弟子たちに与えられた「炎のようなもの」とは燃やされる勢いのあるものや、体も心も暖められ送り出されるものでもあったのかもしれませんが。私たちにはイエスさまを目で見ることにはできませんし、これが聖霊の力だと、名札をつけたようにわかりやすい形では届きません。でも目には見えなくても、手に取ることはできなくても、それぞれに一番良いものが神さまによってあたえられているのです。それは今も、私たちに。



\* 目には見えない力を受けて喜んで進めま  
すように！

## 活動①

### 「目には見えない力にまかせて」

●準備●ビニール袋（しっかり口が閉じられるもの）、油性ペン、うちわ、教会の絵、家の絵

- ①用意した袋に自分の顔を描きます。ビニールに描くことが難しい場合は小さい紙に描いて貼ってもOKです。
- ②スタート地点に家の絵を置きます。ゴールには教会の絵を置きましょう。絵に描いた家からスタートして、教会をぐるりと回って家に帰ってくるゲームですが、運ぶ方法はうちわの風の力です（安全に活動できる場所であるか確認しておこなってください）。

## 活動②

## ワークシート

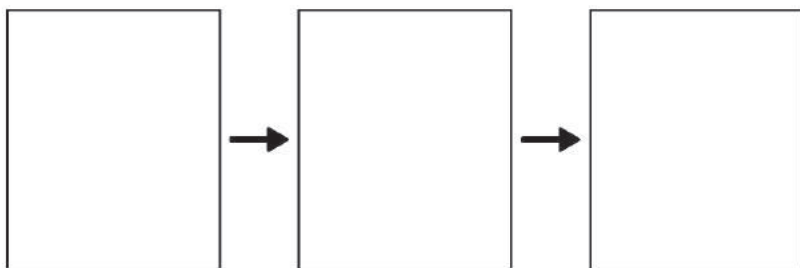
### 「〇〇のような？」

聖書に聖霊は「〇〇のような」という言葉が出てきました。「風」と言われて思いつくもの、「炎」と言われて思いつくものはそれぞれ違い、想像する形も違います。同じ聖書を読み、同じ神さまに祈っていても、私たち一人ひとりに与えられているものは違います。聖霊が一人ひとりに語られ、働かれることを一緒にわちあいましょう。

- ①枠の中に「        」にある題の絵を描いてみます。
- ②矢印の先に、その形から想像するもの（連想するもの）を描きます。
- ③与えられたお題は一緒でも、違うものを連想する…でもそんな違いのある私たちが教会で一緒に歩んでいます。今も、教会が始まった時も。



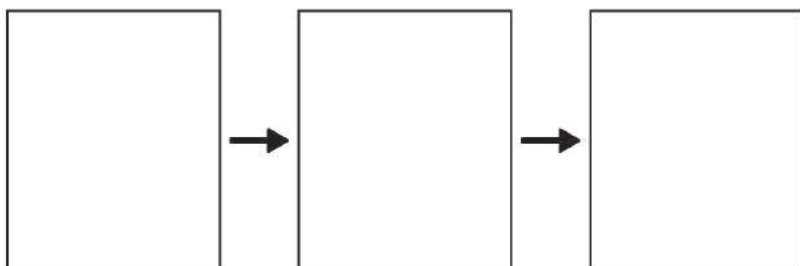
①



「ほのお(ひ)」 「 」 「 」



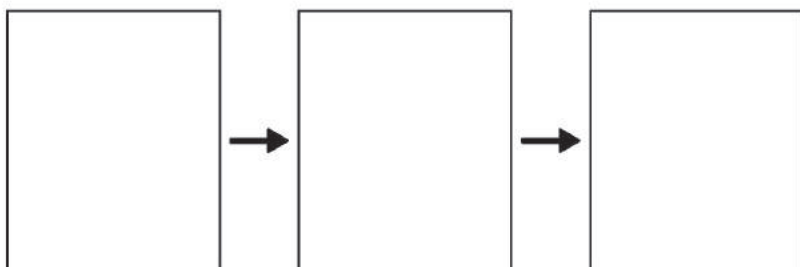
②



「 か ぜ 」 「 」 「 」



③



「きょうかい」 「 」 「 」





# ナザレの人イエス・キリストの名によって

聖書

使徒言行録3章1～10節

暗唱  
聖句

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」  
使徒 3：6

7課

5月17日

## 礼拝への途上での出会い

「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」(3：1)、この一人の人のいやしと救いの出来事は、礼拝への途上で起こりました。礼拝から始まり礼拝へと帰って行く生活のただ中で、イエス・キリストの業は起こって行くのです。

生まれつきの障がいのある人が、毎日「物」のように道端に置かれ、人々の施しにすがって生きていかなければならないという現実。「美しい門」は、おそらく「異邦人の庭」から「婦人の庭」に入る門であったようです。彼は、礼拝の場の外に留まるほかはなかったのです。その事実に関心を動かす人はなく、「当然」のこのように動いていく社会の不条理、不作為、そして非情。二人は、このような出会いを経験しました。

## 「見る」とことと関係の深まり

このペトロとヨハネとが経験した「出会い」では、「見る」ということをめぐって、関係が深まって行く過程が描かれます。ここでは、ペトロたちとこの人との関係をめぐって、四回「見る」という語が出てきますが、原語ではその四回それぞれに全く違う言葉が使われ、区別されているのです。

最初の関係は「彼はペトロとヨハネが、境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた」

(3：3) でした。この「見る」は、「なんとなく見る、目に入る」です。毎日毎日その場を何十人、何百人もの人が通り過ぎていたでしょう。その群衆の中の人として、ペトロとヨハネを見たのです。

ところが「ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見」(3：4) たのです。二人は、彼が生まれてからずっと今まで負ってきた苦しみを見てとり、その苦しみを余計に増すような社会の矛盾や不条理をも見えています。こんなふうに彼に注目した人はいませんでした。

さらに「わたしたちを見なさい」(3：4)。これは、「私たちに心を向けて、心で感じて見なさい。私たちにしっかり向かい合って見なさい」という意味でしょう。ずいぶん大胆な言葉です。その二人がこう呼びかけたのは、彼らがすでにそのように「見られ、見る」という関わりをイエスさまから受け、経験していたからでした。ペトロは愛する師イエスを三度も否定した直後に、彼を見つめる主のまなざしに貫かれました。(ルカ 22：61)「主イエスのまなざしによって、私は愛され、赦され、生かされている」、この信仰によって生きるペトロたちは、彼の苦しみと困難にしっかりと目をそらさずに留め、こう呼びかけることができたのです。この呼びかけによって、この人のまなざしが変わり始めました。彼の目は期待をもって二人を「見つめ」(口語訳「注目し」)(3：5)、彼らの姿をとらえ続けたのです。「ここには、私の求めている何かがあるのではないか」。



## 「ナザレ人イエスの名によって」

そのまなざしに答えて、ペトロは語ります。「わたしには金銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(3:6)。「金銀」、それは昔も今もありとあらゆる人間的力のシンボルです。しかし「わたしには金銀はない」し、それが彼の救いとなるものではないのです。「ナザレ人イエス・キリストの名によって」、「み名のあるところに、イエスご自身がおられ、働かれる。イエスさまが今も生きてあなたを愛し、あなたを立ち上がらせてくださいます。このイエスの名によって、生きていきましょう」そう宣言したので

### 準備のための聖書日課

|     |   |              |                  |
|-----|---|--------------|------------------|
| 11日 | ㊦ | ルカ22:54～62   | 主のまなざしに触れて       |
| 12日 | ㊦ | 使徒言行録4:5～14  | イエス・キリストの名によって   |
| 13日 | ㊦ | 使徒言行録4:23～31 | 聖なる僕イエスの名によって    |
| 14日 | ㊦ | 使徒言行録2:14～36 | 神から遣わされたナザレの人イエス |
| 15日 | ㊦ | 使徒言行録2:37～42 | 賜物としての聖霊         |
| 16日 | ㊦ | 使徒言行録2:43～47 | 皆ひとつとされて         |

す。すると彼は、「躍り上がって立ち、歩きだした」(3:8)。この「いやし」を超えて、彼は「神を賛美」し神を礼拝するという、新しい彼自身の人生に生き始めたのです。



### 礼拝から礼拝への途上での出会い

ペトロとヨハネは、「祈りの時に神殿に上って行く」途上で、この人と出会い、そこで復活のイエス・キリストの業を経験しました。私たちも「礼拝から礼拝へ」の途上で、人々と出会い、主のみ業を知るのではないのでしょうか。「礼拝から」出発するとき、神のみ言葉によって、私たちの価値観・見方・生き方が新たにされて、出会いへの準備がなされます。また「礼拝へ」と帰って行くことの中で、この世での出会いの困難と行き詰まりをも、主のもとに持ち帰るこ

とができるのではないのでしょうか。このような「礼拝への途上での出会い」の経験があれば、共に語り合い、分かち合ってみましょう。

### 「見る」ことが変えられ、関係が変わる

二人とこの人との出会い・関係は、それぞれの相手に対する見方が変化し深まる中で変わっていきます。教会において、また私たちの日常の場で、主の導きによって、人への見方が変えられ、関係が変わったということはないのでしょうか。そのような経験があれば、分かち合いましょう。

# ナザレの人イエス・キリストの名によって

聖書

使徒言行録3章1～10節

暗唱  
聖句

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」  
使徒 3：6

7課

5月17日

ラヤ（「主は見る」の意）さんは、自分の人生をあきらめてしまっていました。生まれつき歩くことができないラヤさんは、周りの人たちから仕事をさせてもらえず、エルサレム神殿の「美しい門」のそばに毎日座らされて、人々からお金をもらって生きるほかはなかったのです。「ああ、今日もあそこに座って、『どうか、お恵みを』と言わなければならないのか。ぼくの人生は、死ぬまで、こんなことの繰り返しなのか」。

しかし、大勢の人々の中から、二人組の男の人たちが、こっちへ向かって近寄ってくるではありませんか。二人は、ラヤさんに目をとめて、じっとこちらを見てくるのです。ラヤさんは、今までこんなに自分のことを、じっと目をとめて見てくれる人なんて、一人もいなかったと驚きました。二人のまなざしは、自分の心の中にじっと入り込み、深く優しく見つめてくれているようで、自分のことを何もかもわかっているかのようでした。

すると二人は、ラヤさんにこう言いました。「私たちを見なさい」、「同じように、しっかりと私たちに目をとめ、私たちのことをじっと見なさい。お互いにそんなふうにしっかりと見て、見つめ合う、そんな関わりを私たちと持ってほしいのです」。まるでそう言っているようでした。ラヤさんは、「この二人は、今までのどの人ともまるっきり違う。この人たちには、何か私の知らないものがあるんじゃないか」。



期待をもって見つめ返すと、その二人のうちの一人が言いました。「私には金銀はない」。それを聞いて、ラヤさんは少しがっかりしました。「なんだ、それじゃ駄目じゃないか」。でも、続けてその人は言ったのです、「しかし、ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。ナザレ人イエスの名前は、ラヤさんも聞いて知っていました。「いい人だったかもしれないが、結局は十字架につけられて死んでしまった人」。でも、不思議です。その言葉を聞いた瞬間、すごい力が自分に働きかけるのを、感じたのです。思わずラヤさんは立ち上がり、歩き出していました。ラヤさんには、このイエスさまという方が今も生きておられて、自分を愛し、自分を導こうとしていてくれることが、なぜかわかったのです。そして、ラヤさんの口から、神さまを賛美する言葉がほとばしり出たのでした。このときから、ラヤさんは、「イエスさまの名によって」、イエスさまと一緒に新しい人生を歩き出したのです。

# ナザレの人イエス・キリストの名によって

青少年科



聖書

使徒言行録3章1～10節

暗唱  
聖句

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」  
使徒 3：6

## 聖書から…

毎日「美しい門」まで運ばれてくる「足の不自由な男」。彼は、きっともう誰からも気にかけてもらえない存在になっていたのでしょう。毎日そこで物乞い<sup>ものごい</sup>をしている男。それが当たり前、どうせ物乞い<sup>ものごい</sup>をしているだけ。神殿の前を通りかかる人々は、そのように彼の存在に物乞いという「レッテル（名）」を貼り、彼を景色の一部のように感じ、向き合おうとする人は誰もいませんでした。そんな彼を弟子たちは「じっと見る」のです。その眼差しは、「毎日そこにいる物乞い」というレッテルでなく、痛み、苦しんでいるという彼の現実に向けられたものでした。

彼は今まで物乞いという「名」を一方向的に付けられることで社会的に抑圧<sup>よくあつ</sup>されてきました。しかし、弟子たちはそのような抑圧の「名」を取り上げ、「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言います。このことにより、彼はイエス・キリストの名によって物乞いというレッテル貼りされた人間でなく、「彼自身」として生きることを取り戻していくのです。

## 分かち合おう

- あなたの周りに、この「足の不自由な男」のように誰からも目に留められていない人はいないでしょうか。また逆に、一方的なレッテル貼りをされて注目を浴びてしまっている人々はいないでしょうか。おそらく、皆さんのよく知った街並みの中に、そのような存在がいるはずです。教会は、そしてあなた自身は、そのような社会的抑圧を受けている人たちとどのように共に生きることができのでしょうか。また、イエスはそのような方々をどのような眼差しで見られると思いますか。
- ペトロが「足の不自由な男」の存在を「見る」ことができたのは、ペトロ自身がイエスから温かな眼差しを受けたからです。ペトロはイエスを裏切りました。しかし、彼を「裏切り」という一点張りで「見ず」に、弱さを抱えた一人の人間としてイエスは温かな「眼差し」で「見つめ」、そして、愛し、赦されました。故に、ペトロもまた誰かのことを一点張りで見ることをしなかったのです。あなたは、一体イエスからどのような眼差しを受けているでしょうか。また、あなたは他者をどのような眼差しで見つめているでしょうか。他者に、レッテル貼りなどしていることはないでしょうか。

7課

5月17日







わたしの ぼくの  
なまえは

---

おおきく になったら

---

になりたい

すきな ばしょ  
おちつく ばしょ

すきな ほんは

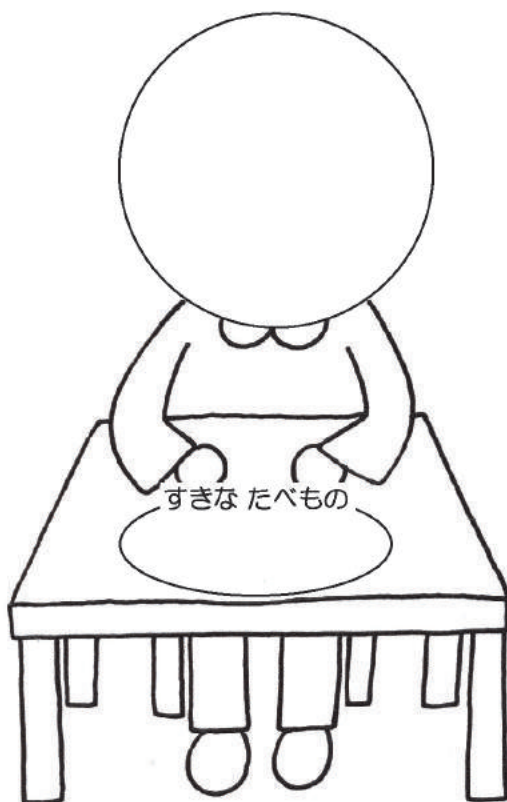
---

すきな べんきょうは

---

すきな スポーツは

みんなから みた じぶん



フリー スペース



# 散らされた人々は

聖書

使徒言行録8章1後半～8節

暗唱  
聖句

散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。  
使徒 8：4

8課

5月24日

## 散らされ、荒らされる教会

「その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり」(8：1)、教会の執事ステファノの殺害がきっかけとなり、大迫害の波が押し寄せたのです。この迫害は、政治権力によるものと言うより、多くの民衆による社会的な迫害という性質が強かったと思われます。ステファノの「神殿はもはや無用」とも取れるような自由主義的な立場(7：47～50)に対する、ユダヤ教保守派の人々の反発があり、その結果「私刑」のような形で彼は殺されていったと思われるからです。

ここには気になる言葉があります。「使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った」(8：1)。「使徒たち」は、なぜとどまることができたのでしょうか。当時のエルサレム教会には、けっこう大きく深刻な対立が内部にあったことが、6章1～7節からうかがえます。「ギリシア語を話すユダヤ人」と「ヘブライ語を話すユダヤ人」との葛藤です。「ギリシア語を話すユダヤ人」は「ヘレニスト」とも呼ばれ、生まれは外国で母語はギリシア語という人たちでした。彼らの中にステファノがおり、この後登場するフィリポもいました。彼らは、ステファノと同じような立場の人が多かったと思われます。この迫害は、もっぱらこの「ヘレニスト」たちに向けられたものであり、保守派が多かった「使徒たち」にはそこまで大きな危険が及びにくかったとも推測できます。教会は、内部的な葛藤・分裂の危機をも抱えていたのです。外部からの圧迫・迫害は、そのような危

機をさらに強め、「散らされていく」という結果になってしまったのです。

## 散らされた地、サマリアで

ところが、驚くべきことが起こりました。「散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」(8：4)。ここに新しい伝道が起こりました。「新しく福音を宣べ伝える人々」が現れたのです。やめるどころか、「散らされ、ばらばらにされていった」先々で、彼らは「よし、それなら、ここで伝道してやろう」と、語っていったのです。ステファノと並んで選ばれた執事の一人、フィリポのサマリア伝道は、その一つでした。フィリポは「ヘレニスト」です。彼らには、先に述べたような事情でユダヤにはなかなか留まる余地がなく、フィリポたちにとってユダヤから嫌悪・差別されていた「サマリア」は格好の「逃れの町」となったのではないのでしょうか。

## 新しい出会いの中での転換

ここで何が起こったか、いろいろな想像ができます。まず、フィリポたちが、このサマリアで受け入れられ、生きて行くすべや道が与えられたであろうということです。サマリアの人たちが、彼らを受け入れてくれたのです。イエスさまのたとえには「良きサマリア人」が登場しますが、まさに幾人もの「良きサマリア人」たちが彼らを迎え、助けてくれたのではないのでしょうか。そもそもイエスさ

まご自身が、すでにサマリアに出かけ、スカル<sup>かなわ</sup>の井戸の傍らでの一女性との出会いから始まり、サマリア伝道の種をまいてくださいました。(ヨハネ 4 章参照) フィリポも、一般的な差別や偏見から決して自由ではなかったと思われませんが、こうした出会いの中で彼自身の思いや生き方が変えられ、解放されていったのではないのでしょうか。

このような関係の変化と深まりの中で、伝道はめざましい実りを結んでいきました(8:6～8)。これは、主イエスの約束<sup>じようじゆ</sup>が成就し始めたまぎれもないしるしです。「あなたがたは力を受ける。…ユダヤとサマリアの全土で…わたしの証人となる」(1:8)。このサマリアに福音が宣べ伝えられたということは、福音宣教の土俵が大転換し始めたことを示しています。

#### 準備のための聖書日課

|     |   |                 |                |
|-----|---|-----------------|----------------|
| 18日 | ㊦ | ヨハネ4:39～42      | 世の救い主イエス       |
| 19日 | ㊧ | 使徒言行録6:1～7      | 霊と知恵に満ちた七人     |
| 20日 | ㊨ | 使徒言行録6:8～15     | 天使のようなステファノ    |
| 21日 | ㊩ | 使徒言行録7:44～53    | かたくなで、聖霊に逆らう人々 |
| 22日 | ㊪ | 使徒言行録7:54～8:1前半 | 神の右に立ちたもうイエス   |
| 23日 | ㊫ | 使徒言行録11:19～26   | 信じて主に立ち帰った人々   |



### 「散らされていく」 経験の中で

教会は、時に様々な困難を経験します。外部的には、ここにあるような社会の人々からの偏見・非難・中傷といったものがあるでしょうし、さらに今後はますます、国家権力による圧迫・嫌がらせ・迫害というものを模考しておかなくてはならないでしょう。また、そのような不利な状況の中で、内部的な危機が襲<sup>おそ</sup>うこともあり得るでしょう。

そのような中で、「散らされていった」人々の中から「新しい宣教」が起こされていったことを、聖書は語ります。かれらの発想と生き方の転換のかぎは何だったのでしょうか。この「不思議」について、皆で考え話し合ってみましょう。

### 「サマリア」での出会いから

その一人フィリポは、サマリアへと導かれて行きます。彼もサマリアまたサマリア人への偏見や差別感から自由ではなかったかもしれませんが、その地での「良きサマリア人」たちとの出会いの中で自由にされ、また新しい主のみ業を経験したのではないのでしょうか。私たちにも、思わぬ場所で、思わぬ人との出会いが起こされ、その中で自分を変えられ、主の業<sup>わざ</sup>を知ったという経験がないのでしょうか。

# 散らされた人々は

聖書

使徒言行録8章1後半～8節

暗唱  
聖句

散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。  
使徒 8：4

8課

5月24日

ステファノが殺されてしまったことをきっかけとして、エルサレムの教会に大きな「迫害」が起きました。「迫害」って、どんなことでしょうか。この世の力ある人々（王や政府など）や、社会の多くの人々によって、教会が苦しみや困難を経験させられることです。聖書には、「人々は散らされていった」と語られています。「散らされる」というのは、「ばらばらにされる」ことです。

ところが、ここに不思議なことが起こりました。そんなふうに「散らされ」て「ばらばら」にされて、いろいろな所へ行った人たちが、それぞれの場所でイエスさまとその福音を伝え始めたのです。最初その人たちは、そこへ行くつもりはありませんでした。迫害に押し出されて、仕方なく逃げて行ったのです。

たとえば、執事だったフィリポはサマリアに逃げて行きました。サマリアというのは、もともとユダヤ人が嫌っていて、ユダヤ人が付き合わずに差別されていた人たちが住んでいた所です。はじめはフィリポも「こんな所に来るなんて」と思っていました。

ところがそこで出会ったサマリアの人たちは、自分がかつて思っていたような人たちでなくて、自分と同じ人間で、こんなふうに逃げてきて困っている自分を本当によく助けてくれました。フィリポは、とても反省しました。「今まで、自分は間違った考えや思い込みによって、サマリアの人たちを差別していた。でも実は、イエスさま



が私をわざとこの地に送ってくださったのではないだろうか」。人々を愛し共に生きられたイエスさまが、ひどい汚名<sup>おめい</sup>を着せられて、十字架の苦しみを味わい、殺され、死なれた。しかし、そのイエスさまを神さまは死の中から復活させられた。そうであるなら、この私たちの迫害と苦しみからも新しい良いことが神さまによって生まれるのではないか。そう考えるようになったのです。

そんな中でフィリポは、かつてのイエスさまの約束を思い出しました。「そうだ、イエスさまは、『あなたがたはサマリアでも、わたしの証人となる』と言われていたんだ」。そう思ったフィリポは、このサマリアでイエスさまを伝え始めたのです。フィリポの心の中に、さわやかな風が吹き始めたようでした。そのほかの場所でも、同じような出来事が起きました。「散らされて行った人々」の間に、神さまの自由の風が吹き始めたのです。



# 散らされた人々は

聖書

使徒言行録8章1後半～8節

暗唱  
聖句

散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。  
使徒 8：4

青少年科



8課

5月24日

## 聖書から…

フィリポたちは、時の権力者によって、ユダヤとサマリア地方に散らされていきます。宣教の同労者たちがバラバラにされていくことは苦難であったことでしょう。しかし、そのような苦難の中で、散らされていった人々は、それにもめげずに「福音を告げ知らせながら、巡り歩いた」のです。散らされていくことは、宣教の力が分散させられることのように思えます。しかし、そこに聖霊は働き、力を与え、福音を語らせたのです。

フィリポはそのような聖霊の力を受けた一人なのです。フィリポはサマリアを訪れキリストを宣べ伝えます。今まで嫌っていたサマリア人。本当ならそんなところで宣教なんてしたくないとフィリポは思ったことでしょう。しかし、実際にサマリアに訪れ、サマリア人と出会ったことで、彼は初めて本当のサマリア人を知るのです。そして、これまでのユダヤとサマリアとの関係性を乗り越え、共に福音を分かちあう機会を得たのです。

迫害という困難の中であって、散らされていった人々。自分の思いで向かったわけではない場所で、彼らは新たな出会いを経験し、福音を分かちあっていきます。人間の思いを超えた、聖霊の導き、神の働きがここにあることを思わされます。

## 分かち合おう

- 神さまは私たちが想像しないような「出会い」を準備されています。フィリポは自分の偏見<sup>へんけん</sup>を捨て、サマリア人と本当に「出会った」「向き合った」からこそ、変えられていきました。神さまから「出会い」を与えられ、またその「出会い」から変えられる体験をしたことがありますか。一方で、知らない人たちとの「出会い」を避<sup>さ</sup>けている自分はいませんか。どうして、他者との「出会い」を避けてしまうのでしょうか。

- 仲間が散らされる時、誰もが不安<sup>おちい</sup>に陥<sup>おちい</sup>ると思います。バラバラにされるといふ現実だけを見るならば、不安しかないでしょう。しかし、フィリポたちが現実を知りつつも、聖霊の力を受け、神さまを見上げた時、彼らはバラバラにされてもなお、目的や希望を見つけることができました。現実にはマイナスとしか思えない事柄の中にあって、希望や新しい目的を見つけるという体験を皆さんはしたことがありますか。もしあれば、分かち合ってみましょう。

# 散らされた人々は

聖書

使徒言行録8章1後半～8節

暗唱  
聖句

散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。  
使徒 8：4

## 聖書から…

8課

5月24日

エルサレムの教会で起こった「迫害」は、「どうして私にこんなことが起こるの？」という出来事でした。私たちも「なんで私にこんなことが起こるの?」「なぜ私ばかり…?」と思うことがあります。

フィリポは迫害から逃げながら、それでもイエスさまのことを伝えながら歩んでいました。自分が差別していた人の所に行った時には、フィリポ自身の今までの思い込みが変えられるという経験をしました。フィリポは出会いを与えられながら、散らされた場所でイエスさまを伝えたのです。

私たちの歩みはどうでしょう。神さまの計画がいったいどこに、どのように向いているのか、自分の歩みなのに自分でも知ることは難しいです。だから自分の思うようにいかないことも、あるいは思うようにいったことも、一緒にいてくださる神さまに祈りながら歩めたらいいですね。

## 活動①

### 「バラバラになろう」

- ①体を使って、じゃんけんポーズを決めます（グー：しゃがむ／パー：バンザイ／チョキ：片足で立つなど、年齢や状況に合わせたポーズ）。
- ②三人ずつ組みになってじゃんけんポイ！みんな違うポーズになったら成功です。
- ③だんだん人数とポーズを増やしていきます。

\*バラバラにされることを喜ぶのは、なかなか難しいですね。一緒にポーズの人がいることは安心なのですが…。バラバラになっても喜び合えるといいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「バラバラに散らされても」

●準備●サイコロ 1つ、駒になるもの 4つ、ワークシートの拡大コピー、世界地図や日本地図（なければ聖書の地図でも可・低学年は地域の地図でも）

4人、もしくは4組のグループで行います。クラスが4人以下の場合は、一人で2つの駒を動かしてもOKです。

- ①1～4の番号を振り分けて、各自の駒を拡大したワークシートのコピーのスタート地点に置きます。
- ②用意した地図を見ながら、それぞれ自分が行く地名を決めましょう。
- ③その地名を各自のゴール地点に書きます。
- ④じゃんけんで順番を決めたら、サイコロに合わせてすごろくをします。自分の決めた地名にたどり着いたらゴールです。途中、他のチームの地名を通る時もコマとして進みます。

注意：★や◎で止まるとゴールが変わります。ゴールが近くなったり遠くなったりします。逆回りはしません。

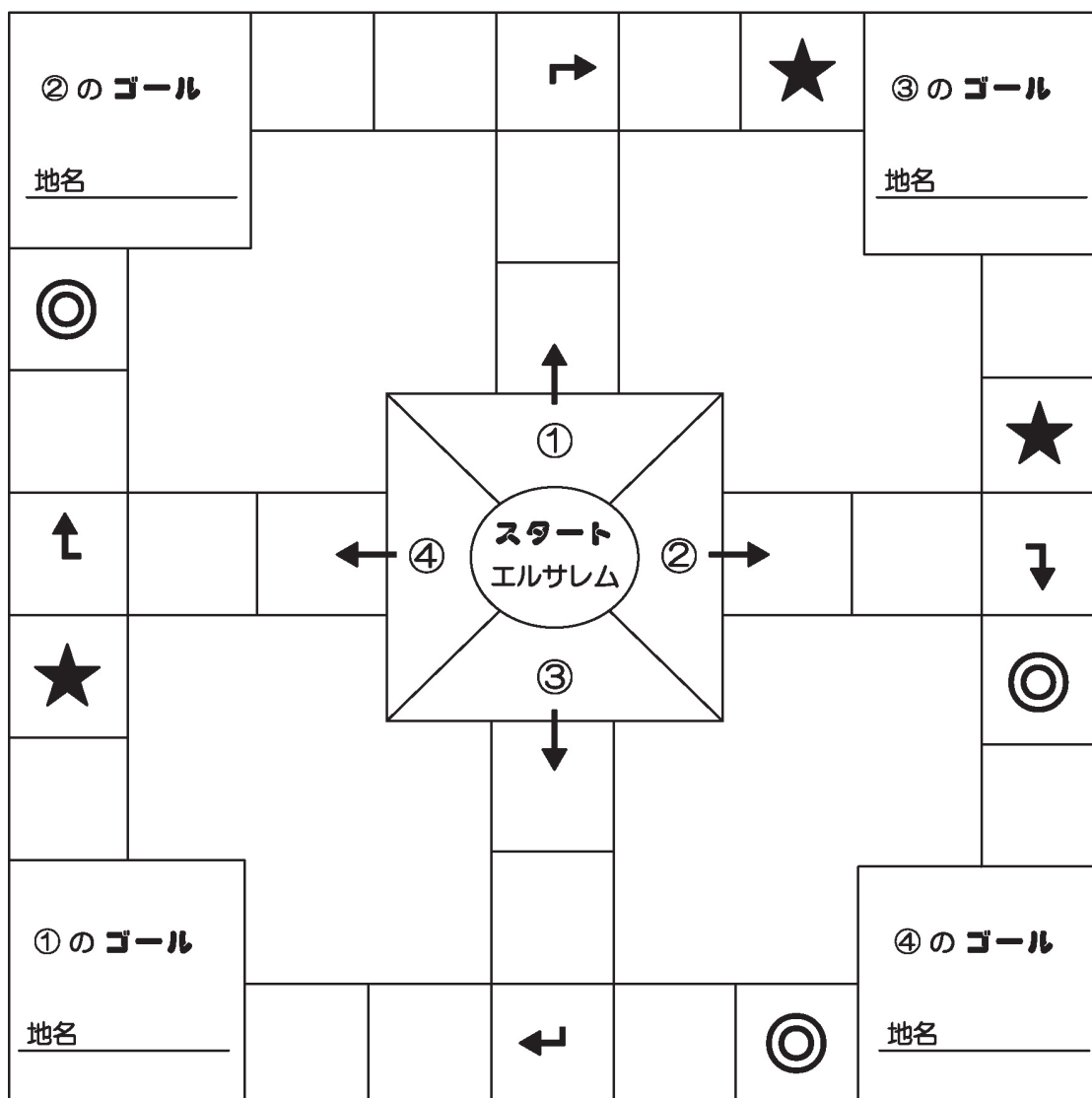


★でちょうどとまったら  
1つ前の数字の人とゴールをこうかんします。

◎でちょうどとまったら  
1つ後の数字の人とゴールをこうかんします。

8課

5月24日





# 神は人を分け隔てなさない

聖書

使徒言行録10章9～16節、44～48節(参照10:17～43)

暗唱  
聖句

神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。  
使徒 10:15

9課

5月31日

今日はペンテコステ（<sup>せいれいこうりんび</sup>聖霊降臨日）です。使徒言行録に描かれる、教会の伝道の進展は、イエスさまが与えられた聖霊の約束の具体的な実現です。「あなたがたの上に聖霊が<sup>くだ</sup>降ると…地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（1:8）。

## 教会の回心の物語

聖霊は、すでにローマの軍人コルネリウスに働きかけて、教会の人ペトロを呼び寄せるように命じられました。聖霊の働きは、教会の思いを超えて進んでいたのです。コルネリウスの使いが向かっていた頃、ペトロは一つの幻を見せられました（10:9～16）。ペトロも含めてユダヤ人は、神のみ業と恵みに粹を設け、壁を作っていたのです。その一つの表れが、食べ物についての禁止規定でした。（レビ記11章参照）ところが、その「壁」や「粹」が、ほかならぬ神ご自身によってひっくり返され、<sup>くず</sup>崩され、<sup>こわ</sup>壊されるのです。「神が清めた物を、清くないなどと言ってはならない」（10:15）。ペトロが、これは何のことだろうと考えていたその時、階下（<sup>うなげ</sup>うなげ）に訪問客があり、神の霊の言葉が彼を促します。「ためらわないで一緒に出発しなさい」。

行って事情を聞いたとき、ペトロは悟りました。「あの幻は、このことであつたのか。私たちは、神が選び清められたのはユダヤ人だけで、福音もまた私たちだけに向けられていると勘違いしていた。しかし、神のみ心は違っていた。神は異邦人たちをも、福音のために選び招こうとしておられる。『神が清め

た物を、清くないなどと言ってはならない』のだ」。

この箇所は、「異邦人コルネリウスの回心」の話だと思われていますが、本当は「ペトロと教会の回心」の物語なのです。異邦人に福音が伝えられるためには、まずペトロが回心し、教会が変えられねばならなかったのです。社会的・文化的価値観や個人的偏見のせいで、神が受け入れ愛したもう人々を教会は受け入れることができないのです。しかし、神の霊が<sup>のぞ</sup>臨み働くとき、その「壁」は一つひとつ崩され、教会はより自由なものとされて行きます。

## 聖霊によって、<sup>へだ</sup>隔てや妨げを超えて、共に生きること

彼の家で足元にひれ伏そうとするコルネリウスをとどめて、ペトロは言いました。「お立ちください。わたしもただの人間です」（10:26）。それに対して、コルネリウスはこう語りました。「今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです」（10:33）。それは、コルネリウスもペトロも「共に」です。彼らは「ただの人間」、同じ人間同士、共に神の前にまかり出ていたのです。

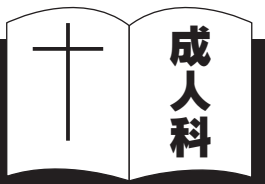
今やペトロは確言します。「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました」（10:34）。彼がイエス・キリストの福音を家の人たちに語っている間に、彼らの上に聖霊が降られたことのしるしと見える現象が起りました。ペトロは<sup>かんたん</sup>感嘆して言います。「わ



たしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水でバプテスマを受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」(10:47)。聖霊は、人間による「分け隔て」や「妨げ」を、神の愛によって打ち破り乗り越えつつ、異なる者同士を神の前に出会わせ、共に礼拝し、共に生きるようにと導くのです。

こうして与えられ、実現した両者の出会いこそが、イエス・キリストの福音の極めて大切な中心であり、ペンテコステの大きな喜びの一つではないでしょうか。「キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです」(エフェソ2:17～18)。

| 準備のための聖書日課 |   |               |              |
|------------|---|---------------|--------------|
| 25日        | ㊦ | 申命記14:3～21    | 汚れたものと清いもの   |
| 26日        | ㊦ | マルコ7:14～23    | すべての食べ物はい    |
| 27日        | ㊦ | エフェソ2:14～22   | ひとつの霊に結ばれて   |
| 28日        | ㊦ | エフェソ4:1～6     | 霊による一致を保つために |
| 29日        | ㊦ | 使徒言行録10:1～8   | 神を畏れるコルネリウス  |
| 30日        | ㊦ | 使徒言行録10:17～43 | すべての人の主イエス   |



## 異なる人々との出会いの中で

最近諸教会には、日本社会に自分のルーツを持たない様々な人たちの来会が増えていると聞きます。皆さんの教会ではいかがでしょうか。また教会には、さまざまな障がいがある方も来られるでしょう。そのような方々との出会いの中で、私たちや教会が「先入観や偏見から自由ではない」と感じることはありませんか。そういった「壁」を、どのように乗り越え、克服しようと努力しているのでしょうか。また、乗り越えるかぎはどこにあるのでしょうか。

## 聖霊の導きと力によって

今日はペンテコステです。聖霊の具体的な働きの中に、互いに異なる人々を出会わせ、お互いを変えて自由とし、神の前で共に生きるようにさせるということがあると思います。「それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです」(エフェソ2:18)。そうした聖霊の働きや業を、どのように求め、見出し、共に喜んでいくことができるでしょうか。また、そのような聖霊のみ業の経験があれば、分かち合いましょう。

# 神は人を分け隔てなさない

聖書

使徒言行録10章9～16節、44～48節(参照10:17～43)

暗唱  
聖句

神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。  
使徒 10:15

9課

5月31日

ペトロは、伝道のためにヤッファという町に来てシモンという人の家に泊まりました。ヤッファは港町です。それで、ペトロをもてなすために出てくる海産物のとても豊かでおいしそうなこと！しかしイカやタコやエビは、律法の中に、「ひれやうろこのない海の生き物を食べてはいけない」という戒めがあるので、ペトロは食べられなかったのです。「汚れたものだ、食べてはいけない」と思っているうちに、食べるものがなくなってしまいました。死ぬほどお腹が空いて、「外で祈ろう」と思って屋上に出て行きました。

フラフラになって、ボーっとしていたとき、ペトロは不思議な幻を見ました。天から大きな布のようなものが降りてきます。その中には「汚れている、食べられない」と思っていたイカやタコやエビが、たくさん入っていたのです。そして神さまの声が聞こえました。「ペトロよ、これらのものを食べなさい」。ペトロが「できません」と答えると、「神が清めた物を、清くないなんて言ってははいけない」。それが三度も繰り返されて、ペトロは目が覚めました。「これはいったい何のことだろうか」。

その矢先、下から呼ぶ声がします。降りて行ってみると、コルネリウスというローマの兵隊が部下を送って来て、ペトロに「ぜひうちに来ていただきたい」とのことでした。そのとき、聖霊のささやきが聞こえました。「この人たちと一緒に行きなさい」。

そこで出かけて行き、コルネリウスの家



に着き、中に入ってペトロは尋ねました。「どうして私をお招きくださったのですか」。「実は、数日前私のところに神の使いが現れて、あなたを呼びなさいと言ったのです。私たちは皆、あなたから神さまのみ言葉を聞こうと集まっているのです」。それでペトロはイエスさまの福音を語りました。すると、集まっていたのは、みな外国の人たちだったのですが、その人たちに聖霊が降ったのです。ペトロは心の底からわかりました。「私は、あのタコやイカを清くないと思っていたように、外国人も清くなくて神さまから愛されていないと思っていた。でもそうではないのだ。神が清くされた人を、そうではないと言ってはならないのだ。神さまは、この人たちのためにもイエスさまを送られ、福音を伝えたいと思っておられるのだ」。そうわかったペトロは、自分がとても自由にされたと感じ、とてもうれしく感じたのです。「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました」。

# 神は人を分け隔てなさない

青少年科



聖書

使徒言行録10章9～16節、44～48節(参照10:17～43)

暗唱  
聖句

神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。  
使徒 10:15

## 聖書から…

異邦人コルネリウスとユダヤ人ペトロの二人ともが、まず神の働きかけを受けています。ペトロはユダヤ人であったので律法による食物規定(14節参照)があり、異邦人との交際も禁じられていました(28節参照)。しかし、ペトロはコルネリウスと出会い、経験をつかち合い、共に聖霊を受ける(44節参照)ことによって、互いが隣人であり、同じ人間であることを知ったのです。コルネリウスもまた、ペトロから福音を聴き、バプテスマの決意が与えられ、異邦人キリスト者となりました。

もしかするとペトロは、自分自身は何も変わることなく、ただ異邦人コルネリウスに一方的に何かを語ろうとしていたかもしれませんが、既に働かされている神の働き、異邦の地にあって出会わされた人々と共に福音をつかち合う中で、自分の中にあった異邦人との隔ての壁が打ち壊されていく体験をし、変えられていきました。このように聖霊の働きにより、ペトロもコルネリウスも新たにされていきます。そして、互いを認め合い、共に生きようとする中で「神は誰も分け隔てなさない」(34節)ということを実に体験をしていくことになるのです。

## 分かち合おう

- 大学生の頃に韓国旅行をしました。その時に韓国の友人が「ポンテギ」という、カイコの蛹を茹で、味付けした韓国料理のおつまみを買ってくれたのですが、どうしても食べることができませんでした。ペトロは食物規定を絶対化していました。神さまが三度も「神が清めた物を清くないなど、あなたは言うてはならない」と言われてもなお、それを乗り越えることは厳しいことだったでしょう。自分が信じている価値観が絶対化される時に、他者の価値観の排除が始まります。自分が絶対だと思っていた事柄が覆された経験はないでしょうか。
- 今、日本には外国人労働者が増えてきています。多文化共生が叫ばれる一方で、実際には外国の方々を労働力としてしか見ていない現実があります。昨年のラグビーワールドカップにおいて、多国籍な人々が集まった日本代表は多様性の象徴のように扱われていました。しかし、外国出身の選手たちが日本の「国」に尽くしたからこそ、多くの人が彼らの多様性を認め、「日本代表」として応援したのではないかという疑問を私は持ちました。多様性とは「国」に貢献して初めて認められるものなのでしょうか。そのような課題の中であって、教会が外国出身の方々のために果たす役割とはなんのでしょうか。

9課

5月31日

# 神は人を分け隔てなさない

聖書

使徒言行録10章9～16節、44～48節(参照10:17～43)

暗唱  
聖句

神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。  
使徒 10:15

## 聖書から…

今日はペンテコステです。聖霊降臨日といわれたり、教会の誕生日といわれたりします。

弟子たちは、この日起こった出来事で自分を変えられて歩み出しました。今日の聖書でも、「今までこうだ!」と思っていたことが変えられるということがおこりました。

私たちがこうだ!と決めつけて見る時、本当のことに気づけないことがたくさんあります。探し物がここにはない!と決めつけて探しても見つからなかったり、この友だちとは合わないと思いながら接して、その子の事がよくわかっていなかったり…。でも決めつけないで見た時、気づかされることがあり、その気づきは喜びやうれしさ、人と人の関係を変えられることもあるのです。私自身も、神さまから分け隔てなく愛されているのです。このことをお互いに喜び合えたらいいですね。

## 活動①

### 「どっちがどっち?」

●準備●大きい箱と小さい箱(段ボール箱 大小でも可)、箱に入る隠す物(部屋にあるものなど)

- ①リーダーは、隠す物を見せてから、メンバーは後ろを向きます。
- ②「どっちの箱に入っているでしょうか?」と言う間にどちらかの箱に隠します。
- ③メンバーはどちらの箱に入っているか当

ててみましょう。

\*小さいものが小さい箱に入っているとは限りません。慣れてきたら隠す物を二つにしたり、メンバーが隠したりしてもいいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「なんで? どうして?」

●準備●ワークシートの拡大コピー

ずっとそこにいとあたりまえ過ぎて気が付かないけれど、新しく来た人にとっては不思議なルールがみんなの周りにも隠れているはず。みんなで探して、「なんで? どうして?」を周りの人に聞いてみましょう。意外な理由があったりして…? 「知る」ことは相手を理解することにもつながりますね。

- ①ワークシートに「なんで? どうして?」と思うことを書きます。
  - ②予想して、理由を自分なりに書いてみます。
  - ③クラスのメンバーやリーダー、教会の人に「ほんとうは…」という理由を聞いてみましょう。
  - ④「なるほど」と、納得できましたか? 「うーん? どうして?」と納得できなかったら、どうしたらいいか、もっといい案を提案してみましょう。
- 例…礼拝のお花はなんで毎週飾るの? / 交読文ってなんであるの? / 日本の学校はなんで上履きを使うの? など



①  
ぎもん

なんで？



②  
よそう

きっと



③  
こたえ

ほんとうは



④  
もっと  
いい案

してもいいかも

なんで？



きっと



ほんとうは



してもいいかも

なんで？



きっと



ほんとうは



してもいいかも





# 主に倣う者となっている

聖書

テサロニケの信徒への手紙—1章1～10節

暗唱  
聖句

信仰によって働き、愛のために労苦し、…希望を持って忍耐している  
—テサロニケ 1：3

## 主に倣う者となり、 模範となっている

テサロニケ教会に向けてこの手紙を書くパウロは、彼らとの最初の出会から書き始めます（1：9～10）。パウロたちがどのように彼らの中へと入って行き、パウロたちを通して、彼らがどのように信じるに至ったかということです。

その最初の出会から現在に至るまで、テサロニケの信徒たちは「ひどい苦しみ」（1：6）の中で教会生活を送ってきたとパウロは語ります。この「苦しみ」が何であったかはよくわかりませんが、想像することはできます（使徒 17：1～9 参照）。そこでは、パウロたちの伝道に対して一部のユダヤ人がねたみを持ち、暴動を起こし、パウロらをローマ皇帝に反逆する者として告発したのでした。その騒ぎの中で、テサロニケの信徒と思われる人々（ヤソンと数人の兄弟たち）が、パウロたちの身代わりとなって捕らえられています。そんな「苦しみ」の中で、テサロニケの人々は「信仰によって働き、愛のために労苦し」、「希望をもって忍耐」してきました（1：3）。

その彼らに対して、パウロは慰めと励ましを込めて、最大級の評価と感謝を伝えます。「あなたがたはひどい苦しみの中で…わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです」（1：6～7）。ここで彼は、驚くべきことを言っています。「あなたがたは、主イエス・キリストに倣う者となり、すべての信者の模範となっている

のだ」。「主に倣い、模範となきなさい」ではなく、「もうすでに模範となっている」というのです。それは、慰めの言葉であり、福音による宣言です。

## 型を真似ること

ここで「模範」と訳されている言葉の直訳は「型」（テュポス）です。これは元々、工芸品や芸術作品がモデルとすべき、元の形・型を意味していたと思われます。この言葉が、信仰に基づく生き方の伝達と継承を表すために用いられているのです。イエス・キリストの「型」「模範」が、イエスさまに出会いイエスさまを信じたパウロによって「倣われ」、彼の宣教を聞き信じたテサロニケの信徒たちによって「倣われ」、さらにはテサロニケの人々が他の教会の「模範」となったのです。これら一連の動きの中には、まさに「信頼（信仰）」があります。「この人は信頼できる。この人の言葉や生き方は、信じて、それを真似して生きるに足るものだ」、そう思って、その通りに生きること、それが「信仰」なのではないでしょうか。信仰とは、単なる理解や認識ではなく、具体的な生や他者との交わりの中で、イエス・キリストの姿（型）に倣って生きていくことではないでしょうか。

## 苦難の型

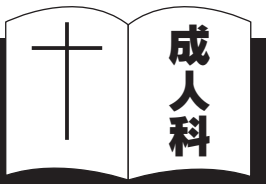
このようにして倣われ、生きられてきた信仰の「型」、それはどんな型、どのような内

10課

6月7日

容を持つものなののでしょうか。それは、「苦難の型」です。このことは、「型」と関連する動詞が、「打つ、たたく」さらには「害する、苦しめる」という言葉であることから支持されるでしょう。「模範」「型」とは、「打ちつけられ」「押し付けられ」た「<sup>あと</sup>痕、<sup>こんせき</sup>痕跡」であったのです。「キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである」（ピリピ3：10～11 口語訳）。パウロが倣い学んできた「型」は、イエス・キリストの「死のさま」でした。神を愛し人を愛して、そのために苦しみを受けず、十字架の死にまで至ったその「死のさま」です。このイエスさまの「死のさま」が、パウロの「生きざま」を通してテサロニケの人々に伝わり、彼らによって信じられ、生きられたのです。

| 準備のための聖書日課 |                |                 |
|------------|----------------|-----------------|
| 1日         | ㊦ 使徒言行録11：1～18 | どの人にも命を与えてくださる神 |
| 2日         | ㊦ 使徒言行録13：1～3  | 派遣されるサウロとバルナバ   |
| 3日         | ㊦ 使徒言行録17：1～9  | いつものように伝道するパウロ  |
| 4日         | ㊦ コリントー13：8～13 | 信仰と希望と愛         |
| 5日         | ㊦ ローマ15：1～6    | キリスト・イエスに倣って    |
| 6日         | ㊦ フィリピ3：12～21  | 使徒パウロを模範として     |



## あなたの信仰の「型」は誰ですか？

私たちが信仰を持ち教会生活を送ってきた中で、自覚的に、あるいは知らず知らず、誰かの信仰の「型」にあこがれ、その人から教えられ、その人を尊敬し、その生き方に倣ってきた面があるのではないのでしょうか。そのような「型」となった人たちのことを、思い出しながら語り合ってみましょう。しかしながら、私たちの信仰は全くの「まね」ではなく、「私でなければ」ということが起こされ、与えられてきたのではないのでしょうか。それは、どのようなことをきっかけとして、どのように形成されてきたのでしょうか。

## なりたい「型」がありませんか？

あるいは、そんな「まねたい、なりたい型」はなかった、さらには「ああはなりたくない」と思うってしまうような体験もあるかもしれません。そうした経験を乗り越えて、前進して行くためには、どうすればよいのでしょうか。一つの考えとして、「私たちの究極の『型』はイエス・キリストである」と言うことができるのではないのでしょうか。

# 主に倣う者となっている

聖書

テサロニケの信徒への手紙ー1章1～10節

暗唱  
聖句

信仰によって働き、愛のために労苦し、…希望を持って忍耐している  
ーテサロニケ1:3

10課

6月7日

今パウロは、テサロニケ教会の人たちに、心をこめて手紙を書こうとしています。なぜなら、彼らは今迫害やいろいろな困難、また苦しみの中にいるからです。

「何から書こうか」と少し考えたパウロは、パウロと彼らの初めの出会いを振り返ろうと思いました。「わたしが初めてあなたがたのところへ行った時のことを思い出してみてください。あなたがたは、私たちの言葉を神さまからのものとして、信じて受け入れてくれました。その言葉とは、イエスさまが私たちを愛して、私たちのために生き、そして死んでくださった、その道そのものでしたね」。

そうです。イエスさまは、ただ言葉によって教えを語られただけでなく、同時にその言葉の通りに生きて、「お手本、模範」を残されたのです。私たちは、イエスさまをそのまま真似することなどできませんが、イエスさまが歩かれた道と生き方を、後ろからたどりながら生きて行こうとすることはできるのです。神さまを自分のすべてを尽くして愛すること、神さまが出会わせてくださるすべての人を全力で愛すること。特にこの世の苦しみの中にいる人、弱く小さくされている人を愛すること。そのためには自分の不都合や苦しみを避けないこと。とうとうイエスさまは、そのために十字架にかけられて殺され、死ぬところまで行かれたのです。このイエスさまと出会い、パウロは、「イエスさまのように生き、死に、そして復活する」ことを目指して生き、こ



のことを多くの人々に伝えようとしてきたのでした。

「あなたがたも同じです。あなたがたは、わたしが伝えた言葉の中に、イエスさまのお姿をはっきりと見て取り、ここに真理があり命があると信じてくれました。そして、私たちの生き方を真似して生きようとし、それによってイエスさまに倣おうとしてくれたのです。あなたがたは迫害の苦しみの中でも、神さまとイエスさまを信じることをやめませんでした。その苦しみの中で、信仰の友を裏切ったり見捨てたりすることもしませんでした。かえって、教会の中だけでなく、世の中で苦しむ人たちに会って、できるだけその人たちと共に生きようとしてきたのです。たとえそれが、自分が苦勞する道であっても、それを喜んで歩こうとしてきたのです。だから今、今度はあなたがたが、周りのすべての教会の人たちにとってお手本となったのです。私はあなたがたのことを心から誇りに思い、神さまにいつも心から感謝しているのです」。

# 主に倣う者となっている

青少年科



聖書

テサロニケの信徒への手紙—1章1～10節

暗唱  
聖句

信仰によって働き、愛のために労苦し、…希望を持って忍耐している  
—テサロニケ 1:3

## 聖書から…

テサロニケの人々の信仰はマケドニア州とアカイア州にいるすべての信徒たちの「模範」となるに至ったとパウロは語ります(1:7)。「模範」の原意は「型・形」です。しかし、この箇所では「型」にはまり、「<sup>かくいつてき</sup>画一的」になれと言われているわけではありません。なぜなら、もとより私たちは神さまから一人ひとり形づくられた多様な存在だからです。多様性を分かち合いながら、イエスさまと共に生きるところに喜びがあります。

一方で私たちは多様であるがゆえに、それぞれの信仰理解に「<sup>そくばく</sup>束縛」されながら信仰生活を過ごしやすい存在でもあります。故に、多様な私たちにとっての「共通のモデル(型)」もまた必要です。私たちの共通のモデルはイエスさまです。テサロニケの人々も「多様」でありながらも、「共通のモデル(型)」である、イエスさまに<sup>なら</sup>倣っているからこそ、「模範」と呼ばれる存在なのです。

私たちはイエスさまと同じことはできません。しかし、イエスさまの信仰を「<sup>まね</sup>真似ること」また「学ぶこと」はできるはずです。そして、イエスさまに「倣う」時、私たちには「<sup>えい</sup>画一的」に生きるのではなく、「多様性」を喜ぶ生き方が与えられます。そのような喜びの中でこそ、「信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望をもって忍耐」(1:3)を生きることができるのです。

## 分かち合おう

- あなたにとって「模範」となる人物がいますか。なぜその人を自分の「模範」としているのでしょうか。憧れ？ 信仰的だから？ 何か特別なことができるからでしょうか？ また、イエスさまを信仰の模範として本気で見ていますか。もしかすると、最初からイエスさまを模範にすることを諦めてはいないでしょうか。私たちがイエスさまを模範とすることの意味を考えてみましょう。
- 「多様性」を大切にするよりも、一つの考えで「<sup>えい</sup>画一的」にし、そこに当てはまらないものを排除する方が簡単でしょう。しかし、イエスさまは「多様性」を大事にされ、一人ひとりの「<sup>あきら</sup>存在」を大切にされました。あなたの教会では「多様性」を大事にしていますか。あなた自身は「多様性」をどう考えて生きていますか。C.S. ソンという神学者が「神はクリスチャンを創造したのではありません。すべての人間を創造したのです」と述べたと読んだことがあります(関谷直人著『牧会の羅針盤メンタルヘルスの視点』P.65)。ともしれば、教会の働きが固定化され、クリスチャンのためだけの場所になってしまい、多様な人々の存在を見失っていないでしょうか。

10  
課

6  
月  
7  
日

# 主に倣う者となっている

聖書

テサロニケの信徒への手紙ー1章1～10節

暗唱  
聖句

信仰によって働き、愛のために労苦し、…希望を持って忍耐している  
ーテサロニケ 1:3

## 聖書から…

みなさん、憧れている人はいますか？  
こんな人になりたいな、こんな大人になりたいな、この子の〇〇なところ素敵だな、  
と思う人はいますか？パウロにとってイエスさまは、真似することは難しいけれど、  
このように生きたいと思う方でした。聖書にある「ならう」は教えてもらう「習う」ではなく、したがうという意味の「倣う」という字を使っています。その人の見た目、外見を「ものまね」するのではなく、その心の内を真似したいと思ってなかなかできることはありません。

神さまは、私たち一人ひとりに違いを与えてくださり、それぞれに思う心も与えられました。テサロニケの教会の人たちが、迫害のなかでも信仰をもって歩んだことが、パウロにそして更に次の人へと伝わっていききました。その真ん中にいつも神さまがいてくださいました。私たちの歩みはどうでしょう？誰にどのようにしたがっていきたいですか？

## 活動①

### 「前にならえ？」

- ①リーダーが先頭に立って一列に並びます。
- ②はじめは手拍子をしながら前に進みます。
- ③リーダーは歩きながら手拍子の間にいろいろな振りや立ち止まってポーズをとった

ります。みんなでリーダーの真似をしましょう。真似することが楽しい？大変？自由にポーズを取りたい？いろいろな思いをもちながら一緒に歩いていくことを喜ぶといいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「心をこめて書くてがみ」

- 準備●ワークシートのコピー、筆記用具、封筒

心をこめて手紙を書いたパウロ。テサロニケの教会の人たちに宛てて書きました。

適当に書く手紙はあまりないかもしれませんが、誰かを思って手紙を書くとき、その時間はその人の事を思う時間になります。みんなで手紙を書いてみましょう。いつも会っている人でも、最近会っていない人でも、友だち、家族、教会の人…。手紙の内容は発表できなくても、メンバーがどうしてこの人に書こうと思ったか、どんな事を伝えたいのかを分かち合えるといいですね。書く相手に困る場合は、教会の方の似顔絵を描いてプレゼントしたり、お休みのメンバーに手紙を書いてもいいですね。封筒に入れて渡しましょう。

神さまへの手紙は次週に…。





📧 なぜ <sup>ひと</sup>その人に <sup>か</sup>書こうと <sup>おも</sup>思ったかというところ ...

より



# 神の言葉が働いている

聖書

テサロニケの信徒への手紙一2章1～13節

暗唱  
聖句

それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。ーテサロニケ2：13

## 人の言葉でなく、 神の言葉として

パウロは、テサロニケ教会の人たちに初めてイエス・キリストの福音を語り告げたときのことを、引き続き振り返っています。そしてまとめるかのようにこう記すのです。「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです」(2：13)。パウロの感謝のポイントは、彼ら彼女らにイエス・キリストの福音を語ったとき、テサロニケの人々は、それを「神の言葉として」信じ受け入れたということです。

「神の言葉には、働きがある」ことをパウロは強調しています。「事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」。もちろん、「人の言葉」でも、それなりの力や働きをしますが、いったい何が違うのでしょうか。「働く」(エネルギー)の言葉の特徴として、新約聖書では、人間に関わることには用いられず、もっぱら人間を超えた力や働きについて用いられています。しかも単なる「力」「パワー」ではなく、「目的があり、意味深く、効果的で、精力的な活動を指す」ということです(参照：バークレー『新約聖書ギリシア語精解』日本基督教団出版局)。つまり、「神の言葉は、人を超えた、著しい力と働きをもって、神の目的と業を行っている」のです。パウロは、テサロニケ教会において起こって

きたこと、起こっていることのすべてについて、それは「神の言葉の働きなのだ」と理解し、証言しているのです。

## 大いなる働きとしての、 神の言葉

パウロがここで「神の言葉の働き」として語っている出来事は、大きく言って二つあると思います。

一つは、「苦難の中での働き」です。「わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした」(2：2)。苦難や迫害の中で、人は語る勇気を失ったり、保身的になって権力や社会に妥協したりなりがちです。けれども、厳しい苦難の中でも、福音によって働く神の言葉は、あのようにパウロたちを語らせ、このようにパウロたちを支えたのでした。

二つ目は、「人に仕え愛する働き」です。「わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです」(2：8)。それは、パウロにとって、明らかに「自然に出てくる人間の愛を超えている」と思われたのでした。そのような著しい愛が、テサロニケの人々に対して、自分の中から湧き上がってきたことを感じたのです。

11課

6月14日

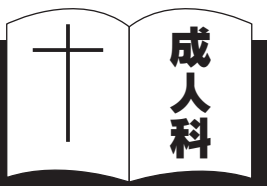
## 神の復活の力、 復活の主そのもの

「働く」が名詞となった形「働き」（エネルギー）は、新約聖書の他の書物で、しばしばイエス・キリストの復活について、「神がイエスをよみがえらせた力、働き」として用いられます。「神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ」（エフェソ 1:20、他）たのです。神の言葉は、復活の力をもって能動的・主体的に働くのです。

この能動性・主体性は、テサロニケ教会の信仰にも見られます。彼らはただ受動的ではないのです。パウロという人は、決して温厚円満な人ではありませんでした。彼が語る言葉も、決して人間的に受け入れやすいもので

| 準備のための聖書日課 |   |                   |                    |
|------------|---|-------------------|--------------------|
| 8日         | ㊦ | イザヤ40:6～8         | 神の言葉は<br>とこしえに立つ   |
| 9日         | ㊦ | ヨハネ8:39～47        | 神の言葉を<br>聞くのは誰か    |
| 10日        | ㊦ | コリント二2:14～17      | 神の言葉を<br>売り物とせず    |
| 11日        | ㊦ | コリント二11:1～11      | 熱い思いをもって           |
| 12日        | ㊦ | コリント二12:11<br>～18 | 喜んで自分自身を<br>使い果たそう |
| 13日        | ㊦ | エフェソ1:15～23       | 神の力による<br>絶大な働き    |

はなかったでしょう。そのパウロの言葉を、彼らは「人ではなく、神の言葉として受け入れた」。そこには彼らの、パウロを赦し、理解し、受容しようとする、愛の主体性があったと思われるのです。



### 「人によって成った ものではない」と 言うけれど

『新生讃美歌』（日本バプテスト連盟発行）の裏扉に「教会の約束」が載っており、そこにこんな言葉があります。「わたしたちは、教会は人によって成ったものではなく、神によって成ったものと信じます」。いかかでしょうか。自分たちの教会で起こる様々な出来事や働きを、「神の働き」「神の言葉の働き」として受け止め、理解し、受け入れることができるでしょうか。あるいは、残念ながら「人の働きと言葉ばかりが見えてしまう」ということもあるのではないのでしょうか。そのような両様の事柄について、できるだけ率直に経

験や思いを分かち合い、語り合ってみましょう。

### 主体的に受け入れ、愛すること

「教会の業・出来事は神の言葉の働きである」ということと、私たち一人ひとりが主体的に考え、働き、行動することとは、決して矛盾せず、不思議にも両立するのです。

「テサロニケ教会の人たちが、愛の主体性をもって、パウロを赦し、理解し、受容しようとした」のだとしたら、私たちも、教会における人との関係や、私たちが週ごとに行う礼拝や奉仕について、どんなことを思い、考えるのでしょうか。

# 神の言葉が働いている

聖書

テサロニケの信徒への手紙一2章1～13節

暗唱  
聖句

それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。ーテサロニケ 2：13

11課

6月14日

パウロは、引き続いてテサロニケ教会の人たちに手紙を書いています。「私たちとあなたがたとの出会いを、一言で言うならこうだ。あなたがたは、私たちが伝えたイエスさまの福音を、人間の言葉としてではなく、神さまの言葉として信じ、受け入れたのだ。神さまの言葉は、今もあなたがたの間で働いているのだ」。人間の言葉と神さまの言葉、いったい何がどう違うのでしょうか。

人間の言葉は、弱いのです。この世の力や人々から苦しめられたりすると、すぐ勇気を失って語ることをやめたり、人に気に入られようと妥協したりしてしまうのです。でもパウロは思い出すのです。「私たちはあなたがたの所に初めて来たとき、ひどい迫害と苦しみを受けていたけれど、語ることをやめなかった。言葉を割り引いたり水増ししたりもしなかった。それは、神さまの言葉の力だったのだ。決して私たちが、信仰が強く、勇気があったわけではないよ」。

また人間の言葉は、人を傷つけたり、人の価値を軽んじたりしてしまうことがあります。けれども、やはりパウロはこう書くのです。「イエスさまのことをあなたがたに語っているうちに、わたしはあなたがたのことが好きでたまらなくなった。あなたがたのためだったら、自分のすべてを差し出しても構わないと思うことさえできたのだ」。

テサロニケ教会の人たちも、パウロをこの上なく愛したのです。パウロという人



は、決して「穏やかで性格がいい人」ではありませんでした。彼の語る言葉だって、時に激しすぎて、いつでも喜んで聞けるものではなかったのです。それでもテサロニケの人たちは、パウロのことをわかってあげようとし、その言葉を努力して聞こうとしてあげたのです。それも、神さまの言葉の力と働きではないでしょうか。そんなにも神さまの言葉は、力があり、良い働きをしてくれるものなのです。なぜなら、神の言葉の力こそ、十字架に殺されて死んだイエスさまを復活させた力だからです。

こう思い起こしてきて、パウロはまとめるのです。「神さまの言葉は、今もあなたがたの間で働いている。それは、復活の主イエスさまがあなたがたの真ん中にいて、あなたがたと共に働いていくのだということなのだ。あなたがたも今迫害や苦しみの中に置かれているけれど、このイエスさまによって、あなたがたも勇気をもって福音を語り、教会の仲間たちや世の中で苦しめられている多くの人たちを愛する力をもらえるのだ」。

# 神の言葉が働いている

青少年科



聖書

テサロニケの信徒への手紙—2章1～13節

暗唱  
聖句

それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。—テサロニケ 2：13

## 聖書から…

パウロはテサロニケだけでなく、多くの教会で「神の言葉」を語っていました。しかし、パウロに敵対する人々にとってパウロが語る言葉は「迷いや不純な動機に基づくもの」また、「ごまかしによるもの」とされ、パウロは中傷を受けました。しかし、パウロはその中傷にめげずに「福音をゆだねられている」（2：4）と信じ、宣教を止めることはありませんでした。

一方で、テサロニケの人々はパウロの語る言葉を「神の言葉」として受けいれています（2：13）。パウロに敵対する人々とテサロニケの人々を対比することでわかることはパウロのみならず、語る者の言葉がどれだけ力強くても聴くものたちが主体的に聴かなければ、どれだけみ言葉が語られても、神の言葉として受け止められることはないのです。

パウロは神の言葉を「一人一人に」（2：11）語りました。これは、テサロニケという群れでなく、そこにいる一人ひとりにパウロは丁寧に語ったことを示しています。また、聴く人々も一人ひとりが自分にかけている言葉としてパウロの言葉を聴いたはずです。その両者が主体性を持って向き合う中でパウロの言葉は「神の言葉」となっていくのです。宣教とは「神の言葉」を語る者だけでなく、聴く者も問われる出来事なのです。

## 分かち合おう

- 皆さんは誰かの話しや言葉を「聴いて」いますか。聴くという言葉は「耳」と「心」と「目」で構成された言葉です。相手に「目」と「心」を向け、「耳」を澄まして相手の言葉を受け止め、全身全霊を持って相手に向き合うこと、それが「聴く」という行為です。皆さんは一体今、誰の言葉を「聴いて」いますか。また、「聴こう」としていますか。また、あなたの言葉や思いは一体誰に「聴かれて」いるのでしょうか。色々な音があふれるこの世界の中で、「聴く」ことの大切さを考えてみましょう。
- 説教者が語った言葉は絶対的なものではありません。聴衆は説教を「問う」ことが許されています。一方的に説教を聴き、その言葉を鵠呑みにするのでなく、説教者が聖書から何を「聴き」、そしてそれをどう「言葉化」して「語った」のか、また聴衆が説教をどう「聴いた」のかを率直に話し合う時を持ってみてはどうでしょうか。そうやって説教者と聴衆が相互作業で説教に関わっていくことは、説教者を励ますことに繋がりますし、聴衆にとっても説教をより豊かに聴く機会となるはずです。

11課

6月14日



# 神の言葉が働いている

聖書

テサロニケの信徒への手紙—2章1～13節

暗唱  
聖句

それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。—テサロニケ 2：13

## 聖書から…

聖書には「〇〇への手紙」というものはいくつかあります。その手紙を通してどんなことが伝えられ、そこにどんな思いがあったかが書かれています。そのみ言葉を、「神さまは今の私に何を伝えようとしているのだろうか?」と考えて読んでみます。すると、遠い昔の手紙というだけではなく、私にも神さまからのメッセージが届いていることに気が付くときがあるかもしれません。教会に来て一人ではなく、メンバーと一緒に読むことで気が付くことがあるかもしれません。どこかの誰かの昔話ではなく、今生きている「あなたがたの中に…働いているもの」という神さまの言葉を受け取れているのでしょうか? そして神さまから投げかけられている言葉にどうこたえているでしょう? 神さまとの言葉のキャッチボールのように、神さまの言葉を聞いてこたえてみる時をもってみましょう。

## 活動①

### 「お手紙が届いていますよ!」

●準備●封筒（中が透けにくいもの）、聖書に出てくる動物の名前を書いた紙数枚（絵か字）、封筒にはあらかじめ一枚だけ動物を書いた紙を入れておきます。

- ①ハンカチ落としの要領でハンカチの代わりに手紙が置かれます。
- ②手紙に気が付いたら手紙を届けた人を追

いかけます。届けた人が手紙を置いた場所に座る前にタッチされたら手紙を開けてそっと動物の名前を見てものまねをします。みんなで何の動物かを当ててください。

- ③タッチされなかったら手紙は次の人へと開けずに「お手紙落とし」が続きます。
- ④手紙に気付かずに届ける人が一周回ってきてタッチしたら、気が付かなかった人が手紙を開けてものまねします。

## 活動②

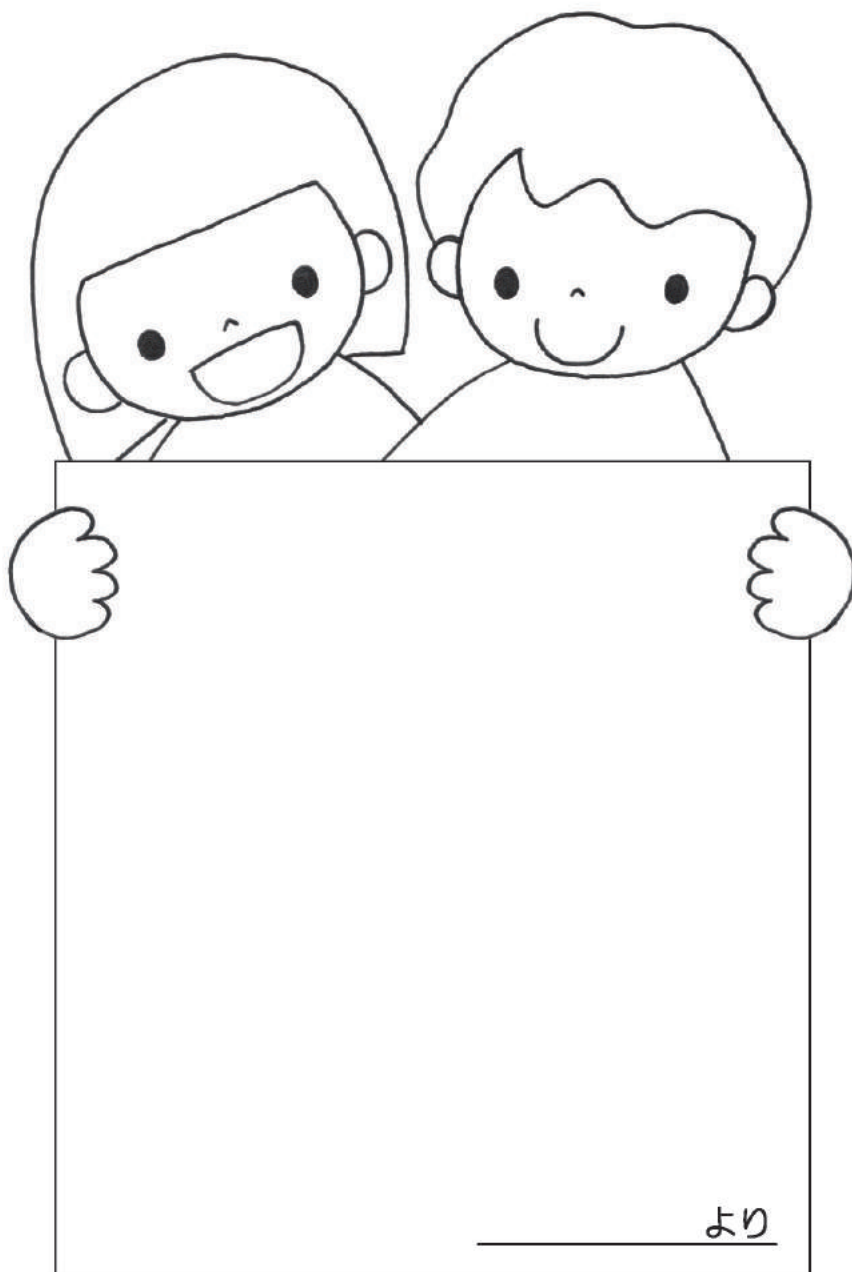
## ワークシート

### 「神さまへの手紙」

10 課で私たちはお友だちへ手紙を書きました。今度は神さまへ手紙を書いてみましょう。

- ①まず今日の聖書の箇所を読みます。みんなで読んでも一人ずつでも。低学年にはリーダーの好きな聖句を紹介してその箇所を読んでも良いでしょう。
- ②何回か読み、自由に神さまへの手紙を書きます。「聖書を読みました。正直よくわかりません」「どうやって手紙を書いたらいいかわからないからお祈りを書きます」などでも OK です。字や絵で神さまに手紙を書いてみましょう。既に私たちに届いている神さまの言葉（聖書のみ言葉）にお返事を書くつもりで。

\*手紙を書いたら封筒に「神さまへ」と書いて、手作りポストに入れても楽しいかもしれませんよ。



11課

6月14日

☐ <sup>かみ</sup>神さまに <sup>てがみ</sup>手紙を <sup>か</sup>書いてみて、 <sup>おも</sup>どう思いましたか？

☐ <sup>わたし</sup>私にとって <sup>かみ</sup>神さまって、 <sup>そんざい</sup>どんな存在？



# 主にあって立たされて

聖書

テサロニケの信徒への手紙—3章1～13節(参照2:17～20)

暗唱  
聖句

あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、  
今、わたしたちは生きている —テサロニケ3:8

## パウロの心配、そして喜び

パウロはテサロニケ教会の人たちに対する愛情と、だからこそ心配を表します。今彼ら彼女らは迫害を受け信仰の苦難を経験しているのです。「苦難に遭っていても、だれ一人動揺することのないように」(3:3)、「誘惑する者があなたがたを惑わし、わたしたちの労苦が無駄になってしまうのではないか」(3:5)。なぜこれほど彼らを心配するかと言えば、テサロニケの人たちが、彼にとって主のみ前でこの上なく愛すべきものであり、希望や喜び、誇りそのものだったからです(2:19～20)。そこで彼は、テサロニケの人たちと会いたいと熱望したのです。

けれども、何らかの事情で、パウロ自身も身動きのとれない状況にあり、行くことはかなわなかったのです(2:18)。そこで、「もはや我慢できず」「じっとしていられなくなって」、パウロは自分の代わりに「協力者テモテ」を送り出すことにしたのでした(3:2、5)。テモテは、パウロが「わたしと同じ思いを抱いている者はほかにいない」(フィリピ2:20)とまで語る人であったのです。こうしてやきもきしながら待っていたパウロのもとに、テモテが帰ってきたという良い知らせが飛び込んできました。

## 主にしっかりと結ばれて、 強く立っている

テモテが持ってきた知らせは、「テサロニケの人たちは、迫害と苦難にもかかわらず、

しっかりと主イエスを信じて、お互いの間の愛の奉仕、またすべての人々への愛の業に生きている」というものでした。このことを、パウロはこうまとめています。「あなたがたが主にしっかりと結ばれている」(3:8)。「いるなら」と、「仮定」のように表現していますが、文脈を考えると、これは「仮定」ではなくまさに「事実」であり、したがって「あなたがたが主に結ばれているなら、いや、事実結ばれているのだから」というように解するのが良いでしょう。「あなたがたは、事実主イエス・キリストにしっかりと結ばれているのだ。だから私たちはこの上なく喜び、神に心から感謝するのだ」。

この「主にしっかりと結ばれている」(新共同訳)という言葉は、「主にあって、(堅く)立っている」ということです(口語訳、岩波訳参照)。そして興味深いことに、この「立つ」という言葉は、もっと一般的に使われる「立たせる」「立てる」という動詞から派生した「新造語」だということです(岩隈直『増補改訂 新約ギリシヤ語辞典』教文館)。「立たせられて立つ」ことから言えば、「主にあって」とは、「主によって立たされ、主を土台・支えとして支えられて(立つ)」ということなのです。

## 私たちも生きることになる

さらに、パウロは不思議なことを言っています。「あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていると言えるからです」(3:8)「あなたがたが強く立っていてくれて、うれしい、感謝する」という次元を超えて、「そうであれば、わた

12  
課

6  
月  
21  
日

したちは生きることになる」とまで言うのです。彼らが信仰に強く堅く生きているという事実が、パウロに生命を与え、力と勇気また希望をも与えてくれる。つまり彼らの信仰はパウロの「生き死に」にまで関わるほどのことなのだというのです。

これは、一種の「誇張表現」であるとも言えますが、まぎれもない信仰の現実ではないでしょうか。その鍵は、あの「主にあつて」という言葉です。イエスさまがテサロニケの人たちを「堅く立たせて」くださっているのと全く同じように、同じイエスさまがパウロたちも「生かして」くださっているのです。双方を強く、愛において結びつけてくださっているのは、教会の主イエス・キリストにほかならないのです。



## 「自立」とは 何ですか？

パウロはテサロニケ教会に向かって、「あなたがたが主にあつて強く立ってくれるなら」と言います。信仰についての「自立」とは、「キリストによって支えられて立っている」ということなのです。さらに「あなたがたが立っていることは、わたしが生きることになる」とさえ語るのです。両者は主にあつて互いに結び合わされており、パウロもテサロニケ教会の人々に「支えられて立っている」のです。こうした捉え方は、私たちの「自立」という事柄に対する考えをすっかり変えてしまうのではないのでしょうか。それは、私たちの教会やこの世での生き方についてどう違うをもたらすのでしょうか。

### 準備のための聖書日課

|     |   |               |               |
|-----|---|---------------|---------------|
| 15日 | ㊦ | ローマ14:7～12    | 主のために生きる      |
| 16日 | ㊧ | フィリピ2:19～24   | 確かな人物テモテ      |
| 17日 | ㊨ | コリントー16:13～14 | 信仰に基づいてしっかり立て |
| 18日 | ㊩ | フィリピ4:1       | 主によってしっかり立て   |
| 19日 | ㊪ | テサロニケー2:14～16 | 異邦人の救いを求めて    |
| 20日 | ㊫ | テサロニケー2:17～20 | サタンに妨げられた再訪   |

## 他者の苦しみや死もまた

キリストにあつて他の人が立つことが「私が生きること」につながるなら、他者の苦しみや死もまた、私たちに深く関わるのではないのでしょうか。教会の内外で見聞きする他者の苦しみや痛み（例：災害、貧困、自死など）について、パウロなら「彼らが苦しみ死ぬなら、イエス・キリストにおいて私もまた苦しみ、死ぬことになる」と言うのではないのでしょうか。私たちは、キリストにおいて、それらの事柄についてどのように受け止め関わり、どのような慰めや希望を見出すことができるのでしょうか。

# 主にあって立たされて

聖書

テサロニケの信徒への手紙一3章1～13節(参照2:17～20)

暗唱  
聖句

あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、  
今、わたしたちは生きている ーテサロニケ3:8

12課

6月21日

今まで、テサロニケ教会の人たちとの最初の出会いを振り返ってきたパウロは、彼らを心配していました。なぜなら、テサロニケの人たちは、今とても苦しい迫害や困難を経験しているからです。パウロの彼らを愛する気持ちが、次々と手紙の言葉にこめられていきます。「あなたがたは、私にとって最高の喜びであり、誇りなのだ。でもそのあなたがたが、苦しみにあって、信仰から離れてしまったなら、また間違った教えによってまどわされてしまったらと思うと、心配で居ても立ってもいられなかったのだ」。それでパウロは、どうしてもテサロニケの人たちに会いたいと強く願ったのでした。

けれども、パウロはパウロで困難が積み重なり、とてもテサロニケに行くわけには行かなかったのです。そこで彼は、自分の若い助手で、パウロが「彼ほど自分の心をわかっている人はいない」と言う、テモテを代わりに送ることにしました。

パウロはその間もやきもきしながら待っていましたが、しばらく時間がたって、ようやく最近テモテが帰ってきたのでした。でも待っていたかがありました。テモテはうれしい知らせを持ってきてくれたのです。「先生、テサロニケの人たちは、とても元気です。いろいろな困難や苦しみはありますが、その中でも揺らぐことなくイエスさまへの信仰を守り、お互いの人たちを愛し、また教会の外の苦しむ人たちにも仕えてがんばっていましたよ」。パウロはそ



れを聞いて、心から喜び、神さまに感謝したのでした。

それを聞いたパウロは今、この喜びをかみしめながら手紙を書いているのです。「あなたがたは、しっかりと立っている。それは、自分の力で立っているのではなく、イエスさまがあなたがたを立ててくださっているのだ。イエスさまがあなたがたの土台となり支えとなって、あなたがたを信仰に強く立たせてくださっている。このことを思うだけで、私は今、『うれしい、感謝だ』ということだけでなく、『本当に生きている』と思えるのだ。なぜなら、あなたがたを立てているその同じイエスさまが、今ここで私と仲間たちを生かしてくださるからだ。それほど強く、しっかりと、イエスさまはあなたがたまた私たちと結びつき、そして私たちお互いをも愛によって結びつけていてくださるのだ」。



# 主にあって立たされて

青少年科



聖書

テサロニケの信徒への手紙一3章1～13節(参照2:17～20)

暗唱  
聖句

あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、  
今、わたしたちは生きている 一テサロニケ3:8

## 聖書から…

迫害という苦難の中にあったテサロニケの人々にパウロはテモテを派遣<sup>はけん</sup>していますが、彼が派遣されることによって、テサロニケの人々が迫害に立ち向かっていったわけではありません。テサロニケの人々は既に迫害という厳しさの中にそれぞれが置かれながらも、そこで十字架の主に出会い、力を与えられ、「一人一人が立ち上がっていた」のです。それはまさに「主に結ばれている」という経験です。それをパウロはテモテから知らされ、主がテサロニケの人々に働いておられることを確信するのです。

その確信を得て、パウロは「わたしたちは生きている」(3:8)と述べています。この言葉は「双方向<sup>そうほうこう</sup>」を思わせる言葉です。テサロニケの人々、パウロの双方がそれぞれに厳しい中にあり、主との出会いを経験し、「主と共に立つ」力を与えられました。その体験の故に、互いに「一人じゃないよ。主が共にいるよ」と励まし合いながら「共に立たされる」「共に生きる」ようになっていったのです。どちらかが一方的に助ける側、助けられる側に置かれずに、双方向に助け助けられる。そんな関係性が「わたしたちは生きている」という言葉に示されているのです。

## 分かち合おう

●迫害の中にあっても信仰に生きるテサロニケの人々の姿はパウロたちを励ましました。もうすぐ6.23「命<sup>めい</sup>どう宝の日」です。沖縄には、痛みを負わされながらも、決して諦めずに平和の道を求めている方々がおられます。その方々の姿は、テサロニケの人々がパウロを励ましたように、私を励まします。そして、ただ励まされるのではなく、どのようにその方々と連帯<sup>もさく</sup>させていただくことができるのかを模索<sup>もさく</sup>していきたいとも思われています。さて、皆さんの周りに、痛みの中にあっても希望を失わずにいる方々がいますか？ また、励ましを受ける方々がいますか？

●パウロとテサロニケの人々との関係性は「双方向」に助け助けられる関係でした。落ち込んでいる人がいる時に、私たちは安易に慰<sup>なぐさ</sup>めの言葉をかけることによって、その人の「痛み」や「悩み」を駆け足で通り抜けようとすることがあります。そのような一方的な慰めは本当の「助け」とはなりません。今、あなたは誰かと助け助けられる関係性を持っているでしょうか。誰かを「助ける」ことばかりに集中し、一方で誰かに「助けて」と叫ぶことを躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>していませんか。家族、友人、教会など、自分と他者との関係性を整理しながら、自分自身を見つめ直してみましよう。そこから何が見えてくるでしょうか。

12課

6月21日

# 主にあって立たされて

聖書

テサロニケの信徒への手紙一3章1～13節(参照2:17～20)

暗唱  
聖句

あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、  
今、わたしたちは生きている ーテサロニケ3:8

## 聖書から…

遠くに離れて暮らしていても互いを覚え祈りあう相手がいいますか？ おじいさん、おばあさん、引っ越した友だち…。近くにいないくても、人と人とがつながりを感じるように、見えなくても神さまが私とつながり、歩んでくださっています。自分一人ですきたように思う時も、見えないところで誰かの助けがあり生きている私たち。

パウロは、テサロニケの教会の人たちと会うことはできなくてもイエスさまが土台となり支え、しっかりと立っていることを喜びました。それは一緒にいることができなくても、一人ひとりが神さまとつながり、人と人とが神さまとつながっていることで大きな力をいただいて歩むことができると知ったよろこびでした。

6月23日は「沖縄 命<sup>いのち</sup>どう宝の日」です。遠い昔のことでも、沖縄だけのことでもない、私たちのこと。命が宝（大切）という当たり前のことが、当たり前とされないことがないように主にしっかりと結ばれて歩むことができますように…。

## 活動①

### 「つながってる？」

●準備●紙コップ(1人2個)、糸(人数分)

- ①紙コップで1人1組の糸電話を作り、一つのコップは自分、もう一つを他のメンバーに渡してみんなが繋がるようにします(輪になるか一列になるか人数や空

間で調整してください)。

- ②リーダーが一人にお題を伝え、次へと伝言ゲームをします(例：片足立ち、目隠し、忍者ポーズなど)。
- ③最後のメンバーまで伝わったら「せーの」で一斉に伝わってきたポーズをします。  
※糸電話なので間違っただけの紙コップで伝えようとしても通じません。
- ④全員のポーズがそろったかな？しっかりとつながっていたかな？



## 活動②

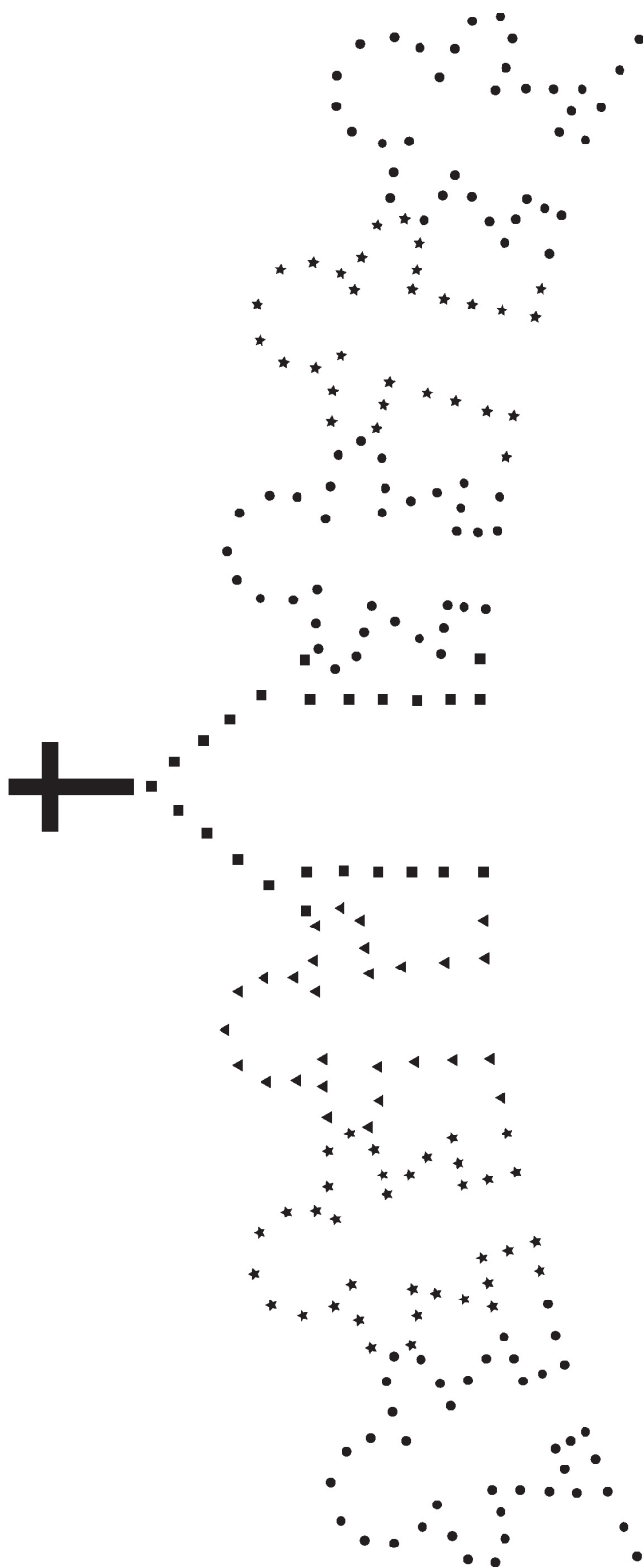
## ワークシート

### 「たどっていくと…何になる？」

●準備●ワークシート人数分、色えんぴつ、えんぴつ

- ①ワークシートの同じマークを鉛筆でたどって、つなぎましょう。
- ②そこから見えてくるものは？
- ③つなぎ終わったら、主にあって立たされる私たちの色や表情を書き加えて完成させてください。

# たどっていくと…何になる？



12  
課

6  
月  
21  
日



# 主と共に生きる

聖書

テサロニケの信徒への手紙一4章13節～5章11節

暗唱  
聖句

わたしたちが、目覚めていても眠っていても、  
主と共に生きるようになるためです。一テサロニケ 5：10

## 切なる求めに答えて

パウロは、いつも相手教会との関係の中で、彼らが直面している具体的課題との関わりの中で、福音を宣べ伝え、これらの手紙をも書きました。ここでの問題は、「イエス・キリストの再臨<sup>さいりん</sup>の遅れと、個々の信仰者の生死との関係<sup>めぐ</sup>」を巡るものでした。

このパウロの最初の手紙が書かれた50年代初めの時期、キリスト教会は「差し迫ったイエス・キリストの再臨」の信仰によって、日々の生活と活動を営んでいました。「今日か明日にでも主は来られる」というほどの切迫感でした。しかし実際は「再臨」はそこまで急には来ませんでした。すると、その再臨を待たずして「眠る」つまり「死ぬ」信仰者たちが現れたのです。「生きているうちに直にイエスさまにお会いするのが良いのだろうが、それなら先に召された者たちは、何か不都合や不利益を受けることになってしまうのではないか」。この悩みに対して、パウロが答えているのです。

とを言っています。「神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます」(4：14)。「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります」(4：17)。「主は、私たちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても(ここでは「今現在生きていても、死んでいても」という意味)、主と共に生きるようになるためです」(5：10)。

パウロがテサロニケの人たちに力を込めて言いたいことは、「イエスさまが、私たちと共にいてくださる」ということなのです。「イエスさまが、あなたがたといつも共にいてくださる。それは、わたしたちが今この世を、肉体をもって生きているか、それともすでにこの世の生涯を終えて眠りについた状態かということに、まったく関わらない。イエスさまは、私たちの生と死を超えて共にいてくださる。だから、主はすでに召された人々とも共にいてくださり、来たる再臨の日、彼らをも死の中から導き出し、復活の恵みと栄光を与えてくださる。だから、何も心配しなくてよい」。

## イエスと共に、それが肝心

今まで自分たちが信じてきた前提<sup>ぜんてい</sup>や枠組みが揺さぶられて、迷い・悩みの中にある人々に対して、パウロが「これが肝心<sup>かんじん</sup>」と言っているものがあります。今課の箇所には、3つの段落(4：13～14、15～18、5：1～11)がありますが、それぞれの段落の末尾付近で、パウロは三度繰り返してほぼ同じこ

## 主と共に生きるからこそ

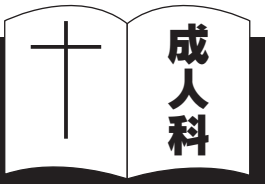
「私たちは、目覚めていても眠っていても、主と共に生きる」、これがパウロの伝えたいことです。「従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう」(5：6)。前者の「目覚める・眠る」は「生きている・死んでいる」という意味で

13課

6月28日

したが、後者の「眠る・目を覚ましている」は「望みなく生きる・信仰と希望に生きる」という意味です。ここには、「主と共に生きる」(5:10) という、信じる者たち、教会の主体性・能動性も見て取れます。「主が共に生きてくださる」という恵みの現実があるからこそ、「私たちもいつも主と共に生きる」という私たちの側の主体性・能動性が与えられ、生まれるのです。

「その時と時期については」(5:1)、人知を超えています、「あなたがたには書き記す必要はありません」。その時期が、たとえ今日、明日であっても、あるいはまた百年先、いや二千年先であったとしても、イエスさまがいつも共にいてくださることを覚えつつ、信仰と希望と愛とに目覚めて生きていくことが肝心だということです。



## 大きな変動と試みの中でも

テサロニケ教会の人たちが経験したような、私たちの考え方・生き方さらには信仰そのものを揺さぶるような、大きな社会や教会の状況の変動があるかもしれません。そのような時に、私たちを常に変わず支え導いてくれる、信仰の中心的な事柄があるでしょうか。

一つの見方として、「イエスが共にいてくださる」(インマヌエル) ということは、様々な世界観や表現方法を超えて、より普遍的で包括的な神の現実とその恵みを表そうとしたものだということです。この恵みの現実があるので、私たちは変動や試練の中でも、その

### 準備のための聖書日課

|     |   |               |                |
|-----|---|---------------|----------------|
| 22日 | ㊦ | マルコ14:32～42   | 目を覚まして祈っていなさい  |
| 23日 | ㊧ | コリントー15:12～28 | 主を信じて眠りについた人々  |
| 24日 | ㊨ | コリントー15:50～58 | 最後のラッパの鳴るとき    |
| 25日 | ㊩ | エフェソ6:10～20   | 神の武具を身につけよ     |
| 26日 | ㊪ | ヘブライ13:7～16   | 主は永遠に変わることはない方 |
| 27日 | ㊫ | ペトロ二3:8～13    | 主の忍耐に心を向けよ     |

たびに新しく、また違う表現方法やその具体的な道を模索し、それによって信仰や生活を表して、続けて信じ歩んで行くことができるのだということです。

## 主が共に生きてくださるからこそ

今週は「神学校週間」です。主が共に生きてくださるからこそ私たちも主と共に生きる。主が人々に向かって手を伸ばしておられるからこそ、私もまた、主の手と共に、その人に向かって手を伸ばすということが、私たちの「献身」ということではないでしょうか。

「献身」「奉仕」ということについて、互いに語り合い、分かち合いましょう。



# 主と共に生きる

聖書

テサロニケの信徒への手紙一4章13節～5章11節

暗唱  
聖句

わたしたちが、目覚めていても眠っていても、  
主と共に生きようになるためです。一テサロニケ 5：10

13  
課

6  
月  
28  
日

パウロのもとには、いつもいろいろな教会から、悩みや相談事が寄せられて来ていました。パウロの手紙の中には、そんな相談に答えて書かれた部分も多くあるのです。今回テサロニケ教会からも、けっこう深刻な悩みが送られていたのです。パウロは、今その答えを手紙に書いています。

彼らの相談はこうでした。「パウロ先生、困ったことが起こりました。私たちは、もう今日明日にも、イエスさまがもう一度この世に来られて、神の国を完成なさるのだと信じてきました。そして、私たちクリスチャンは、そのイエスさまの再臨のときにまだ生きていて、天のラッパがパパーンと鳴り響くと、急に復活の体に変えられて天に上げられ、そこでイエスさまにお会いするのだと信じていました。ところが、なかなかイエスさまは来ないのです。イエスさまが天に上げられてから、もうかれこれ二十年にもなります。そうしたらその間に、教会員が、再臨を見ることなく、ばたばたと亡くなっていくのです。これって、福音の約束から言ったら、あり得ないことじゃないですか」。

パウロは、少し考えてから、こう返事を書きました。「大切なことは、そして決して変わらないことは、イエスさまがあなたがたといつも共にいてくださることだ。私たちが、この世界でこの体をもって生きていても、あるいはたとえこの世の生涯が終わり、この世を去り『眠っている・死んだ』という状態であっても。そのいっさいに関



わりなく、どんなときも、どんな状況でも、イエスさまは私たちと共にいてくださるのだ。それは、すでにあなたがたのもとを去り『眠った』人たちにとっても、まったく同じなのだ。その人たちをも、イエスさまは再臨のときには、死の中から呼び起こし、復活の命と栄光を与えて、あなたがたと再会できるようにしてくださる。だから、何も心配はいらない」。

パウロは、その愛する一人ひとりの顔を思い浮かべながら、そして彼らそれぞれのために祈りながら、こう続けたのです。「再臨の日が明日であっても、またひょっとしたらずっと先であったとしても、あなたがたにとって大切なことは、イエスさまが共にいてくださることを常に信じ、どうしたらそれにふさわしい生き方ができるかと、いつも考えていてそれによって生きていくことだ。前にも教えたように、信仰と希望と愛とによって私たちが共に生きていくことだ。それでいいのだ、それがいいのだ」。

# 主と共に生きる

青少年科



聖書

テサロニケの信徒への手紙一4章13節～5章11節

暗唱  
聖句

わたしたちが、目覚めていても眠っていても、  
主と共に生きるようになるためです。一テサロニケ 5：10

## 聖書から…

テサロニケの人々は、信じていた「主の再臨<sup>さいりん</sup>」の「時」がいつまでもやってこないの「不安」になっていました。テサロニケの人々にとっては、自分たちのこだわってきたことが揺さぶられる体験です。パウロはその「不安」に対し「その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません」（5：1）と答えます。テサロニケの人々にとっては、主の再臨の「時」が近いと信じるのが、一つの信仰のあり方だったのでしょうか。しかし、こだわるあまりに、それは彼らの「束縛<sup>きくわく</sup>」にもなっていたのです。

パウロは束縛の中にある彼らに対して「主は、わたしたちのために死なれましたが…中略…主と共に生きるようになるためです」（5：10）と語り、彼らの視点を新たにし、テサロニケの人々は「主の再臨」の「時」という束縛から解放されていきます。そして、彼らは、「主と共に生きる」ことこそが大切だと気が付かされていきます。

主と共に生きる時、そこには他者もいます。他者と互いに「励まし合い」、「向上に心がける」生き方もパウロはここで語っています。このようにパウロは、「束縛」と共に生きるのではなく、主と共に、他者と共に「今」という「時」を生きていくことの大事さを人々に伝えるのです。

## 分かち合おう

●ここでパウロは「主と共に生きる」ことの大切さを語ります。しかも、「既に眠りについた人々」さえもイエスさまは「一緒に導き出してくださる」とまで記しており、「生死」を超えた関係性があることを私たちに示しています。さて、あなたにとって「主と共に生きる」「他者と共に生きる」とはどういうことでしょうか。自分の言葉で書いてみましょう。また、教会あるいは他の場所で、誰かと共に生きてもらった経験はありますか。皆さんはどれだけの人と共に生きてきたのかを考えてみましょう。

●テサロニケの人々は「主の再臨」の「時」がいつ来るのかという事ばかりに目が向き、それに束縛されていました。しかし、自分の「内側」からでなく、外側からやってくる「主の言葉」をパウロが伝えたことによって、その束縛から解放されていきました。さて、あなたを束縛し、あなたを不自由にしているものがありますか。それは一体なんなのでしょうか。どうして、それはあなたを束縛しているのでしょうか。あなたがもし何かに束縛されているならば、そこから解放されるためには一体なにが必要でしょうか。考えてみましょう。

13  
課

6  
月  
28  
日

# 主と共に生きる

聖書

テサロニケの信徒への手紙一4章13節～5章11節

暗唱  
聖句

わたしたちが、目覚めていても眠っていても、  
主と共に生きるようになるためです。一テサロニケ 5：10

## 聖書から…

悩んだり、困ったりした時、みなさんはどうしますか？ 神さまにお祈りする？ 誰かに相談する？ 自分が思っていたことと違う状況になると「どうして？」と思うこともありますね。テサロニケの人たちも「思っていた状況と違う！」という中で悩んでいました。

私たちは、生きていの中で思い通りにいくこともあれば、そうではないこともあります。思い通りにいかないとき、どのようにそのことを受け止めるかは一人ひとり違うでしょう。しかし聖書（み言葉）は「どんな時もイエスさまは共にいてくださる」といわれます。「目覚めていても眠っていても、いつもそのことを覚えて」と言われると、難しい！ と思ってしまうかもしれませんが、私たちと共に歩んでくださる方は、「今日はちょっと休憩…」という日はなく、私たちが目覚めている時も眠っている時も共に歩んでくださっているのです。

## 活動①

### 「主イエスと共に歩きましょう」

みんなで輪になって繋がり さんびか「主イエスとともに」（『ふくいん子どもさんびか』90番 いのちのことば社）を賛美します。

①「歩きましょう～」の歌詞の時だけ前に進みます。「うれしいとき」「かなしいと

- き」は手話やジェスチャーで表現します。
- ②慣れてきたら、どんな時にイエスさまと一緒に歩んでいるかメンバー 1 人に聞きます。「〇〇の時」を「うれしいときも」「かなしいときも」の後に加えていきます（ジェスチャーも）。
- ③メンバーやリーダーの人数分の「〇〇の時」を聞いて、どんな時も一緒に歩んでくださるイエスさまを賛美しましょう！

## 活動②

## ワークシート

### 「どんな時も共に」

- ①四角の中にたくさんの文字が並んでいます。縦・横・斜めに読むと言葉が隠れています。イエスさまと共に歩む時ってどんな時？ 場所やこんな時という言葉を見つけてみましょう。
- ②何にも書いていない枠に自分で問題を作り、メンバーやリーダーと問題を交換します。どんな時に「イエスさまと一緒にいてくれる」「一緒にいてほしい」と思うか、知り合うことができるといいですね。

90番 いのちのことば社  
『ふくいん子どもさんびか』



|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ね | い | つ | も | が |
| な | る | う | し | つ |
| く | ろ | ん | た | こ |
| あ | そ | び | は | う |
| り | と | い | れ | ご |



13課

6月28日

|  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |



## わたしたちが、



「わたし」  
人差指で自分を指差す



下向き掌を胸の前から



円を描くように動かす

## 目覚めていても



「目覚める」  
両こぶしをにぎり肘を張り



左右に広げる



「目覚める」  
両目元で両親・人差指を閉じ

## 眠っていても、



2指をばつと開く



「死ぬ」…両掌を合わせ



横に倒す



「眠る」  
両手親指と4指を



両目元に向け、  
付合せ、閉じる



「目覚める」  
両手人差指を立て





交互に上下させる

主と



両手親人差指先を上に向け  
「同じ」

共に



同時に指をつけて閉じる



「主」左掌上に  
立てた右親指をのせる



「共に」  
左人差し指に、右人差し指を



やや斜め右上から  
引き寄せる

生きるようになる



「生きる」  
両こぶしをにぎり肘を張り



左右に広げる



「で」  
右手の指先を左胸に当て

ためです。



右胸に移動して当てる



左手指を丸めて作った輪に



右人差し指を当てる

# 暗唱聖句 カード

新 共 同 訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

1課 4月5日



イエスは、自ら十字架を背負い、…ゴルゴタという所へ向かわれた。 ヨハネ 19：17

2課 4月12日



イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて…「ラバニ」と言った。 ヨハネ 20：16

3課 4月19日



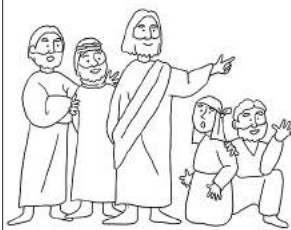
「見ないのに信じる人は、幸いである」 ヨハネ 20：29

4課 4月26日



イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。 ヨハネ 21：13

5課 5月3日



ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。 使徒 1：8

6課 5月10日



一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。 使徒 2：4

7課 5月17日



「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」 使徒 3：6

8課 5月24日



散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。 使徒 8：4

9課 5月31日



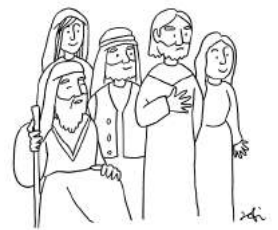
神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。 使徒 10：15

10課 6月7日



信仰によって働き、愛のために労苦し、…希望を持って忍耐している 一テサロニケ 1：3

11課 6月14日



それは神の言葉であり、また、信じているあなた方の中に現に働いているものです。 一テサロニケ 2：13

12課 6月21日



あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きている 一テサロニケ 3：8

13課 6月28日



わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。 一テサロニケ 5：10

# 暗唱聖句 カード

## 口語訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

1課 4月5日



イエスは、みづから十字架を背負って、されこうべ…という場所に出て行かれた。

ヨハネ 19 : 17

2課 4月12日



イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って…「ラボニ」と言った。

ヨハネ 20 : 16

3課 4月19日



「見ないで信する者は、さいわいである」。

ヨハネ 20 : 29

4課 4月26日



イエスはそこにきて、パンをと彼らに与え…た。

ヨハネ 21 : 13

5課 5月3日



ユダヤとサマリアの全土、さらに地ののはてまで、わたしの証人となるであろう

使徒 1 : 8

6課 5月10日



一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。

使徒 2 : 4

7課 5月17日



「ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」

使徒 3 : 6

8課 5月24日



散らされて行った人たちは、御言葉を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。

使徒 8 : 4

9課 5月31日



神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない。

使徒 10 : 15

10課 6月7日



信仰の働きと、愛の労苦と…望みの忍耐

一テサロニケ 1 : 3

11課 6月14日



この神の言は、信じるあなたがたのうちに働いているのである。

一テサロニケ 2 : 13

12課 6月21日



あなたがたが主にあって堅く立ってくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである。

一テサロニケ 3 : 8

13課 6月28日



さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるためである。

一テサロニケ 5 : 10



# 聖書教育



## 特集

### 平和メッセージ

日高龍子

### オリンピックの時期に

キム シン ヤ  
金 迅野

## 新連載

### 教会学校月間

所沢キリスト教会

### 今、改めて 「教会学校の目的」に目を向ける

中田義直

ご意見、ご感想をお待ちしております。

FAX ● 048-883-1092 Eメール ● seishokyouiku@bapren.jp (編集担当)

# 聖書教育

● 2020年2月20日発行・発売 ● 定価 1,200円 (税込)

発行人 中田 義直

編集人 長尾 なつみ

発行 日本バプテスト連盟

〒336-0017 埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4

TEL : 048-883-1091 FAX : 048-883-1092

日本バプテスト連盟 HP <https://www.bapren.jp/>

聖書教育 HP <https://www.bapren.com/>

ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp

郵便振替口座 00150-9-192579

印刷 ニューライフミニストリーズ (新生宣教団)

● 内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。

● ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。

● 聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。

©2020 日本バプテスト連盟

● 乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

● 表紙 三浦あや

● みんなで聴く聖書のおはなしカット 香月 藍

● レイアウト JC ユニット

● 幼小科ワークシート 吉崎 愛



表紙「新しい風～ペンテコステ～」